

---

# 異なる世界で

のぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異なる世界で

### 【著者名】

20585X

### 【作者名】 のぶ

### 【あらすじ】

買い物してたらいつの間にか砂漠にいた！

異世界トリップという、いかにも王道な設定です。

やや腹黒い主人公が異なる地で、力強く生きていくお話をご覧あれ。

## 蒸発（前書き）

作者の趣味全開です。笑  
文才はありませんが、ガンバルのでひとつよろしく。  
ということで、どうぞ。

『「どうですかーー、ここは?」』

私は混乱していた。だから叫んだって訳ではないんだけど。

叫んだその声は砂に吸収されて、だだつ広そうなこの地には響かなかつた。

そう、今、私は、  
…砂漠の真ん中にいる。

真ん中つて表現が合つてゐるか分からぬけど、四方を見渡す限り、砂、砂、砂！木も、ましてや砂漠定番のサボテンもない。そして八方を見渡しても、人つ子一人、虫一匹たりとも視界には入つてくれなかつた。

事の背景を言おつ。簡単に言つちゃえれば、気が付いたら“ここ”にいた。ここつてのはもちろん今立つてはいる、砂漠。

てゆーか暑い。途方もなく。

寒いからと着こんでいた上着を脱ぎ、ロンTになる。それから額と首を流れる汗を拭つた。

何でこんなことになつたのか、とりあえず整理しなくちゃ。

三日後に大学の入学式を控えた私、榎原 寧 サカキバラ ネイは今日引っ越しを終え、無事一人暮らしを始めようとしていた。

なのに、なのにー一体どんな状況だったの。

こんな砂漠、知らないし。いや、サバクつてむしろ何ですかって話ですよ。しかも買い物袋を二つ下げて、結構間抜けな図。

中の生もの腐つちやいそうだなあ。

『つて、今はそれどじろじやなーー！』

混乱は混乱を呼ぶだけ。だから、落ち着かなきや。

そう分かつてても、混乱しないはず、ない。整理どじろか余計分からなくなつただけだつた。

「わーお、でっかい声だね 」

『ウルサイイ！今はそれどじろじや…ナ、イ？』

え…今どつかから声が聞こえた気が、したんだけど。氣の所為か。あまりの暑さに頭イカれたのかも。

一人首を傾げる。だって、もう一度周りを見渡しても、やっぱり誰もいなかつたから。

## 「どうして疑問形？」

…ん？やつぱり声が聞こえたみたい。そうか、ここは天国なのか。  
天国つて花畠じやないの？三途の川だつて渡つてないのに。

いや、川はきっとこの暑さで干上がったんだな。花畠だなんて嘘  
言つたの誰だよ。こんな暑苦しい砂の世界じゃ天国じゃないじやん。

やつば死んでみないと分からぬ事実つてことなんだね。

「もしも～し？何で黙つてんの。」

空耳じゃない！確かに声が聞こえた。でも、どこから？

キヨロキヨロと辺りを見渡す。でもやつぱり砂漠には私以外何もなかつた。

「あつ、ひよつとして僕を探してんだけね。状況把握力はなかなか悪くない。

ただし、詰めが甘いね。」

何の詰めだよ。

間延びした喋り方にイライラしてきた。だつていつの間にかこんなところに立つてて、幻聴みたいに誰もいないところで声が聞こえてくるつてのに、何が状況把握力は悪くない、だよ。

「シシ『//』」の万歳過ぎて、そんな気が失せるつて。

「おーい、大丈夫～？」

大丈夫もクソもあるか！頭の配線おかしくなりそつだつてのに。

「アハハ 混乱しちゃつてるんだネ！」

いちいち頭にくる言い方すんな。いくら寛容な私でも、そろそろ  
キレたい。

「ヒントをあげよーう。」

語尾を伸ばすな！そして最後にちよつとだけ発音するな！

会話なんてしたくない、つて訳ではないんだけど。今は会話でき  
るような人物がこの人しかいない。

ただ、姿の見えないこの声の人物はものすごく面倒臭い人だつて  
分かるから、ツツ「ミはあえて心の中でしておいた。

「周りにはいない。下は砂だからいるはずもない。あと残るは？」

…まさか。あるはずない、そんなこと。

そう思いながらも、半信半疑の中ゆつくりと上を見上げた。

『～～ …ツ？！』

「アハハ 驚いてるねえ。」

“驚いてる”の域じゃないから一つ…どうやつて浮いてるの…？

てゆーか何なの、やのマヌケ過ぎる画はー

その声は見事に上から聞こえていた。

頭イカレてんのはこの人だよ。さつきは自分がと思つたんだけど、この目に見えてる状況はどうせやつても眞実以外の何物でもない。

…三輪車？

あらうじとか空飛ぶ三輪車に乗つっていたまさかのイケメンは、姿形こそギリシャ神話から飛び出して来たような神々しさなのに、見事なほどまでに残念だった。

金の髪、碧い目、纏う白い衣装。彫刻から飛び出してきたみたい。

『…あなたは誰？何で三輪車に乗つてるの？』

おずおず聞いた。声は絞り出されたよつて固く、低い。身体が強張つてゐるが、自分でも容易く分かつた。

だつて頭おかしい人だつたら怖いんだもん。世の中何かと物騒だしね。用心するのも当たり前。

でも、この状況でできることはこの人の話を聞くことくらいしかない。それに関しては至極残念だ。

「これは三輪車つて言つのかい？小さな子供が乗つていて楽しそうだつたから、ちょっと拝借してきたんだよー。この乗り心地はサイ

「一だね。

それにしても、キミは何でそんなに熱烈な視線を向けてくるんだい？あつ、もしかしてこれを狙ってるんだな。そんなに見たつてこの三輪車はあげないよ！」

『いらんつ！』

何この人。会話が一向に成立しないんですけど。

私は頭に手をあてて、お手上げのポーズをとるしかなかった。

てゆーか、拝借つて言いつつも、子供から盗んできたってことじやん！サラッと言つたけど、れっきとした泥棒だつて。マジ、面倒臭い。

『ああ、そーか。これは夢なのか。夢なんだな。もう十分満喫したから早く田を覚ませー。』

買い物袋を片手に持つて、空いた手で頬を抓つて見ると。

…痛かった。

「何を言つてるんだ。現実逃避は恥ずかしいから止めなよ。」

『あんたのそのカツコの方が百万倍も恥ずかしいわっ！』

屈辱的。大人になつて楽しそうに三輪車に乗つてるやつだけには恥ずかしいなんて、言われたくないつての。

ああ、全身の力が抜けてきた。死ぬのかな、私。

もう何でもいいからこの状況から逃げたかった。

「おつと、僕の許可なしに寝ようとするなんて、いい度胸じやないか。」

知らないって。力が入らないんだもん。とりあえず、喉、乾いた。

……水。そうか、水買つたんだつた。ガサガサ音を立てながらビニール袋を漁る。

あ、みつけた。

「ほー、無視するあげくに飲み物つて。君、思いやりがないね。」

あんたに言われたくないわ！

じとーっと睨みつけながら、ゴクゴク喉を鳴らして一気に飲んだ。

『ふはーっ。生き返るー。』

上から“おっさんかよ”なんて聞こえたけど、私、ひちひちの18歳ですから。さて、喉も潤つたことですし。

『アナタハダレデスカ？』

質問タイムと行きましょう。

「なんでカタコトなの？まあ、いいか。僕は“神”！」

What? 今何とおっしゃられた?

『か、み…さま?』

「イエス、ザシシリイト」

やつぱり、天国だったのか…うん、意識が朦朧としてきたし、そ  
うなんだよ。

私は完全に体を砂の上に放り出した。

「ちよつと、ちよつと…まだ話は終わってないぞ。」

『神様、ちよつと、『めん…くうくうしてきたし、目が掠れてよく  
見えないんだ。』

実際、もう、太陽の光が眩し過ぎるくらいしか見えない。あとは  
輪郭が全部ぼやけてる。

「ああっ、違うがない。人来ちゃったし、あとでまた会おう。僕  
の名前は“ジュノワール”。

いいか、“ジュノワール”だぞ。』

ほら、繰り返して、と言われて小さく呟く。

なんとも言い難いカタカナだな。とか、失礼な事を考えてみたけ  
ど、何だか焦つてるその人は、早口でまくし立てた。

「やつ、OK…やつ口に出して呼びさえすればすぐ行くからね。じ

あ、三輪車が去つていく。

ものすごい勢いで漕いでいる。だけど、それよりも遙かに速いスピードで進んでいた。

あれ、浮いてるし、漕ぐ意味無いよね…

力無く砂の上に放り出した身体。右手の方へと三輪車で去つていく白いものは、霞んだ田には、すでにほつきり見えていない。そして、霞んだ視界から物体らしきものが氣えつ去つた。

そして、私の意識も…

『んッ…』

「おい、大丈夫か？」

あー、ダルイ。私、何してたんだっけ？

…ああ。神様とか名乗るイケメンが現れたんだっけ。三輪車とか、浮いてるとか、奇妙な事があつた気が…

変な夢だった。目を覚ましたら、きつと！

きつと…？

『いいい、いいい…』

視界に入っていたそこは、白い部屋だった。

病院、とか？いや、ひらひらがいっぱい。お姫様みたいなベッドに横たわっている。

日本人には滅多にないと書く、天板付きのベッド。なんでそんなところに寝てるんだろう？

状況を把握するために、部屋を一望しようと体を起こした。

「ここは『デューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか?』

横からする声。感情の浮き沈みは無く、ただ淡々としている。

でも、少し待ってほしい。理解するには…ちょっとキヤパオーバーかも。容量の少ない私の脳には、かなり厳しい状況だった。

何が、どうなってるんだ?

さっきまで砂漠で三輪車に乗ったウザい神と話した夢を見て、その後は知らないベッドの上で寝てる、と。

…あり得ない。どんな状況だよ。

私が押し黙つていると、小さく“記憶喪失か?”と零す人が一人。

『てゆーか、あなた、誰?』

寝起き特有の掠れた声。相当寝てたみたい。そういうえば、酷く喉が渴く。

「ああ、自己紹介がまだだつたな。デューク王国の宫廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リックキンデル・シェパードだ。」

…今日はイケメン祭?何、この格好良い人。

さつきのアホみたいな感じで夢に出てきた神様は儂げで、綺麗な感じだつたけど、この人は、亞麻色の髪、意志の強そうなスミレ色の瞳。整つていて綺麗だけど、どこか野性味のある顔はもう、格好良いの一言に尽きる。

てゆーか、外国人？日本語喋つてる？上手すぎやしないか？

「おい、大丈夫か？」

ちつ、近い！

顔に一気に熱が集まつてきた。

あれが、外国人特有の、スキンシップつてやつか？！

私は今まで関係ないことだったから、実際にされると困惑つて。

そう思つてたのがいけなかつたんだろうね。

『だ、大丈夫だす！』

『……』

“だす”つて、みーとに囁んだ。

余計に恥ずかしくなつて俯くしかできない。

今までにないイケメンに会つたんだよ？そりや、少しくらいは猫を被つて、女の子らしく淑やかにしておきたいものだつたけど。無念、の一言に過ぎる。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかつたみたいに流された。けど、有り難いから私も何もなかつた体で答える。

『神原寧。』

「サカキバラ・ネイ?・どっちが名前なんだ?」

……?どっちも何もないでしょ。何を言つてるんだ、このイケメン。

いや、待てよ。目の前にいるイケメンさんは見るからに外人っぽい顔つき。外国だと反対になるんだっけ?

『ネイ。ネイが私の名前。』

やつとのことでそいつと、クーンは優しげな笑みを零した。

と、思つたらまた眉間にしわ。元の真剣な顔つきはどこか厳しそうだった。

「ネイ、自分の状況が理解できるか?」

至極真剣な趣。私は自分が一筋縄ではいかない状況にいるんだと思つしかなかつた。

とりあえず、目の前の人には信頼できる人間だと思う。勘、だけど。だから正直に話そう。

『…今から言ひこと、信じてくれますか？頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言います。だけど、真実だから。』

鼻がつーんつーしてきた。

混乱のせいで、普段はありえないこと、泣くなんて行為に及ぼうとしている。

だめ、泣くな。

「…とりあえず聞いひ。だから泣くな。」

顔は見えてないはずなのに、優しくかかる声。それは、涙をもつと誘うものだつた。

頭の中がぐちゃぐちゃで、どうしてここに居るのか、とか、目の前の人気がどうなのか、とか、もつともつと疑問は頭に浮かぶ。でも、とりあえず、話してみよう。そう思った。

『…これが何処だかは分かりませんが、さつきまで私、砂漠にいたんですね。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。』

そうか。私、助けられたんだ。

あのアホ神（真実か分からぬけど）が無理矢理話を聞かせようとして、炎天下の中に放りっぱなしにするからこんなことになつた

んだよ。

あやつく神様に殺されるところだった。

『でも、その前には日本つて国にいたんです。』

“一ホン？”と首を傾げる。

やつぱり。私は全然知らない土地にいる。だつて、さつき言われた國の名前なんて聞いたことないもん。それは自分が無知な所為かもだけど。

それにしても、どうして言葉が通じてるんだりうへ、私は日本語喋つてると思つただけど。さつきも思つたけど、ホントに上手な日本語話してゐるんだよね。

…ととりあえず、話を先に進めよ。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。

あそこでジユ…何とかつていつ自称神様に出会つたんです。』

あー、事実なのに、自分でここまで喋つといて、何言つてるんだこいつって思つてゐるだけど。ってことはもちろん田の前の彼は…

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

真剣な顔して悩まないでください。私だって訳わかんないんだか

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。」

イエス、ザッジライト。神様の部分は割愛されちゃってるナビ。

何度も小刻みに首を縦に振つた。

信じてもうえなくとも、事実は事実だもん。嘘はついてない。隣から大きく深いため息が聞こえてきた。

わかるよ。私はどう考えても頭がおかしい厄介者だもんね。

「二ホンに、神様、ねえ。」

うん、その渋い顔、期待通りの反応だね。私だつて訳分かつてないもん。

『あ、買い物袋がない…』

いまさらそんな心配をしてみた。だけば、その返事はすぐに返される。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるだ。」

あ、ホントだ！私の食材たちー！

日本人だつて証拠が欲しくて、早いとこ自分が正常だつて思いた

くて。必死に力が入らない身体を動かそうとした。

けど、無理なことは無理だ。

『きやつ…』

「危ない。」

ベッドから転がり落ちそうなのでひをクーンに抱きとめられた。

うわっ。筋肉しつかりついてるよ。現代男子には少数派な肉体だ  
！つて感動してる場合かー！

『「」、「」めんなさい。なんか動き難くて。』

すぐに言い訳をしてみた。けど、すぐに頭の中では、小さな疑問  
が浮かぶ。

自分で言つといでなんだけど、服が違つよつた気が？

視線を自分の方へ持つていいくと、まさかの白いワンピースのよう  
なものを着ていた。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えたに決まつていてるだ  
れなかつた。

中世のヨーロッパか！何て突つ込みたいのに、言葉は出て来てく

『ひつ。』

『あの、これを私に着せたのつて…？』

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とまは言つても女は女だ。そこはきちんと区別しているから氣にするな。」

待て待て待て。早乙女？

辞書で引いた早乙女という意味に違いない。でも、それにしても若く見られ過ぎてる気がする。

この人、私を幾つだと思っているんだ？

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

「14くらいだろ？？」

ちゅ、中学生？！確かにアジア人は若く見られるって言ひなさび、あと一年で成人ですけど。

『私、18です。』

そう言つと、あからさまに驚かれた。あんな綺麗な顔の表情が変わってくれるのは嬉しいけど、ちょっと複雑。

「…すまない。顔つきや身長から言つて、まだ成人していないかと思つた。」

うん、ストレートに言つてくれてありがと。だけビ、ちょっと傷ついたよ。

けど、笑顔を崩すことなく、気になる情報だけを聞いて行く。

『「こ」では何歳で成人ですか?』

「15だ。」

なるほど。私は「こ」ではとっくに大人になつてゐるってわけか。

『あなたはいくつですか?』

そう尋ねると、24歳だとすぐに返事が来た。

随分と大人っぽくいらっしゃる。身長も180以上ありそうだし、そんな人から言つたら、160?もない私は子供に見えるんだろうね。なんか、嫌だけど納得。

ぐー。

突然の大音響。その出ど「こ」は私のお腹だ。恥ずかしいにもほどがあるつて。

「食事を運ばせよう。」

「めんなさい。深く反省しておりますとも。けど、腹が減つては戦はできぬ、とも申しますし。

「こ」はひとつ腹ごしらえと行きませう。

その人にお願いをすると、私はだるい身体をベッドに戻した。

「大丈夫か?」

気だるそうにしていたのが気になつたのか、顔を覗き込んでくる。心配そうな田は子犬をも想像させるほど、キラキラしていた。

…ちよつと可愛いじゃないですか。

なんて思つてると、ドアがノックされた。と、続々とメイドさんが入つてくる。すぐに食事の用意がテーブルに用意されると、メイドさんたちが出ていった。

早業つ！板についた仕事つて感じ。

それに感動していると、大きく、少しかさついてる手が差し伸べられた。

「ああ、腹が減つているんだろ？食べよ。」

その言葉に嬉々として頷くと、伸ばされたクーンの手を借りてベッドから降りた。席についてから疑問が一つ。食事のセットが3つ。今ここにいるのは私と彼の一人。

どゆこと？

何て考え込んでいいと、その様子で私が何を考えているのか分かつたのか、答えを教えてくれた。

「もう一人、ここにくるヤツがいる。ネイの話を聞きたがつているから、あとで紹介するよ。ほら、待つてなくていいから食べろ。」

促されはしたけど、先に食べるのはどうも気が引ける。私が厄介

になつてるものだつて言つのに、我が物顔で一人先に食べてたら失礼でしょ。

だから、待つことにした。

「すみません。遅れました！」

…どうやらイケメン祭は現在進行形で続行中らしい。

しばらくしてやつてきたのは綺麗な男の人。銀髪で青の瞳。線が細く色が白いその人は、クーンとは正反対の性質みたい。どこか中性的な感じがした。

「遅い。ネイが腹を空かせてこると言つたのに、いつまで待たせるつもりだ。さつさと席につけ。」

厳しいお言葉ですね。

なんて勝手に私が待つことにしたくな。やつてきた人は私に“すみません”ともう一度言つと、席についた。

「ネイ、食べる。腹が減ってるんだろう?」

そう言われて頷くと。

『 いただきます。 』

手を合わせてそつと言つて食べ始めた。

うーん、味薄くないですか？いや、食べさせてもいいとこで言つ

ちやあなんだが、現代っ子は舌が肥えてると聞こますか。

ほぼ味が薄い料理の数々は、正直言つていくらお腹が空いてるからと言つても、食べ続けるには厳しいものがあった。

「ネイ、さつきの挨拶のようなものはなんだ?」

不慣れな手つきでフォークとナイフを使う私をずっと見ていたのか、クーンは手を動かした様子もない。さつきの言葉、つまりは“いただきます”が随分と氣になつてゐる様子。だから説明した。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言つんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そういうものたちの命を奪つて人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になつて私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの命を“いただきます”って言つんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるつて感謝するのですよ。

』

そう言つと、クーンはいただきます、と口にしてから食べ始めた。もう一人の人は私を微笑みながら見つめている。視線に気になりつつも、口に運ぶフォークは止めなかつた。

味気ないけど、お腹は空いてるんでね。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のものようですね。」

「さいでつか。てゆーか、誰なんだろう?」

疑問に思いながらも、味の薄さに幻滅していた。これじゃあ、食べたくても食べられないよ。うーん。少し考えてから箸をとめた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だつたじゃないか。」

いや、それはもう恥ずかしいから掘り返さないでください。今からでも穴を掘つて入りたいですか。てゆーか、せっかく用意してくれたのに残すのは失礼だよなあ。でも味が…

……！思いついた！

私は買い物袋をとつてきて、中を漁る。突然の行動に、一人は固まっていた。

「ネイ？」

不思議そうに見つめてくる。けど、私は構うことなく自分の作業に没頭した。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

訝しげな表情。

そりやそーだ。見たこともないものが並んでるんだから。

私は嬉々として説明を始めた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、

『醤油に味噌です。』

ここに来たのが買い物帰りで良かつた。何にもなかつたから、必要な物をまとめて買ってたんだ。できれば普通に自分の生活の中で使いたかつたけどね。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなつて。』

言い訳ですけどね。味が薄いから、なんて正直に言つたら失礼極まりない。

興味深そうに見ている一人に説明しながら、使ってみることにした。

まずは…スープか。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心何にでも会つ万能調味料です。』

そう言つて、自分のスープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなつた液体。それを口に運んで、少し嬉しい気分になつた。思わず笑みが零れる。

でもやっぱり一人は不思議そつだつた。

私は構つことなく、サラダにはマヨネーズをかけ、バターで和えたポテトのようなものにケチャップをかける。口に運んでみると、どれもしつくりきた。

『…食べてみます?』

あんまりにも強い視線に耐えられなくなつてそう言つた。すると二人はすぐに頷く。

「どうやらイケメン一人は、好奇心旺盛なようだ…と心のメモに書き込んでから、行動に移す。

私はスプーンでスープを掬うと、中性的な人に差し出した。

少し困ったような表情。

「あ、マナー違反? でも差し出しちゃつたし。いまさら引っ込められないって。

差し出したままにしていると、ゆっくりとスプーンに口を寄せてきて、飲んでくれた。

それを確認すると、今度はもう一人の方にサラダを差し出す。さつき見ていたからか、気にすることなく口に運んでくれたので、腕は疲れずに済んだ。

あれ、反応なし?

一人を交互に見る。すると、少し止まつていた。

あらら、お口に合いませんでしたか? そつ心配していると。

「「おいしい…」」

『そうですか。それは良かった。』

そーでしょーとも。

私は満足げに笑みを零すと、残りの物を胃袋に納めに掛けた。  
一人が物珍しそうな顔をしてたから、私は尋ねてから同じように  
調味料をかけてあげる。

すると、嬉しそうに食べ始めたから、一足先に食べ終わった私は  
その食べっぷりをのんびりと眺めていた。

「「「」」馳走をまでした。」「

食べ始めと同じように私の真似をして挨拶をすると、メイドさん  
を呼んでお茶を淹れてもらっていた。お茶くらい私にだつて淹れら  
れるのに。

不躾なのだろうがじーっと観察していると、お茶を淹れて空いた  
お皿を手に取ると、早々と去つて行つてしまつた。

「ネイ、本題に移らせてもらひや。」

改まつた態度に私もキュッと体を縮こまらせて、一人を見据えた。

…イケメンに視線を向けられるのって、居心地悪い。こっちが見  
つめて目の保養にする分にはいくらでもいいのに。

「「」今は神宮のレークサイド・マカリアスだ。」

一時間近くもずっと一緒にいて、しかも食事を共にしたのにも拘らず、漸く名前を知ることができた。

それにしても、「う、何て言つんだろ?... 神々しい、よね。さつきのあほ神様よりも神様っぽいし。クーンって人と並んでも見劣りしないその姿に、圧倒された。

なんか、私、ふつーだよね。

ちょっと淋しく悲しい気分になつていると、何事もないかのようには進められていた。

「砂漠で倒れていたネイを回収したのは私だが、砂漠にいるのを視たのはレークだ。」

“私”?さつままで俺つて言つてたのに。俺つて言つてた方が、見た目に合つてたからなんか勿体ない。

でもよく分かんないけど偉い立場にいるみたいな雰囲気だし、なんかしきたりとかがあるのかもしねー。

レークつて言つから人に目を向けると、ぱちり視線が合つてしまつた。

「こうこうと笑われると、俯くことしかできない。直視できません!」

「私が盆の前に立つていると、誰もいない砂漠に倒れている貴女が

視えました。知らないと思いますが、あの砂漠は誰も通らないんです。」

「… そうだったんだ。誰もいないところに倒れてるなんて、死んでたつておかしくない。」

『助けていただいて、本当に有難う御座いました。』

頭を深々と下げる。状況が飲み込めなかつたとはいえ、もつと早くにお礼を言つべきだった。

失礼極まりないよね。

「ネイさん、とお呼びしても構いませんか？」

そう尋ねてからレークさんは話し始めた。

「本来ならあの盆には滅多に一人の人間だけが映し出されることはあります。使えるのが私だけなので周りの人間にはバレていませんが、これが知れ渡ると大変なことになります。」

「… なんかよく分からんが、大変な事に巻き込まれた? そんな感じは否めない。」

二人の顔を見ても、『冗談だ、とは言つてくれなさそうだった。』

「鏡盆には本来、たくさんの人間が映し出されて、国や世界の状況を知らせることしかできない。」

眉間にしわを寄せていうクーンさんの表情からして、深刻な事態

なのが良く分かつた。

もし何かあつたら、あのアホ神、何をして詫びてくれよつか。た  
だじや済ません。

「この国の言い伝えでは、鏡盆に映つた人間は、神からの声を届け  
る預言者だと言われている。」

もしや…？

少し俯いた状態から、田線だけを一人に持つていく。

つーやつぱり！

「察しの通り。預言者はつまり貴方ということになります。 そうな  
つた以上、貴女が映し出された鏡盆は、最初の神の啓示があるまで  
使用できません。

砂漠に倒れているところを保護していることにするので、まだ上  
の人間には話していません。しかし、知れ渡つてしまつのも時間の  
問題でしょうね。」

明るい笑顔で言わないのでください。まじ、厄介すぎるから。イケ  
メンだから直視できないとか、もう関係ない。

私なんて、この前まで単なる一女子高生だったんだよ？

それが急にこんな見知らぬ土地にやつてきて、おまけに神の声を  
伝える預言者だなんて言われて。脳内の考え方する部分の容量不足。  
はい、きやぱおーばー。脳みそぐるぐる。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まつた。詳しい話はまた明日にでもしよう。」

「ネイ、疲れているようだから、もう寝る。」

「その心遣いに、涙が出てきなつた。」

「そんなん！情報がなければ私の研究は進まないのですよ。」

「なんだ表情を浮かべるレークさんに田線だけ向けて諫めると、部屋から追い出した。」

「おー、強引だな。」

「なんて他人事みたいに思つていいと、また手を貸してくれ、ベッドに戻してくれた。」

「…眠れそうか？」

「あー、心配してくれる姿も様になつてますねえ。漸く見慣れてきた私は、少しだけ笑顔を浮かべて。」

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

「そう言つた。」

「ネイが混乱しているのは分かつていたのに、一ヵ月の事情で長話に付き合つてしまつた。礼を言つのはじめの方だ。有難う。」

慈愛に満ちた様なその微笑みにどこかを掴まれた気がしたのは無理もない。

イケメン祭はこれにて終了としていただきたいですね。これ以上何かあると、心臓が持ちそうもないもん。

そんなことをぼーっとして考えていると、クーンさんは手を伸ばして頭を撫でてきた。

「……っ！格好良いじゃないですか。微笑みながら、頭撫で撫で、つて反則でしょ。

顔に一気に熱が集まってきた。だから、顔を隠すために俯く。

本当は布団に潜り込みたかったけど、クーンさんの手がまだ私の頭を撫でていたから堪えた。

「……、絡まつているな。少し待つてる。」

何の事かと思つて、赤くなつた顔を隠しつつ、その行動を横目で追う。近くの化粧台まで言つて櫛を持ってきたクーンさんは、ベッドの上に座り、私の髪を丁寧に梳き始めた。

もうりん私はされるがままになり、身体を強張らせる。

「……綺麗な髪だな。」

髪を梳き終わつたらしく、もつ一度頭を撫でると、お休みと言つて出て行つた。

『～～～～～』

声にならない叫びをあげると、今度こそベッドに潜り込み、布団に包まる。心臓は壊れそつたほど強く、早く脈打っていた。

「おはようございます。」

田を覚ましたら、ベッドの傍らに女の子が立っていた。

『おはよ、了起来ます…?』

その元気のこころ。にっこりとした満面の笑みに圧倒された。

「もう田も上がっています。そろそろ起きても良い頃合ですよ。」

指差された窓の向こうには青空が広がっている。差し込む光から、太陽が大分高い位置にあることが分かった。

それにしても、まずは…

『あの…どちら様でしょつか?』

生憎昨日の状況は田が覚めるまで、夢だつて思つてた。結局この部屋にいることが分かつたから、ちよつと落胆。で、起きた途端に知らない人。

混乱、混乱。つてなわけで、早速質問しました。

「失礼いたしました。」

きゅっと唇を結び、真剣な表情になる。そんなに畏まらないでほしーんだけどネ。こっちも緊張しちゃつから。

「今日付けでネイ様のお抱えとなりました、お世話役を務めさせていただきます、女官のミコアと申します。」

丁寧に挨拶をされ、思わずつられて頭を下げる。そんな私の行動にびっくりしたのか、ミコアは焦っていた。

必死な言葉に驚きながら、私は頭をあげる。そこにあるミコアの顔は随分と困っていた。

でも仕方ない。

こんなに丁寧に挨拶されたことないもん。そりゃ、同じように返すつてのが、道理でしょ。」

それに、聞きました？私がメイドさんを抱えるとか言つてましたよ！？…って誰に話しかけてんだか。なんてノリツツミミみたいなことしてみたり。

「ああ、ネイ様。お着替えいたしましょう。」

『ネイつて呼んでください。私、様付けで呼ばれるような人間じやないですから。』

さつきから歯痒かつた。私、偉い人でも何でもないし。

でも、ミコアは了承してくれなかつた。

「分は弁えなけねばなりません。」

どうかお許しぐださい、と言つたミコアは、今度は頭を下げる立場になつていった。

そんなにこだわることなのかなあ。きっと、この世界には階級制度があるんだろうな。

私はそんなものがある口常にいなかつたから、それがどんなものかなんて分からぬ。でも、ミコアのこの行動にそれが垣間見えた気がした。

『…わかりました。』

『…言ひしかなかつた。』

だつて、この所為でミコアが何か言われたら嫌だもん。これからもつと打ち解けられたらいいなあ。

「さ、着替えましょう。」

そこからが地獄だつた。

どれにしますか、と言われて開けられたクローゼットの中にはまさかのドレス。

こんなのは着たことないし！てゆーか、是非パーカとジーパンで！なんてのはムリみたいで。

ミコアの恰好を見ても、足が見えていないくらい長いスカートをはいでいる。この世界の恰好は厄介そうだ。

「あつとんの白い肌には何でも似合いますよ。」

えつ？なんか嬉しそう？とか思つた私が馬鹿だった。

ミコアの性格はちょっと厄介。（すみません、でも事実。）純粋に楽しんでいるから、止めてとは言えなかつた。

でも、着せ替え人形みたいになつてゐる間に、いろんなことを話せたからまだマシかな。

ミコアは20歳らしい。大人っぽいのに、行動に幼さが見えるのはそういうことか。それにしたつて胸あるし、色気が半端ない。

世の中つて不公平だ。平たいわけではないのに、ミコアよりも少々淋しい自分の胸元が空しい。…目を逸らす事にしよう。

結局、争つた結果、私の主張に負けたらしく、スカートが膝下くらいいのものを選んだ。

本来は女性が足を出すことはないらしい。でも、あんなの着てたら動けないじやん。私が大人しくしていらっしゃる訳がない。

…血漫げに言つてじやないけど。

白いワンピースを着せられ、今度は化粧をさせられた。ふわふわなスカートはバレエみたいだなあと思つたけど、口に出したら不思議な顔をされてすぐに口を噤む。

「うやうやしくの世界にバレエはないらしい。だから、踊りみたいなもの、と言つてこまかした。

「最後に髪を結いましょう。」

「この国では長い髪を結わないのは礼儀に反するらしい。じゃあ、髪が短い人はどうするんだろう、って思うけど、髪が短い人は基本的にないんだって。変なの。

髪を梳かれながらボーッとしていると、後ろから唸り声が聞こえてきた。

『…どうしたの？』

「いや、この綺麗な髪を結つてしまつのは勿体ないと思いまして。編み込むと跡が付いてしまつやつで。」

気にあることでもないのに…どうこねば。

『昨日、クーンさんも言つてた。』

鏡に映つてくるミコアは目を丸くしていた。

なんか変な事言つた？

『どうしたの、ミコア？』

不安になつて声をかける。ミコアは驚いた顔をしたまま口を開いた。

「…クーン魔道師さまはネイ様の髪に触れたのですか？」

『うん、どうして?』

ミコアはやつぱり驚いた顔をしていた。

クーンさんはなんかコウメイジン、みたい?それに、年じろの女性に男性が触れることは、めったにないと言つ。それって、現代日本じゃ考えられない事だよね。

「クーン魔道師さまは女性に触れることは滅多にありません。舞踏会では断れない時ののみ、夜会に至つては義務でない限り出席いたしません。

生理的現象の解消の時のみ、女性に触ると有名ですね。女性たちはクーン魔道師さまが誰と結婚するのか気にしています。

人気がありますから、女性たちは競つて気に入られようと/orするものが現状です。」

ほー・・・あの姿じや当たり前だよね。

それにしてもミコア。

『一気に喋つたね。』

当たり前です、と言つて、得意げに続けた。褒めた訳じやなかつたんだけどねえ。

「女中内でも有名なお話ですもの。女人たちはみんな噂話が大好きですから、嫌でも耳に入つてきます。」

やつなんだ。まあ、女人の性つてとこだよね。

それにしても氣になることが一つ。

『“生理的現象の解消”つてナニ?』

理解できなかつたことを尋ねると、リコアは渋い顔をしていた。  
なんだあ、その顔は?

そう思つてこると、大きなため息を一つ零した。

「…ネイ様はまだ知らなくてよ」とです。」

そう言われちゃえばもつ何も聞くことはできなくて。髪をひとつ結うかといつ問題にまた論点が向けられた。

『ポニー・トールにしていい。』

わづ開きと、返事を聞かなくてままでつべん付近で縛つた。

「うーん。」

ちよつと歎ましげ。ダメ、だつたのかな。

「それはそれでネイ様の差見の艶やかさを引き出しあつりますけど、髪は全てきつちつまとめてしまつのが当たり前です。」

そつか。なんかいろいろあるんだね。服装は妥協してもうつたんだもん。ここは従つておくれべきだよね。

そう思つた私はそのままお困子にしてござる。『コトヤサバンで固定するのを手伝つてくれた。

「よくお似合いです。」

…褒められたと、どんな反応していいか分かんない。

社交辞令だつてのは分かつてゐるんだけど、照れくさかつた。

「失礼します。」

ノックの音と共にドアが開いた。

居候の立場で何だが、ドアは返事の後に開けて欲しい。

もし着替えの最中だつたらジーすんの。私、仮にも一応女の子だよ~とは言えない。

「おはよ~」やれこめす、ネイさん。よく眠れましたか?』

朝から眩しいほどの笑顔。随分と『機嫌な感じがした。

『おはよ~』やれこめす、レークさん。』

私を見てから顎を、支度は終わつたよつですね、と言つた。

「朝食を運ばせましょ~。クーン殿も早朝会議が終わつたらこちへ来るそ~です。その後の予定は、私が管理させていただきますね。」

なるべく。やつらが、昨日私に聞きたいことがいっぱいあるって言つてた気がする。自分の研究がどう、とか。

その時間がやつてくるつてことで、レークさんは田に見えて生きしてゐみたいだ。どうやら私は貴重な研究材料らしい。

## 妖精 その2 (前書き)

明日提出の課題が終わっていない  
しかしこいつはサクサク進む。笑  
では、続きをどうぞ。

「悪い、遅くなつた。」

嫌な思考を遮るかのように、今度はノックもなくドアが開いた。  
お前もかーと直つしき ロリはむちろん言えるわけもなく。私はお  
はよつゝれこます、と朝の挨拶をするだけだった。

そんな姿を見かねたのか、これまで口を開かせていたミリアが口  
を挟む。

「おー一方とも、女性の部屋を訪れるのはいけないことではあります  
んが、ノックと返事を聞いてから扉を開けることを忘れないで下さ  
いまし。」

もし着替えの最中だつたりぬけるおつもつですか。」

そういひ、朝食の準備をしてきます、と残して出て行つてしま  
つた。

ちよつゝ、ミリアー言い逃げはなによーこの空氣をどうしてくれよ  
うか…

紛れもなく氣まずい雰囲気が部屋一杯に充満していた。

「…すまなかつた。」

しゅんとして謝罪を述べてきたのはクーンさん。

「……………」

美形は何しても許せる気がするのは私だけだろうか。いや、確かに例外（アホ神）もいたつけ。ま、どーでもいいことは置いとこい。

『あの、大丈夫ですから。でも…着替てるといつは見られたくないの、今度からはお願ひします。』

てゆーか、見たくもないもん見せられる方が可哀相だしね。見て減るものじゃないって言ひけど、見られて減るものならとっくに悲惨なお腹を晒してやる。

でも、そんなの見た人の方が不愉快でしょ？つてなわけでお願いに至った。

その後にレークさんも謝つてくれ、三人で朝食をとる。私が違うところから来た事を知らない人に話を聞かせることはできないため、クーンさんは人払いをしていた。

もちろんミリアも。ちょっと淋しく思つたけど、味氣ない食事に日本製の調味料を加えるのにはちよつと良かつた。

最早口を開いたのはクーンさん。

「ネイの立場はレークの再従兄妹くはと」・またいとじへと書つことになつた。遠い土地からやつて來たので、この国のことなどよく知らないという設定だ。」

あいあいあい。立場を『まかす為の嘘つてことですね。了解いたしました、と肯定するために首を縦に振った。

力チャ力チャと音を立てながらナイフとフォークを扱う。確かにフランス料理のマナーだといけないことだった気がするけど、生憎こつちは毎日箸を使って食べるという文化に染まっている。

今さらだけど、日常でたとえナイフとフォークを使っていたとしても、ファミレスで、とかで、マナーを習ったことはせっぱりない。ごめんなさい、と内心思つておきながら、口に出すの』と『は言い訳じみてて気が引けた。

「この後のことはマークに頼んである。ネイは心おきなくこいつに迷惑をかけるといい。

僕と夕刻には顔を出す。それまで、この世界について知りたいことを聞き、自分の状況を把握して、俺たちに話してくれ。』

いいが、と聞かれ、大きく頷いた。昨日の私のあり得ない戯言を信じてくれているだけで嬉しい。なのに、それに加えて私を支えようとしてくれてる。

もう、感謝、の一言しか出でこない。

だから。

『…有難う御座います。』

深々と頭を下げる。座っている状態だったから、テーブルに頭が

付べりざりまでだけ。

すぐに頭をあげる、と言う声がかかり顔をあげると、気難しそうな顔をしているクーンさんと、にっこり微笑んでいるレークさんがいた。

「ネイさんは私の再従兄妹なんですから、親類に感謝の言葉など不要です。さあ、朝食を続けましょう。」

優雅に食事を続ける姿を不躾ながらにじーっと見つめてしまい、クーンさんが私のことを見ているなんて気が付かなかつた。

食事が済み、昨日と同じくお茶を飲みながらのんびりとしているヒノックの音が部屋に響く。それは返事を待たないまま開いた。

…」この人たちは礼儀を知らないのか？

なんて思つていて、クーンさんに向かつて似たような紺色の制服らしきものを着ていてる男の人が近づいてくる。片膝を立てて傍らに膝間づくと、用件を述べよつと口を開いた。

「宰相殿がお呼びです。」

「用件は？」

「大臣たちが疑問の声を上げているようです。昨日のドラゴンの使用についてと、城を抜け出した件について。

早急に、とのことで、失礼ながらも朝食の時間に参りました。」

「 そ、う、か。」

一人のやり取りを見ながら交互に見てしまった。映画のワンシーンみたいでちょっと格好良い。

ボーッとカップを持ちながら見ていると、足元に何かがトンッと当たった。

『……？』

ああ、そ、う、か。あんまり見ていちゃいけないってことね。

私の座っている椅子を軽く小突いたのは、紛れもなく今も優雅にお茶を飲んでいるレークさんだった。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

“は、つ”と返事をすると、男の人は私を一警してから大股で出て行つた。

誰だお前つて目は痛かったけど、私の方こそ誰だお前つて感じ。招かれざる客かもしれない。私だって不本意に訳も分からず、右も左も何も分からぬ状態でここにいる。

それでも、客の部屋だと言つことを忘れて欲しくなかつた。

……なんて、お世話になつていて私、勝手だなあ。

「毎にここへ来るのは難しくなりそうだ。」

ため息と共にカップを置く音。その眉間に皺が寄っていた。難しそうな顔はそれでも画になつてゐる。

けど、そのうち心労で倒れたりしそう。さつきの人の態度とかだと、偉い人みたいだから、板挟みとかにならなきゃいいけど。

立ちあがつたクーンさんを見上げると、一瞬だけ表情を緩め、おでこを軽く撫でた。

「その服も髪型もよく似合つてゐる。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

やつとつだけ言つとやつと行つてしまつた。途端に顔が熱くなる。

何その顔、何その台詞…それこそ言い逃げだつて。

『……』

声にもならず悶える。カップのお茶はもう温くなつていた。

「クーン殿があれほどまでに気を許してるのは珍しいですね…とにかく、その反応は何なのですか。」

別段気にすることなどないでしょう、と尋ねてくるレークさんの反応に心地よいとした、つて思つて…

イケメンは田に入れ過ぎると痛いことがよく分かつた。学習して、次からは直視し過ぎないようになつた。私の心臓が持ちません…

スー、ハー、と深く深呼吸。心を落ちるさせるためにはこれが一番効く。

ようやくそれを止めて田を開くと、レークさんはずつといつちを見ていたみたいで、不思議そうな顔をしていた。

『すみません。落ち着きました。』

謝罪の言葉を述べると、もう一杯飲むために女中さんに頼んで淹れてもうひとつ、一人きりになつた部屋で面白そうな顔をしながら質問してきた。

『随分と混乱していたようですが、どうかなさつたんですか？』

『どうもこうもないよ。つてのは説明にならないよね。てゆーか、そこ聞くんですか。』

『いやー、男の人に触れられたことなんてなかつたものですから、少々混乱してしまいました。』

『家族に男性はいらっしゃるでしょうか？』

『はい、いますとも。』

お父さんがいますけど、そんなに関わりないし。

『年齢が近い男性、しかもイケメンなんて、私の周りには未だかつて存在したことなんてありません。』

だからビビリも緊張してしまつて。』

さう言つと、また首を傾げてさる。ビビリがいる人たちとは価値観が違つみたいだ。

「いけめん、とは何ですか？」

…あ、セニですか。イケてるメンズ、なんだけれど、めりやくひかな日本語は云わらなことか。

つてゆづか、今からだけビビで言葉が伝わるでしょうか。

『クーンさんもレークさんも格好良い、と云ふ云わるでしょうか。

うーん、顔が随分と整つてらっしゃるから、じーっと見られると、平凡過ぎる私にしたら心臓に悪いんです。

きっと一人はおモテになるでしょうから、そんなことを思つて勝手に緊張している私がいけないんです。慣れてきたらきっと大丈夫ですから、気にしないでください。』

さう一気に言つ終わると、一息ついて、お茶を口に含むとする。けど、猫舌な私はふーふーと息を吹きかけて冷ます破顔になつていた。

「“おモテになる”？」

あー、伝わらないんだ。今度からおもととした言葉に直さなくちや。

まだ不思議そうにしているレークさんに、女性に人気で、たくさん言い寄られていそう”な事の意だと伝えると、納得したように頷いていた。

やつぱりモテるんですか。

ヒカル。

『私、日本語を話しているつもりなんですが、ビデオして言葉が伝わってないんでしょうか。』

大き過ぎる疑問。さつき、レークさんの口元を見ていたら、明らかに日本語じゃない動き方をしていた。

ヒカル。

レークさんたちが喋っているのは日本語じゃない。じゃあ、どんな言語を喋っているの？それがどうして私に伝わっているの？疑問は膨らむばかり。

やつとそれはレークさんも一緒に。

今夜は徹夜だ！

## 黙舌（前書き）

クーンチャードのお話です。

レークに言われたことは俄かに信じ難かつた。鏡盆に一人の女の子が映し出されたと言うのだ。

これは単なる神話ではなかつたのか？

そう疑問に思いつつも、鏡盆を除くことができない俺は、指示に従つて動くことしかできない。

誰も通らないはずのショーラスバンド砂漠に黒髪でおかしな格好をした女の子がいるはずだと言われ、俺はすぐさまに国所有のドライブンを一匹押借した。

その所為で今審議に巻き込まれてしまつて いるのだが。

「宫廷魔法師及び、騎士の一等指揮官でもある貴方であらうとい  
かなる理由があつても『リーダン』を自由に使えるはずはないと思われ  
るのですが？」

これは吾輩の判断が間違つてゐるのだろうか。」

ちつ、狸ジジイめ。

先程からつらつらと告げているものを聞きながら、自分の思考に耽つた。

赴いて行つた砂漠には本当に不可思議な格好をした女の子が倒れていた。と、言つことは、神話が実現してしまつたのだ。

あり得ない。

そう思いながら、倒れている女の子に近寄つて声をかけた。

「大丈夫か？」

女であるにもかかわらずズボンを穿いている。まずここがあり得ない。それに加えて素材が分からぬ袋、明らかに造りがおかしな鞄。

…まさか、本物か？いや、それは少女に聞いてみてからの判断だろ？。まずは取り急ぎ運ばなければ。

「大丈夫か？」

もう一度問うと。

『待ちやがれ、アホ神…』

空耳だと信じたい。

耳を疑うような神を冒流する言葉と、口調もしかして下級市民か。いや、それにも格好がおかし過ぎる。

『……んつ、暑……』

本人に聞くしかないのか。そう思いドーラゴンに乗せると、急いで都へ戻った。

そこからが大変だったのは無理もない。

ドーラゴンを返しに行くと、飼育係に泣きつかれた。俺が責任を持つ、と言い残して、少女に目がいかないようになると、なるべく勤め、使われていらない客室に連れていいく。

レークの幼馴染みが女官を務めているのは助かった。世話を頼むと、何食わぬ顔をして常務に戻る。その時はまだドーラゴンのことはバレていなかつた。

ルイス派が何か嗅ぎつけたのもしれないな。あいつは少々厄介だ。

仕事を終え、真っ直ぐに客室へ向かう。いつにもまして終業が遅くなつたため、もう目を覚ましているだらうと寝室へ向かうと、その少女は目を閉じたままだつた。

……憐れだな。

見てまずそう思った。

抱きあげた時には羽が生えているかの」とく軽く、感触からして

華奢だと分かった。身長もそつと高くはない。

さつとまだ成長途中なのだらつ。

そう思つて不羨にも見つめると、眉間にしわが寄る。

肌は白く透き通つていて、唇は果実を思わすよつて色合つても良い。黒髪は艶やかさが際立つていた。

…触つてみたい。

そんな衝動に駆られてから、いくら少女だからと言つてそんなことをしていいはずがないと自分を叱責した。

それからどれだけ時間が立つたのだろうか。じつと見つめていた少女は顔をしかめる。それから小さく声を漏らした。

『んッ…』

その直後に長いまつげに縁取られた目は、少し眠たそうに開いた。

「おい、大丈夫か？」

もう一度声をかける。しかし、よく眠つていたようだし、まだしつかりと頭は働いていないらしい。

しばりへじて大きな目をむき大きく開くと。

『うーん、どう?』

そう呟いた。その声は掠れていたが、どこか引き込まれてしまつ  
ような甘い声。少女にぴったりだと思った。

「……はテヨーク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか?」

身体を起こし、それから俺をその瞳に移した。よつやくこの場に俺がいることを知つたらしい。だが、俺が言ったことに微塵も反応しない。

もしかして、記憶喪失、とか？砂漠に倒れていたくらいだし、何があったことは明白だが、まさか、盗賊に襲われて捨てられた、とも言うのだろうか。

『てゆーか、あなた、誰?』

少し古つぽらざな言葉使い。しかし不思議と不快には思わなかつた。

「ああ、自己紹介がまだだつたな。デューグ王国の宫廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リッキンデル・シェパードだ。」

せつかへの述べたのと、反応を示わない。俺の顔をじっと見つめてくるよつだ。

：何か付いているのか？

しかし、その魅力的な瞳に見つめられていると、どつも居心地の悪さを感じ、口を開いた。

「おい、大丈夫か？」

まさか、どこか具合の悪いところが？

ぐつと身体を前のめりにして様子を伺おうとする、顔を赤く染める。

まさか、熱が出たしたのか？と、思ったが。

『だ、大丈夫だす！』

『……』

思い切り噛んだようだ。見ず知らずの男がいるわけだし、いつの間にか知らない場所にいた。混乱している上に、きっと緊張しているんだろう。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかつたように会話を続けた。いつのことは気にするべきではない。それに、何事もなかつたような顔など、し慣れている。

その様子にホツとしたらしく、今度は間髪開けずに質問に答えてくれた。

『ネイ。サカキバラ・ネイ。』

「サカキバラ・ネイ？ どっちが名前なんだ？」

とつとつと疑問をこぼしていた。

名前の形式として、どこか不思議な音を持っているそれは、発音

し難い。そして、“サカキバラ”も“ネイ”もどちらかにはりそなものが、名前としては違和感を持つ。

少女は不思議そうな顔をしながら、考え抜いた挙げ句に答えた。

『ネイ。ネイが私の名前。』

やつとのことでやつを、真つ直ぐに俺を捉えて離さない。その瞳は濶みなく輝いているように見えた。

思わず笑みがこぼれてしまった。そして、いつになく珍しいことをしてしまったと思い、いつもの表情に戻す。それから質問の続きをへと戻った。

「ネイ、自分の状況が理解できるか？」

考えてこる様子から、全く理解できていないことが伺える。いつも時は急かしても無駄だらつ。

『…今から言つこと、信じれますか？

頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言っています。だけど、真実だから。』

考え抜いたのであるのをそのままの言葉に、疑問を持った。

“信じてもらえない”ことを話す。それはきっと勇気がいるのだらつ。瞳には涙が集まっていた。

零れさせまいと我慢している姿は抱きしめてやりたい衝動にから

れた。それを何とか引っ込むと。

「… とりあえず聞こう。だから泣くな。」

そう言った。なるべく、感情を見せないよう。

もつじしばりく耐えるような表情を見せて、それから語り出した。  
『「こ」が何処だかは分かりませんが、さつきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

別段気にすることもない、普通の話だ。それも真実に則っている。

『でも、その前には日本つて国にいたんです。』

“二ホン？”

次に述べたことは、理解できないものだつた。二ホン、とはどこにある土地のことだらうか。今まで耳にしたこともない。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。

東京に出てきて一人暮らしを始めるからつて、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。あそこでジュー何とかつていう自称神様に出会つたんです。』

分からぬ単語だらけだ。それにしても。

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

「うつ本氣で心配してしまった。もしくは空想癖のある子なのか？  
それもあるな、管轄外だ。俺の手には負えないのかもしれない。」

「話をまとめる、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたら  
の砂漠にいた、と。」

「ホンに、神様、ねえ。」

信じがたいことだらけ。それを証明することはできないが、この  
少女の戸惑いよつからずつて、嘘をついてるよつては思えなかつた。

『あ、買い物袋がない…』

小さな弦きこ、頭では別のことを考えながらも答える。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。それと置いてあ  
るべ。」

すると、すぐさま手を伸ばそうとした。が、まだ力が入らないの

か、ベッドから落ちそうになる。

『きやつ…。』

小さな悲鳴があがる。しかし展開が読めていた俺は、迷うことなく手を伸ばした。

「危ない。」

でも。… こんな展開は予想していなかつた。

腕に入れて抱きしめたネイは、ふわりとせっけんの香りがする。それに、抱き心地が… 非常によかつた。

『「レ、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

焦つたように言葉を紡ぐその姿は愛らしく、もうしばらへ腕に納めたいと思つてしまつほどだつた。

あり得ない、この俺が。

思考を切り替えようと、話を別へと進める。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えたに決まつているだらう。」

この娘が着ていて物は、うちの女中に洗わせることにした。それにしても、一人で首を傾げてしまつほど変わつた衣服は、着ていては異国の者だと気付かれてしまつ。

それでも、勝手に洗つておいて返さない訳にはいかないため、乾いたら持つてくるように言つてこた。

『あの、これを私に着せたのって…?』

顔はもう真つ赤だ。

俺じゃないかと心配しているのか？

疑われるのは嫌だと言わんばかりにすぐ答える。

「もううん俺じゃない。流石に早乙女とませ言つても女は女だ。やこは  
はきうんと区別しているから氣にするな。」

安心した表情をしてくれるとと思つたが、顔をしかめている。何  
か気に障ること、言つたか？

その答えはすぐ分かった。

クーンサイドが続きます。

『…私、何歳だと思われてるんですか?』

女性なら本来聞かれたくないことだらけ。しかし聞かれては答え  
るしかない。

「14くらいだらう?」

思つた通りの年齢を述べる。少し強張つた顔。やつぱり失礼な事  
を言つたのかも知れない。

『私、18です。』

「…すまない。顔つきや身長から言つて、まだ成人していないかと  
思つた。」

返つてきた答えに驚いて、すぐに謝つた。それにしても、若く見  
える。

『14では何歳で成人ですか?』

あまりにも真剣な表情。それは普段からも若く見られがちな事を  
気にしている風に見えた。

「15だ。」

やつぱり少し考えて、年齢を問われる。24と答えると、上か  
ら下までじつと見られて、大きなため息を零した。

と、思つたら。

ぐー。

突然の大音響。彼女はさつきの顔よりももっと赤い顔をしていた。

「食事を運ばせよ。」

ずっと寝ていた所為か、水分も口にしていない。もつと早くに気にするべきだつたな。食事の準備をさせるように女中に言つつけ、ネイに皿を戻す。

「大丈夫か？」

ベッドに身体をもう一度預ける姿があまりに辛ううので声をかけると、苦笑いで頷いている。何とか席に付けたようだが、身体は重そうだった。

それからレークが来ると、話をしながら食事を始める。その時にいつた言葉は初めて聞いた言葉は俺とレークの心に留まつた。

どう意味かを問うと、慈愛に満ちたような表情。それに惹きつけられ、思いがけず不羨にもじつと見つめてしまった。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そんなモノの命を奪つて人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になつて私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの力を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられたって感謝するのですよ。

『

なるほど。

当たり前過ぎて気が付かないことも感謝を述べて居る姿は、心を大きく揺さぶったような気がした。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のものよつです。」

面白そうな顔をしているレーク。その間も手を止めないネイの食べっぷりに満足していると、急に手が止まる。

嬉しそうにしているレークは氣にしている様子もなく、少し上の空で笑顔を浮かべていた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だつたじゃないか。」

腹が鳴るほど空いて居る様子だつた。それを掘り返した所為か、また顔を赤くしている。今日は何回顔を赤くさせたら気が済むのだろうか、と少し微笑ましくなつた。

「ネイ？」

何しゃべらないと思つたら、急に立ちあがり、ネイの物らしい荷物の所へ寄つて行つた。ガサガサと音を立てながら漁つている。

何がしたいのか分からず、見つめることしかできない。

しばらくすると、何かを抱えて戻ってきた。どん、と音を立てながら並べていく。訳の分からぬ容器に入っているそれらは、変な色をしていた。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

さつきまでは戸惑っていたのに、今は随分と嬉しそうだ。楽しげな笑顔をしながら、俺の質問に答えてくれた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、醤油に味噌です。』

調味料？味を整えるために使うヤツ、か。それにしても、どれも聞いたことない。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなつて。』

『私の味…ネイの国の味、は随分と氣になつた。』

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会つ万能調味料です。』

そう言つて、スープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなつた液体。それを口に運んで、思わず笑みを浮かべている。口に運んで、何かに満足したように頷いていた。

『…食べてみます?』

それがどんな味なのか、気にならないと言えばまつむになる。…でも、まだ名前も知らないはずのレークに先に差し出すのは氣に入らない。

しかも自分が使っていた食器を使って、だ。

少々恨めしくなり、横目でにらみ付けるように見回けたあと、自分にも同じようく差し出されて満足する。

あまり、このよつた事に頬着しない性格なのかもしけないな。

差し出されたものを口に入れてみると自然と言葉が零れた。

「「おいしい…」」

変わった味だが、深みがある。今までに食べていたものが、薄く感じられてしまつほどだ。

『そうですか。それは良かつた。』

いつの間にか食べ終わっていたネイは、俺たちが興味深そうに見ていた調味料をかけてくれた。

今まで俺が食べていたものと味が全く違う。格段に美味くなっていた。これ外国の味だと言うのだろうか？

ネイが食べ終わっていた時の挨拶を言うと、女中を呼んでお茶を頼む。その作業を飽きたことなくじつと見つめている姿は微笑ましかつた。

一服しつつ一通りの話をしてみると、段々表情を暗くしていく。

大分、情報を詰め込み過ぎたのか、少し待って欲しそうだ。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まつた。詳しい話はまた明日にでもしよう。ネイ、疲れているようだから、もう寝る。」

そう言つと、嬉しそうに笑顔を浮かべている。それに満足した。

…満足？なぜ俺は満足しているんだ？

「そんなん！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークに目線だけ向けて諫めると、部屋から追い出した。

強引だと分かりつつも、ついつい行動してしまったことに反省するべきだが、俺としてはレークに謝るつもりはない。

…正直、この時間は俺に欲しい。

「…眠れそうか？」

さつきまで長時間寝ていたはずだ。もし眠れないようなら、話相手にでもなる。そう覚悟していたのだが。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

ネイはそう言つた。

…何故がつかりしてゐるのだらうか。

しかし、それをおぐびにもせぬずに礼を述べた。褒めて欲しいところだ。

「ネイが混乱しているのは分かっていたのこ、じゅらの事情で長話を付き合つてもらつてしまつた。礼を言つのはじゅらの方だ。有難う。」

…どうして手が出てしまつたのだらう。無意識にネイの頭を撫でていた。思つていていたよりも細い髪はサラサラして、指通りがいい。ん？ 一か所、髪が絡まつてゐるような感触がした。

「…、絡まつてゐるな。少し待つてろ。」

近くの化粧台まで言つて櫛を持つてきて、ベッドの上に座り、髪を丁寧に梳く。

「…綺麗な髪だな。」

ずっと触れていたい衝動にかられたが、鏡であつたばかりの娘にいじまで固執しようとしている自分に驚いた。

…きっと、妹みたいだから、だな。うんうん、と頷いて、自己完結する。

もう一度頭を撫でると、おやすみ、と挨拶をして部屋を出た。

「クーン殿っ！聞いておられますかな。」

「ええ。」

「物思いにふけってしまった。」

気が付いたら血圧が上がったような真っ赤な顔が目の前にあった。赤い顔と言つても、ネイとは全然違う。

向こうを可愛らしさと言つならば、こひちは不愉快になる顔とか言いようがない。

そう言えば、今朝の恰好はよく似合っていた。

ショエランがやつて来た時に驚いた様子だったネイには謝るべきだな。あいつも返事の前に扉を開けていたからな。

ネイが俺とショエランの会話をオロオロ見ていたのは知っていた。交互に見上げているのは小動物を連想させ、大きな黒い瞳に魅了されたのは言つまでもない。

「わかった。すぐに「行くと伝えてくれ。」

先にわざと行かせる。途中退場になつてしまつたため、言つたいことを真つ直ぐに伝える。その時に、

結われてゐる髪を避け、額の辺りを撫でた。

「毎にここへ来るのは難しくなりそうだ。…その服も髪型もよく似合つてゐる。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

我ながら、柄にもない、気障つたらしい事を言つてしまつたとは思つ。だが、後悔などしていない。

…そもそも、時間が空く可能性があるのだろうか?…とりあえず、ジジイにもつと血圧でも上げてもらつて、普段の仕事に戻ろつ。

「昨日、ドラゴンを使ってレークの再従兄妹を迎えて参りました。その際、賊に絡まれていたらしく、保護を頼まれましたので、若輩者ながら承させていただきました。」

「どうやって賊に襲われているのを知つたのだ?つーまさか。まさか、あの方が本当に現れたのか?!!」

あほか。そう言いたいのを何とか抑える。

「大体は約束の時間に来ないことで何かがあつたに違いないと分かつておりました。嫌な予感がするとのことで駆けつけて行きましたところ、襲われそうになつておりました。

その再従兄妹君には見込みがあるらしく、今回は鏡盆を見せるために招いていました。」

淡淡と語る。ここ数年で無表情になることは慣れていた。何気ないことのように語るフリも。

そして言えることは、こんな奴にはネイを呪わせたくない。

実際はレークの再従兄妹と言つだけでも危ないが、異国、いや異世界からやって来た娘などと言つては、神話に沿つて崇められてしまつ。

そんなことをしたら、ネイは飾られたものとして神殿に軟禁状態になつてしまふのが田に見えている。

そんなこと、絶対にさせはやらない。

「そんなこと、われわれに黙つて行つてよこと思つていてるのか？」

あー、うむむむ。こんな時間があつたら、政の一つに時間を費やした方がいいことを知らないのだろうか。

いや、ここにいつてどのような事を考えるよつたな能力はなかつた。

呆れたようにため息をつくと、丸投げにもとれる発言をする。後は任せた、と言つ意味を込めて。

「今回のことは宰相殿にも知らせてあつた故。未来の神官候補として受け入れる前に、その素質を確かめるために黙つておりました。まだうら若き乙女なのです。

今後の幸せを考えると、中途半端な力の所為で人生を棒に振ることもないでしょう。そこを見極めのために、黙つていたことは謝罪いたす。

しかしながら、そのように判断の鈍る筋をもつた乙女に搔きぶりをかけようとする輩もいましたから、黙つておりました。」

「これまで言われては誰も何も言えないだらう。少し厄介な事と言えば、何も知らないはずの宰相殿が巻き込まれていることだ。

そして、笑顔を浮かべてことから大層立腹だと分かる。

…とりあえず、避けるとしよう。しかし三日と持つまい。そうなつたら腹をくへりや。

やう決意してその場を離れた。

## 闇話 その2（後書き）

クーンさん、意外と感覚だけで動いてますよね。  
次回はまたネイちゃん視点です。

## 楽しみの時間

もう思つた次の瞬間、ノックの音が響き渡る。

ほら、キタ。

少し身体を強張らせ、一呼吸置いてから“はい”と返事をすると、扉が開かれた。

「もう風呂は済ませたか？」

それにもはい、と答える。すると、たも当たり前かのように私がいるソファへやってきて、タオルを私の髪へあてた。

「これはもう二日も前から始まっている。何で留置づいてしまったのかはよく分からなかつた。

ただ、髪を乾かしてもらうのは気持ちいいから、私は嬉しそうに私の髪を拭うクーンさんに身を任せることじが身についてる。

止めた方がいいと思いながらも、どこか緊張感のあるこの時間が、実は何よりも好きだ。

昼間は最近ミコトと一緒にいて、この国について学んでいる。初日レーヌさんは一日中地球について質問してきたが、あまりに多くの時間は費やせないらしい。

それでも、食事の時は必ずやつてきて、子供がおとぎ話をせびる  
よつこ、こひこひと質問していった。

それに比べてクーンさんはほめつたに会えない。たまに食事を一  
緒に摂るけど、昼間にあつたことはなかつた。

レーコさん曰く、忙しいからじ。

じゃ、神官は忙しくないのか、と聞いたら、今は祀り事がないか  
ら忙しくないって言つてた。

その代わり、行事の時には寝る間もないほど忙しいんだって。

で、昼間は忙しいクーンさんがやつてくるのは就寝間際になつて  
いた。時間と言つても、正確には分からんんだけど。

この国にま、いや、この世界には太陽が6口、月が6口ある。お  
そらく一日は24時間で、太陽も月も、一つで一時間を表していた。  
朝の6時ほどに太陽が一つ出る。これは朝の6、7時を表す。二  
時間たつと、光る太陽が一つ増えることになつてているのだ。夜はこ  
れが月に変わるだけ。

便利にできているようですが、しっかりと把握できるわけではない。  
しかも法則を知らないでいると、私みたいに卒倒する羽目になるだ  
け。

そりややーー。あるはずもない太陽が6つもあつたんだから。

で、円が三つ上がるごとにクーンさんはこつもやつてくる。そしてお喋りをしながら、タオルで私の髪を拭ってくれるのだ。

「よし、いさんものだらう。」

乾いた髪に櫛を通して、満足げに頷いている。私はいつもこのながらお礼を言った。

すると、頭を撫でてくれる。

…だつたら最初からひらひら髪でもやめればいいこのことね。一度手間だつて。

…ひつても、じこかで止めて欲しくないつて思つてゐる。結局のところ、クーンさんに甘えきつてこむ自分がいた。

手を取られ、寝室まで連れて行かれる。ベッドに横たわると、布団をかけてくれた。まるで小さじ子供に戻ったみたい。

『クーンさん、私、子供じゃないんだから自分で髪を乾かすのも、布団をかけるのもできるよ。』

朝も早くから会議だと言つてこた。それに帰るのはいつも深夜近く。ひやんと眠れでいるのか心配だつた。

「…やんな」と呟つた。

え？

絞り出された声はどこか悲痛そ�で。弾かれたように起き上がる  
と、ランプの薄明かりの中、しつかりとクーンさんの顔を見ようと  
努めた。

「俺はレークやニア程ネイに会える訳じゃないから、夜のこの時  
間を楽しみにしてるんだ。一日の楽しみを奪わないでくれ。」

それは思いがけず、懇願だつた。でも、顔色を伺えば、疲れてい  
るのは一目瞭然。目の下にはクマがある。

つてことは、現在進行形で疲れてるつてことだよね、うん。

一人で頷いていると、名前を呼ばれ、意識の焦点を横の人に合わ  
せられる。

『本当に楽しみなんですか？』

それを切り口に、思つてることが溢れ出した。それはもう、壇  
を切らせたかのようだ。

『クーンさんはいつも仕事を終わらせてからすぐに来ててくれている  
みたいですが、それでこの時間と言つことですね？つてことは、  
これからお屋敷に戻るともっと遅くなるはずです。』

それなのに、朝は私が起きるよりも早く、城に来ています。そん  
なに働いていらっしゃるんですか。

他に無能でも政をこなすための人数はいるんじゃないですか？

てゆーか、早朝から深夜まで働くなんて、労働基準法を丸無視してますよね。』

例えば、朝8時くらいのスタートとすると、夜の10時位まで働いてることになる。つてことは、14時間勤務？！

ありえない！働き過ぎーーー！

どんな世界でも統治するための政治が必要だつて分かつてる。議員とか、じーじの場合だと貴族つて類のものの数が多いつてことも。レークさん、言つてた。この世界には貴族階級の人がいるんだつて。その階級を持つ家の主が、国の中核である国会に参加して会議をしてるんだつて。

そんな中でも、理由は教えてくれなかつたけど、クーンさんは大変な立場にいるみたいで、休む暇もないらしい。

気にかけてあげて、つて言つてたレークさんの言葉に、私はつい頷いてた。

…思い返してみると、夜にやつてくる時も朝にやつてくる時も、いつも疲れた顔、してた。もっと早く聞くべきだつたのに。

「気にしてくれて有り難いが、いくらネイに言われても俺はこの時間止めるつもりはない。」

…なに、その断言。そして、無意識ですか？その極上の表情は。

最高に格好良く見えるその表情は、私の心臓を驚撃みにした。き

つと顔も赤いに違いない。

ホント、格好良い人は何しても許されるどいつもか、むしろ公害に近いくらいに自分に負担が来る。

要するに、目の保養は行き過ぎると毒になるってこと。俯くしかできない私の意思なんて、端から叶うはずもなかつた。

それでも譲れないことが一つ。残念ながら、私はその方法なんて微塵も分かりはしないから、直接本人に尋ねるしかない。

『…私がクーンさんにしてあげられることはありませんか？』

何でもいいから、何かできることをしてあげたい。だつて、クーンさんは私の命の恩人だもん。あんな砂漠で倒れてる人間を助ける人なんて、いないはずだつたのに。

それなのにクーンさんは国軍のドラゴン？を動かしてくれた。

レークさんにこの国のことはたくさん聞いてる。魔法が在つて、不思議な生き物がたくさん居て、妖精さえもいる世界。

この世界の最高峰であるこの国のために一番働いてるのはクーンさんなんだつて。

クーンさんは私が知つてることを知らないけど、私を助けた時に使つたドラゴンのことで、たくさんの人たちに責められるみたい。なのに、私は悠々とここで生活して、尚且つクーンさんの負担になつてゐる。

…それが、どうしても許せないの。

「ネイ、有難う。しかし、そこまで気を使つことはない。」

『でもつ…』

違つんだ、と言つてクーンさんは首を横に振る。それは初めて私の言葉を遮つた。

「ネイは俺たちの世界の人間とはものの考え方が違う。価値観が違うんだ。

それは俺に癒しを与えてくれる。今まで当たり前であつたことを違うと言つネイは、面白い。俺に直接向かって働き過ぎだと言つヤツに初めて出逢つた。』

クシャッとした笑顔は、今まで一番私の心を震わせた。

…ホンモノ、だつて思ったの。

数少ないクーンさんの表情。大部分は無表情。その中で、今の笑顔は、間違いなく本物だった。

『私にできることを教えてください。』

譲れない。何かしてあげたい。義務感とかじやなく、自分の意志でそう思った。

今の笑顔が毎日、無条件で出るよつとしてあげたい。それは、私にできることじやないかもしない。

でも、できる」とかもしれない。

可能性が1%でもあるんなら、私はそれに賭けて、命の恩人にしあげられる事をしたい。

「では、この時間を、出来る限りずっと俺だけの物にしてくれ。望むのはそれだけだ。」

『そんなの、望むことじゃないでしょー。』

あつ、タメ口をこちやつた。

『めんなさい、って呟くと、勢いが殺がれて黙る。すると、大きくて重みのある手が私の頭を撫でていた。

「今、ここから一歩も出してあげられないんだ。それを俺は謝らなければいけない。

それに、今は何とか先延ばしにしているが、これからこの国のことにおもろく巻き込んでしまつ。今ままのネイでいて欲しいの、これから起るひとはきっとネイの負担になる。」

そう言つたクーンさんは少ししゃんとして見えた。

自分のことを考える暇がないくらい働くの、私のことばっかり心配して！お人好しにもほどがあるよ。

私のことなんかより、もつと自分の事に気を使つべきだ。そこは、

どうしても譲れない。絶対に考えてもうつよつて、しなくちゃ。

『いつか、絶対クーンさんのお願いを聞いて見せますからー・考えて置いてくださいね。』

結局、そんな約束を取り付けることしかできなかつた。これが約束できただけいいのかもしれない。

この時の帰り際に言つていた、一、二日したら会いにくる人がいるかもしれないと言つことが現実のものとなるなんて、この時の私は想像もしていなかつた。

## 宰相わが、登場（前書き）

お氣に入り登録をして下さった人がいるみたいで。  
とてもうれしいです。

これからも頑張りますので、ひとつお気長にお付き合ってください。

では、続きをどうぞ。

「それでは、箱のようなものに映像が映し出されるんですね！」

でもそれは……」

勘のいい方はお氣づきでしょう。私がレーザーさんに説明しているのは、テレビです。

いやーね、もっと上手く説明するはずだったんだけど、箱って言つちやつたわけですよ。

さりには絵心が最悪なもので、言葉を探すしか伝える方法はない。

『田に見えているものとほぼ同じ映像を映し出せるんです。』

その一言で、おお、と驚きの声を上げて、目を丸くしている。ちよつと、面白いかも。

…ああーちよつとナナメ掛けの鞄の中にケータイ入つてたと思つ…

…そう思つて鞄の所へ近寄つて行いつとしたが…

「失礼するー！」

おひいき…

何事かと思つてドアの方を見る。そこにはオロオロしてこちらアと、厳格そうなおじさんが立つていた。

『どうやら、様でしょ!』

明らかに怒つてらっしゃいますよね?つてくらいの雰囲気を纏つている。初対面なのに、私、このおじさんを怒りせりふのような事を何かしたんだらうか。

『お。…記憶にない。

てゆーか、この部屋から一歩も出でないのに、むしろ迷惑をかけりつて言つ方が難しい気がする。

困つてレークさんを見てみると、苦笑いを浮かべて肩を落としていた。

…その反応、なに?

何が起じぬか分からぬ状況に戸惑つ。そして、ビハクナリともできなくて、とつあえず身構えてみた。

「宰相殿、おうじゆ御出でで。もちろん、このことはクーン殿は知つておられますよね?」

何この空氣。現代っ子だから、もちろんそこは読んで黙るけど…

一触即発?

でもなさそーだけど、レークさんの笑顔が胡散臭い、いや、ビハク

黒い…でもなくて、張り付けた様なもののなのは確かだ。

「ヤツに止められた。」

お氣の毒に。

何にはめられたかはよく分からぬけど、眉間にしわの深さに、何だか哀れになつた。

さつきまで怒つてゐたみたいを感じだつたのに、それでもなかつたのかな。顔つきは元々そんな感じみたいだし、この人もクーンさんと同じく疲れた顔をしてゐる気がした。

「〃コア、あいつを呼んでもらてくれ。」

かしこまつました、と言つて、当たり前のよつと〃コアは行つてしまつた。

なになに？！今から何が起つて言つの？

それよりも、あいつでだれか伝わつてしまつのがすゝこと思つた。一人、訳も分からず立ちつくす。すると、おじさんの目が私を捕えて離そつとしない。

…怖いんですけど。かなり。

苦笑いするしかできなかつた。

「貴女がレークの再従兄妹、かな。」

「うへえ。本気で怖いつす。

けど、ここで委縮する訳にはいかない。クーンさんのマイナスに繋がることだけはしたくない。

『お初にお目にかかります。ネイと申します。』

ゆつくりと丁寧に礼をして見せる。顔を上げた時に部屋にいた四人は驚いていたようだった。

ちようど入ってきたクーンさんは入口のところに固まっている様子。

どこか変、だった？

一人オロオロとしていると、おじさんは急に笑いだした。ひとりきり笑つた後、さつきの顔とは違う柔らかなものを浮かべている。それにちょっとだけ安心した。

それにしても、急に笑い出すなんて、ワライタケでも食べたのかな？

「実に肝の据わった娘だ。……気に入つた。」

ん？ 気に入られた……つて何事？

周りを見渡しても、どうやら状況が理解できていないのは私だけみたいだ。とりあえずお茶にしましょ、というレークさんの言葉で、この空気は一時保留。

ミコアがお茶を入れて部屋から出していくまで、椅子にくついた  
よつこ留まるしかなかった。

「さて、この馬鹿が丸投げした話の真実を教えてもらおうか。」

おじさんが顎で指したのはクーンさんだった。クーンさんが馬鹿  
だなんて、そんなこと言つたら私はどうなるんですか？！つて、言  
いたくても言えない。

だつて、ここの中でも話しが理解できていないのは、私だけみたい  
だから。

「ネイ、設定を言つてくれるか？」

急に話を振られた私は、中身を溢さないようカップを置き、二  
人の顔をしげしげと伺いながら口を開いた。

『私はレークさんの再従兄妹にあたり、一族の中でもレークさんに  
次ぐほど力があると言われています。

そのために神官見習いの候補生として王都を訪れようとしたところ、  
賊に襲われそうになつてしまい、そこをクーンさんに助けられ  
ました。

現在はその休養をとるために、城の一室を借りています。』

早口でそう言つと、大きく息を吸い、同じように大きく吐いた。

間違えてはいなはず。ここ、三日ずっと確かめられてたこと

だから。

そんな私の様子を見て、おじさんは大きくため息をついた。どうやら、聞きたかったのは、そういうことではないらし。

「設定などではなく、事実を教えてくれ。」

なるほど。それなら、確かにさつきの口は答へにはなつていない。ここで口を開くのは私であるべきなんだらうけど、事情を話し始めたのはクーンさんだった。

「ネイは鏡盆に映し出された。」

それだけ言えば分かるのか、妙な沈黙が息苦しい。おじさんは田を見開いたまま私をその瞳の中に入らえていた。

「！」の方が…」

何処の方よ？

急な態度の変化。それに、崇めるよつた暑い視線は、かなり居心地が悪い。私は田を逸らすと、カップを手にとり、息を吹きかけて冷ましにかかった。

「ネイは砂漠に倒れていたんだ。それで！」まで運んできた。話を聞いていると、予言通り、とでも言おうか。

この娘は価値観がどうも異なつていて面白い。しかし、政に引き込まれていいような子じやない。純粹な、良い娘なんだ。」

私に注がれているクーンさんの熱い視線には気付かなかつた。それ以外の二人は何かしら悟つたみたいだけど。

「しかし、そもそもいかんだう。鏡神祭は一月後に迫つてゐる。それまで見鏡盆が使えないことが知れ渡つたら、ただじや済まされない。」

「そうだらう、とレークさんに問いかけるから、私はそちらを向く。目があつたレークさんの表情は少し困つてゐるようだつた。

事実、らしい。確かに、前にもそんな話してた気がするけど。

「その通りですが、私はクーン殿に賛成です。この乙女を政には引き込みたくない。大人の汚い世界に巻き込むなんて言語道断です。ルイス派の人間にとつては格好の獲物となるでしきう。それに、まだ預言者く最後の乙女くと決まつた訳ではありません。」

「私は動物か？獲物になつて狩られるなんて、冗談じやない。

それにしても最後の乙女つてナーニ？

意味のわからない単語に戸惑つてゐる私を置いて、話は進んで行つた。

「一月後まで何とか隠しましょ。国王陛下には鏡神祭の後に報告すると言つことして、とりあえず乙女がどうかの判断は明日の日没後にいたしませんか?」

私のことなのに私を省いて話が進んでませんか?

ふとした疑問だが、助けてもらつた時点でこの話が始まつてゐるみたいだ。

私は一体何者な訳? ここでは稀有なものとでも言つんだろうか。さつきのこのおじさんの熱い視線の事も気になるし。

もう我慢ならない。分からぬ事を聞くことにした。

『口を挟んで』めんなさい。だけど、分からないんです。私はこの世界にとつてどんな存在なのですか?』

それが分からぬことには私の中で話は進まない。理解できないに等しい。

置いてきぼりをくつた私は何とか追い付こうと努めた。

「話していなかつたな。」

そう言つたクーンさんに目を向けると、少しだけ愁いた目をしてゐる。なにか、大変な事なんだろうか。

「鏡盆には人間が一人だけで映ることはないと言つただろ?」

その問いに大きく頷く。いつか聞いた話だつた気がする。

「それに一人きりで映されるのは、最後の乙女」と相場が決まっている。

「最後の乙女」とは神からのお告げを伝えることができる、預言者のことだ。

そして、最後、と呼ばれるのは、未だかつていなかつた預言者を指し、最初で最後の乙女の意を示している。」

なんすか、その仰々しい話。私には無関係に思えるんですけど。そんな大それた存在のはずないよ。

今まで日本の乙にでもいる女の子の一人だつたんだもん。

ワンピースの裾をギュッと握る。その手に柔らかく乗つて来たそれは、クーンさんの物だった。

心配そうな瞳。きっと、相当酷い顔してんだろうなあ。なんてしまじみと思つてみたり。でも、混乱してるから、そこは許してほしい。

「ネイにとつては巻き込まれたくないものだらうが、この国の神話に記述されていることなんだ。

それに、ネイが一度映つてしまつた鏡盆はネイが神殿にいかない限り、使つことはできなくなつて、この国の政治に関わつてしまつ。

」

ううん。映らないのは困るよね。それにしても、神様を信仰して

るのかあ。それはちょっと厄介だよね。

『質問、しても良いですか?』

私が知りたいことは山ほどある。

理解できないことだけじゃなくて、私自身が気になることも。その問い合わせに頷いてくれた三人を交互に真っ直ぐ見つめる。

真剣な顔をしてるから、私の顔にも力が入った。

『この国の人たちの多くがその神を信仰してるんですか? 信者の敬虔さはどうのくらいですか?』

あんまりにも熱狂的だと、嫌でも最後の「女」とか言つもの立場に立たされそう。それに、もし私がそうでも、勝手に理由を付けて祭り上げられそうだもん。

それだけは、何としても確実に避けたい。

「国民のほぼ9割が信仰しておる。中には熱狂的な信者もあるな。」

難しい顔をしたおじさん、いや、宰相様がそう言った。

まじ、勘弁。今さらだけど、何としても避けたいよね。私、そんな面倒な事からは、回避を希望します。

『…私の居た世界にはいくつかの宗教がありました。でも、私は無宗教です。

いや、多神教って言つた方が正しいのかもしません。私の国の住人はとても自由で、それぞれの宗教に準じた催し事を行つんです。

』

「いつ説明してると、やつぱり日本の文化って面白い。てゆーか、ここまで来ると自由すぎるよね。

「その口ぶりだと、ネイさんは神信じておられないようですね。」

「そうか。神官様から見れば、信じられない人間なのかも、私。

でも、実際問題自分がどう思つかだし、思想はその人の自由だ。思つてる事なんだし、それを隠して本当のことを述べないで『まかすなんて、おかしい。』

私は頭に、不愉快に思つたらすみません、と付けておいてから話し出した。

『私自身は基本的には神様を信じていません。もしかしたらこの世界を創つた神様はいるかもしれません、縋り付ける神様はいないと思うんです。』

『だつて縋りついて本当に助けてくれる存在がいれば、治らない病気なんて存在しないと思いますから。』

ここまで言つてなんだが、みんなの視線が痛い。信仰している人から見れば何とも不愉快な話なんだろうけど、単なる小娘の浅はかな考えつてことで、勘弁してほしいとこッすね。

『私のいた世界では自分の信仰している宗教を他人に押し付けて、過去にも現在にも争いが起きています。

聖職者があ金を得るために、神に助けてもらえる紙切れが出回った過去があります。

これは人間の我儘で、私腹を肥やす為にやったことで。でも、その行為は神様に結びついてしまつんです。

神様は自分に似せて人間を創ったと言われています。そう考えると、神様がいると信じると、汚い心を持つていてる人物を想像せざるを得なくなりますから。

それを崇めることはできません。』

ここまで言つて、完全に冷めてしまったお茶を飲み干した。

…我ながら捻た考へだよね。自覚はしてるんだけど、どうも自分の考え方は真っ直ぐになってくれない。

「神様のことで争いが起きたと言つていましたが、それは本当に自分の信仰する神を信じているからなのではないですか？」

それつて自分の神が一番正しい、って考えなのかな。ある特定の人物からしたらそうかもしない。

けど、私が言いたいのはそんなことじやなかつた。

『どの神がそこに在るのかを争つて戦うことは、敬虔な信者の行いかもしません。でも、私の中ではその考え方は違うんです。

その神が真に存在するのであれば、そのことで争い合つて、自分の所為で人間が死ぬことなんてないと思ひます。

もしいても確認もできない存在。ならばどうしてその人のために多くの命が奪われるのを黙つて見ていられるのでしょうか?』

真っ直ぐレークさんを見つめて言つと、右隣から盛大なため息。宰相様は見た目よりも、本当はもっと若いのかも知れない。私みたいな統制のとれないバカがいるから、心労で髪が白くなつたのかも。

…』苦労様です。

「もしも、最後の乙女、ならば、隨分と変わつた考え方だな。」

あ、ため息ついたのはその所為?自分でも変わつてるのは自負してるけど、そこは個性つてことにしておいて欲しいね、うん。

『まだそうと決まつた訳ではありませんよ。それと、もう一つ申し上げておきますと、私のいた世界では、科学が非常に進んでいます。その結果、人間は猿が進化したものです。

神が造つたと言われる人間が、実は環境に合わせて、時を重ねて優秀になつたつてことです。

この進化論は、神を崇拜している者たちからすれば、信じられな

いものなのでしょうが、事実、証明されています。』

ゆつくりと立ち上がり、お茶をみんなのカップに注いでいく。自分の席に着くと、またお茶を貰ます為に息を吹きかけた。

「ネイさんは大人しくて柔らかい空気を持っているのに、意外と意思がお強いのですね。』

…褒め言葉として受け取つていいのかな？

だんだんレークさんの笑顔が胡散臭く見えてきた。遠まわしに大人しく従つてゐよ、つて言われてる気がする。

『私、性悪なんですよ。だから、猫を被るのも得意ですし、人を言ひ負かすことに何の負い目も感じていませんしね。』

「…」つい笑つてそう言つと、宰相様はまた笑いだした。

「これはネイの勝ちだな。ますます『氣にいつた。』

ますます『氣に入られた？宰相様の判断基準が分かりません。

『私の世界では、一人ひとりの意志が尊重されます。言論の自由だつて、思想の自由だつてあります。女性に対する差別もありません。

もしかしたら、私のいた今の社会は女性の方が強いのかも。』

おじいちゃんとおばあちゃんを見たつてそつだ。かかあ天下が発生してますもん。おじいちゃんつてば、完全に尻に敷かれてる。

それよりも、ここから変える方法つてあるのかな。これからビックリちやうんでしょう。

ため息を零した直後、ここで急に空気が打つて変わつて、意氣消沈氣味にレークさんが話しだした。

「あと一月ほどで鏡神祭なので、興味深いネイさんのお話を聞きに来ることができません。」

あら、せっかくの知り合いに会えなくなるの？ そうでなくとも三人しか知つてゐる人いないし、部屋から出られないのに。あ、今日もう一人増えたんだっけ。

がつかりしていると、不思議そうな顔で見られる。何でもないつて答えたけどね。

『テレビの話はもうしばらくお預けですね。次は上手く説明できるようになります。』

手をグーにして力む。脱・説明下手人間！

それにしても。

『これから一ヶ月も喋る人がいないのかあ……』

みんながいるのも忘れて独り言ぢる。何か役に立てる事ないかな？ いや、ここから出たらいろいろ大変だろうし。

でも、バレない形で自由に歩き回れたから…

「…思いついた！」

『クーンさん…』

思い立つたら即行動派の私は、すぐさまクーンさんに飛びつぐ。わう、噛み付かんばかりの勢いでまくし立てるように言つた。

『女中のお仕事をさせてください…』

そこにいた三人が固まつてしまつた。とりあえず、どんな返事が来るかワクワクして待つてると、がっくりとしているお人たち。

どうこいつらちゃ？

一人理解できずに首を捻る。それを分かつてくれたのが、クーンさんは代表になつて話してくれた。

「…最後の二女がもしけないネイに、そんなことはさせられない。

」

なるべそ…なんてこつた！

せつかくいい案だと思ったのに、どうやら採用されないらしい。でも、これができるとなると、本当に一人ぼっちで一ヶ月過ごすことになつちゃう。

それに、こんなお姫様みたいな生活、心苦しくて仕方ないんだ。

『そこを何とかなりませんか？働く者食つべからず、とも言いますし、こんなに何もしない生活なんて、あり得ません。』

私の意見が一理あるのか、三人は顔を見合させて困つている。

「もうひと押し、だね。さつき提言したように、私の意志は強いんですから！」

『もし私がく最後の乙女へであつてもなくとも、これから先、元の世界に戻れる保証はありません。

どう転んでも、いざれは独り立ちするべきですし、こう言つ籠の鳥になつたようなお嬢様生活なんて、私の性質には合わないです。』

女中の仕事を覚えれば、自分のことは自分でできるようになる。

それに、住む所を探せるし、もしもお給金も貰えれば何もかもこの暮らしに合わせていけるかもしれない。

だから、曲げる訳にはいかないの。

そう思いじつと三人の顔を見つめる。まず降りたのは宰相様だった。

「ひづてはいることだし、何せ誰とも会わずに一月もこの部屋から出ぬな、とは言えんだろう。」

宰相様つたら話が分かるー！

つて、抱きつきたい気分だつたけど、そんな空氣じやないことは

重々承知。だから、我慢した。

その言葉を聞いてレークさんは。

「仕方ないですね。私が話相手に慣れないのは悔やまれますが。」

そう言った。

すぐさま反応してクーンさんは言葉を遮つたが、一人の重い視線にとつとう陥落。

承知をしてくれた。

「ネイ、条件を付けても良いか?」

そうキタか。どうやら心配症であるらしいクーンさんは、簡単に野放しにはしてくれないみたい。逃げたりしないのに。

でも、条件を飲まずに自由を失つたら嫌だから、顔色を窺いながら小さく頷く。

それにホッとしたような表情を浮かべて話出した。

「宰相殿が俺のじゅらかの専属の女中として働く」ひだ。

「うか。いろいろと知らない事だらけだもんね。

妙に納得しながら、了解したことを告げる。でも、話はそれだけじや終わってはくれなかつた。

「お前の専属でいいじゃないか。ネイ、ここに働く過ぎだと注意する役目を承つてくれんか?」

やつぱり。他の人から見てもクーンさんは働き過ぎだつてくらい働くいてるんだ…

宰相様はきつとクーンさん这件事を心配してゐるんだね。レークさんだつたらこひはいかない。クーンに言つくるめられちやうだらつから。

『了解いたしました。』

立ちあがつて前で緩く手を重ね、綺麗にお辞儀をして見せた。最初の時みたいに、みんなは驚いた顔。

今日はこんな顔見てばつかだな。

なんて一人暢気にそう思つた。

「ネイ、お前はどこで覚えてきたんだ？先程もどこの令嬢のようだつたし、今もその気品とは完全に消えきつていなが、女帝のようこのお辞儀をして見せた。

不思議でしょうがない。」

そんなこと言われても、記憶にないんだけど。でも、強いて言つなら。

『ドラマとか映画の影響かも…』

この弦を理解できる人はいなかつた。三者三様、さまざまな顔をしている。

「それは、なんだ？」

簡単に説明、できない…どうせつても無理だよ。私、説明下手だもん。

…うーん。困つたぞえ。

『先程レークさんは分かつてくれましたが、私のいた国では機械がとても発達しているんです。“テレビ”と言つものがありまして、田に見えているような映像を映し出す機会があります。

レークさんは分かつてくれましたが、おそらく鏡盆に映つているものを見る感じだと思つんです。

そのテレビには、たくさんの物が映し出されます。その中の一つがドラマです。ドラマとは、劇場で見られるものを何回かに分けて楽しむものです。

映画とは、それ専用の映し出す写映機を使い、大きな白い布にそれを映して見ます。例えば、ドラマが1時間の一回の物とすると、10回ほど放送して話が完結することと、映画は1時間ほどで一つのお話が完結することに違いがあります。』

たぶん、あつてると思つんだけじ。

大体の感じで伝えてみたから、かなり内容的には不安になる。

どうも英語は伝わらないみたいだから、スクリーンとか使えなくて困ったけど、これが私の限界です！

…直訳して書つてじやないけど、や。

「何となくは理解できた。ネイのいた世界は文化が発展しているようだな。』

優しさに涙が出そづ。

クーンさん、明らかに眉間にしわが寄つて、ちょっとしたがらがつてます、つて顔してゐるのに。

『はい、ものす』べ。不便な事はありませんし、逆に手が掛からなさ過ぎて人がダメになつてゐる様な気がしますが。』

「まだ便利な事があるんですか？！例えばどんなものがあるので

…「レーク。」

有り難い。

流石に急なテンションの高まりがみられるレークさんはこの数日で、あのアホ神くらい厄介だつて分かつたから。

見兼ねて止めに入つてくれたクーンさんにまた感謝した。

「詳しい話を聞くのは、事が無事に過ぎ去つてからだ。とつあえず、あと一月はネイのことを鏡神祭があるから、と『まかすこと』はできるだらうが、問題はその後だ。」

…確かに。ひとまずこの状況から脱することができただけいいけど、肝心の問題を後回しにしただけだつて気付いた。

「明日の朝はゆつくりしろ。ミコアにすべて任せておくから、何食わぬ顔をして俺の執務室へ來い。」

そう念押しをすると、忙しそうに去つて行つた。

ですよね。だって、私のいる客室にくるのはいつも夜遅く。あつとそれも一日中、根詰めて働いてから。

なのに余計な事で時間を取りちやつたから、今日はもつと遅く元へ遅れてしまうことになるんだろうなあ。倒れなきやいいけど。

「そつぱいじとならば、あとまお前たちに任せた。とにかく、もつ一度考へる」ともあるだらうから、また訪れる。

あいつの世話をネイに任せた。頼んだが。

さう言つと、宰相様も足早に去つて行つた。

みんな忙しい人たちなんだろうね。私なんかに構わなくてもいいの。つて、そんな訳にもいかないか。

じえらつ話になつてしまつたるしね。

レークさんもぱいがへ行くだらうから、一人でボーッとしてよいかなあ。つて思つたのに。レークさんせ立ち上がる」ともせあ、「地球のことを聞いて止まない。

忙しいんじやなかつたの、つて聞いたり、明日から頑張るからいいんだつて。

あんた、それ、職務怠慢つてやつじやなこつすか。しつかり働くつよ。…私が言えたことじやないがど。

夕食を一緒に摂り、それが終わってもレークさんは興味があることをひたすらに聞いて行つた。

クーンさんが来た時にはぐつたりしてたのは無理もない。

「…疲れたのか？」

それはクーンさんじゃない。顔色だって悪いのに、私の心配してる場合じゃないよ。

『タージ飯は食べましたか？』

少し、と返ってきた答えに不安になる。それに、やつぱり働き過ぎだつて思った。

私は、確実に負担になつてゐる。明日から、しつかり働いて、クーンさんに少しでも楽してもらわなくちゃ。一人でガツツポーズをする。

髪を拭いてくれているクーンさんは見られずに済んだ。

『あんまり、無理しないで下さいね。クーンさんが倒れちゃつたら、心配になつて私が倒れちゃいますから。』

真剣にそう言つたのに、なんだそれ、と咳いて喉の辺りで小さく笑われた。今日はいつもよりも遅い時間に來たから、本当に申し訳ないと思つてる。

だから心配したのに。なんで笑われたんだろう。いや、もしかしたら私が何か言葉を間違えたのかもしない。

「ネイが倒れたら誰が倒れた俺の世話をするんだ? 明日から俺の専属になるんだろう。」

あ、そっか。主の世話もせずに隣で倒れてるなんて、女中失格じやん。…私、ホント馬鹿。

いや、でも、それくらい心配してるんだって、いい方向にも取れるよ。ね?とか、誰に訳す訳でもなく、話を振つて見たり。

『お願いですから、『血液循环ださー』。』

女中さんっぽく言つてみたけど、やっぱり映画とかドラマとかの真似でしかない。ミリアに聞いて、しつかり勉強しなくちゃ。

一人物思いに耽つていて、クーンさんの表情が硬くなつたのには気付かなかつた。

「ネイ、みんなの前ではそうして入ればいいが、俺の前では普段通りにしていて欲しい。」

でも、と口を開こうとするとい、すぐ口に遮られる。

「そつちの方が俺の気が休まる。」

ずっと人に敬語を使われてたりとかするから嫌なのかな? クーンさんがそう言うなら、そうしよう。

了解を伝えると、髪はもう乾いていた。今度は櫛を通しててくれる。その時にも話は続いた。

『……どこか、借りられた部屋を探すこと。』

「なに？」

「ひょー低い声が耳元でした。

ゾクゾクとわなわな響きは、何とも言えない艶やかさを持つて  
いる。なのに、どこか怖かった。

『いや、だから、えっと……』

田力強いから、余計に怖い。

イケメンは流石に迫力ありますね。って、今は顔見えてないけど。  
でも、顔も体格も体型も良いんだもん。もちろん声だって、極上だ。

『女中が城の客室にいるのもおかしいですし、どうなるかじり、一  
人立ちしなければいけませんから。』

それもわうだな、と悩ましい声。それでも手は止まらなかつた。

「女中の間はここにいるのは、確かにおかしいな。一円はここにいる  
ことは難しい……どうか。ならば、俺の家に来い。

そうすれば夜のこの時間もなくならずには済むからな。』

……なぜわうなる？！

急な話の展開についていけなかつた。

確かに行くあてはないけど、どこか仲介とかで紹介してもらひて、  
暮らすつて形にならないの?

なんていう間もなく、意氣揚々とクーンさんは帰つて行つてしまつた。

なんてこつた…

## 専属女中（メイド）、出勤

「ネイ様、おはようございます！」

『おはよー……』

昨日のことが気になつてあんまり眠れなかつた。顔、最悪だと思ひ。

「あら、疲れなかつたんですか？」

やつぱり…

『顔、そんなに酷い？』

そう聞くと。

「ええ。」

なんて、すぐに返事が来て凹んだ。

自分で聞いておいてなんだけど、ちょっと包み隠して欲しかつたぜ。とか強く思いながらも、脱力した。

「早く顔を洗つて来て下さい。さつと皿が覚めますから。」

返事をすると、バスルームに向かつた。水で軽く顔を洗い、顔を拭う。

鏡に映つた顔は…

『お化け…？』

そんな残念過ぎる私は歯を磨いて、ミリアがいるであらつ寝室へ向かった。

「あ、田はは覚めましたか？お召し物の準備はできていますよ。」

もう言つてベッドの上に座りあつたのは、簡単に言えばメイド服。

『フリフリ…』

まじで勘弁してほしい。

「お城の女中服は可愛らしこですから、わひとネイ様に似合いますよ。」

うん。…嬉しくないなどね。

それに、こんなに長つ裾つて…ありえないっしょ。

『ミコアの服の方が可愛こと悪い。』

そんなんちつちつな話をミコアに聞くはずもなく。わひとと着ると田線で催促され、のうのうと着てみた。

「よくお似合こですわー。」

「つそだ！キモいだけだつて！！

『ミコア、これいじつちやダメ？』

眉だけを綺麗に動かして見せるその様は、訝しげな様子をそのまま表していた。換えはありますけど、ところの言葉を聞いて、ハサミを貸してもらう。

生き生きと刃先を鳴らすと、ちょっとだけ引かれた。

「もしかして……」

そのと一ツ！ふふふ。楽しませていただきまつす

息を大きく吸うと、刃を動かした。

『ミコア、ペチコートある？』

もう言つと、少し興味が出てきたのか、渡してくれる。それを見ると、スカートよりも少し短めに切つて、軽く縫いつけた。

『編上げのブーツ、履いてもいい？』

いつの世界に来てから、お願いして茶色の編上げのブーツを履かせてもらつて言つた。でも、いつの女の子はブーツは履かないらしい。勿体ないよね、可愛いのに。

流石に髪はまとめて、化粧をしてもいい。

完成です！

「いい。すうへいですー。」

そう褒められて私の鼻は高くなる。

スカートは足首まであつてウザつたかったから、膝が見えるか隠れるかの所まで切つた。そして編上げブーツ。肌がたくさん見えるのはダメらしいから、ちょっと緩めの靴下をはいて、極力見せないようになした。

ゴスロリに近くなつたけど、足首まであるよつマジ。これで大分動きやすくなつた。

「可愛らしきですけど、せつと上方々が見たる憤慨なさるわね。」

『別に怒られてもいいよ。自分がいた国とは文化が違つんだって言えばいいんだから。』

あ、でも、そうするとクーンさんに迷惑かけひやつかなあ。』

そこが一番のポイントだよね。

でも、この世界の服は本当にあり得ない。動きやすさなんて贋無。確かに地球の衣服の文化は露出が激し過ぎるかもしれないけど、こはいくらなんでも布が多過ぎだ。

私だけ足を出したがらない女子高生だつたけど、流石に膝は出でたもん。ま、こにじやそれを配慮して膝も出でないんだけどね。

これでも譲歩した方だつて。それに、何だつたらパンツ履いて仕事したつていい。いい加減、ジーパン履きたいんだよね…

ズボンは男の人しか履いちゃいけないらしいから、当分はムリだ  
うひ。

「あら、こんな時間！ネイ様、クーン魔道師の所へ急ぎましょ。」

そう言われて、少し戸惑つた。カスタム女中服のままだつたから。

でも、面倒だからいつか。

なんて、ミリアが忘れてるみたいだから、しめたもんだと思つて、黙つて着いて行つた。

「クーン魔道師様、ネイ様をお連れしました。」

ほー……でかい部屋。

ノックをして開いた先には机が一つ。それしかなかつた。

そこに着いて仕事をしている様子のクーンさんは、切りがいいとここまで行くと顔を上げる。

それからちよつと驚いた顔をした。それに気づいたミリアははつとして私を見る。それからやつちまつたつて顔をしていて面白かつた。

……睨まれたからすぐに止めたけどね。

「随分とこじつたようだな。」

はい、申し訳ありません。とか謝つて見たり。でも、実際は口だけで、反省なんてしてないけど。てゆーか、部屋にいた時だってこれくらいの丈だったし、誰にも文句は言われなかつたもん。

氣にするほゞじやないと思つただけど…

『これ、そんなに変ですか？』

裾をちゅうと上にあげてそつ聞くと、田のやり場に困るから下ろせ、と言われる始末。今さらだけビ、ijiの文化とは合はない気がする。

「似合つてゐる。まあ、それでもいいだら。」

助かつた。長い丈だと転んじやうだらうしね。怪我だけは勘弁つてなことで。

「仕事の仕方はミリアに聞けば大抵わかるだら。それに、俺はあまり世話が掛からないだろうから、そこに困ってくれるだけでいい。」

それだけ言わると、私はミリアに続いて部屋を後にした。

城は迷路みたいになつてゐる。しつかり暗記しないとまずい。道を覚えがてらに、それじや私の意味がないんじやない、ってミリアに聞いたら、それだけで十分すぎるんだつて言われた。

「これは私から話せることじやありません。しかしながら、宰相様に少しほは言われたでしょ？」

クーン魔道師はこの城では厄介な立場に晒ます。仕事をし過ぎないようにネイ様が注意して下さるだけで十分ですよ。」

なるほど。みんなクーンさんが働き過ぎだつて思つてゐる訳ね。

「ワーカホリック? いや、働いてないと落ち着かない訳でもなさそうだし。何か理由があるんだろうねえ。」

話してもうえない限り、私には理解できない。早く話して欲しいなんて思つていると、女中部屋に着いた。

ミコアはここで着替えてくるらしい。ここから、調理場や洗濯場など、城内を案内してもらつた。

それにしても広すや。…

ミコアはもう慣れたつて言つてたけど、私は当分無理そうだ。たいていの所を案内してもらつて部屋に戻ると、第一城人発見。

一瞬、きょととした表情をされて、言わんことがよく分かつた。

あ、やば。

どう考へても視線は私のスカート。早速怒られると思つたら、おばさんは豪快に笑い出した。

「あんた、クーン魔道師様に聞いた通りの子だねえ。」

クーンさん、何か余計な事言つた? ! 自己紹介でもしますかね。

恐る恐る口を開いた。

『お初にお目にかかります。クーン魔道師様の専属女中となりました、ネイと申します。

以後お見知りおきを。』

昨日のよう手を軽く前で組み、丁寧にお辞儀をしてみると、今度は目を丸くしていた。忙しい人だ。

「奇抜な格好をしてると思つたら、教養があるみたいだねえ。」

あ、そこですか。大概の人に教養があることを驚かれるのはビックリ。やっぱり幼く見えるのかな？

「私は女官長のマーサ・マキンズ。たいていのことは私が管理している。それにしてもその格好は？」

早速キタ。やつぱり言わなくちゃダメだよねー。

『私のいた国では、足首までスカートがあることは滅多にありません。それに、あれだけ長い丈だと、転んでしまってそうだったのです。』

すみません、と頭を下げるが、また笑い声が聞こえた。

「あんまり気にすることはないさ。でも、ここに連中にはそれをあまり良くないと思うものもいるだろ。それでなくても、『あの』クーン魔道師の専属なんだから、目をつけられるかもしれない。

怪我をしなこうつに元気をつけな。」

そろそろきな臭くなってきた。そんなにクーンさんは大変な人なのかな。

「まあ、その格好をしていると逆にクーン魔道師の専属だと分かつて、そじら辺のお偉いさんに小間使いにされずに済むだろ。」

豪快なおばんと、いや、マーサ女官長と握手をすると、ミコアと一緒に厨房へ向かった。

## 専属女中（メイド）、出勤 その2

「……」お茶の準備をします。何度もお茶を淹れてるのは見ましたが、正しい入れ方をお教えしますね。」

残念な事に、私は言われてすぐに覚えられるたちじゃない。だからエプロンのポケットからメモ帳とボールペンを出す。

その一つに不思議そうな眼を向けてきたけど、質問されなかつたからあえて答えなかつた。

「おひ、新人さんかい？」

陽気な声。明るくおはよひ、と声をかけられ、私はせつせつと同様に丁寧に挨拶をした。

「ははは。俺にそんなに畏まることはない。お、お譲りちゃん、随分と軽そうな格好じゃねーか。」

はい、キター。本日一回田の服装チェック。

『本日よりクーン魔道師様にお仕えいたします、ネイと申します。

「この格好は動きやすさを重視いたしました。私は人よりどんなくさいらしく、長いスカートだと、上手く動けないので。これは転ばないための配慮ですので、どうかご勘弁を。』

「……」リア、この方ははどうぞお譲さんかい？」

おつと。何か間違えた?

不安になつてミコアを見ると、しおうがない、と言つた様子でため息をついた。呆れられたみたいでちょっと悲しい。

「いえ、新人さんですから、きっと緊張してるんです。」

あ、なるほど。わかつたぞ! さつきのお偉いさん方に使う言葉。ここでは少しだけ丁寧に喋ればいいってわけね。

「そーか、そーか。そんなに緊張することはない。

ここは気取つてる調理場のヤツらじゃないから、安心して何でも聞けばいいさ。

俺はミハエル・コース。みんなにはエルって呼ばれてんだ。ここでコックをしてるから、皿食なんかは注文してくれていいぞ。」

あら、良い人そうで安心。気取つた人だつたらどうかと思つた。

さつきのマーサ女官長といい、エルさんといい、優しい人が多そう。なんか、こういうのつてたいていは新人が虐められたりハブられたりするのがオオドウじやない?

あ、ドラマとか本の読み過ぎか。

私はよろしくお願ひします、と書つて、ミコアに連れられてクーンさんのお部屋に戻つた。

ら。大変な事になつてましたよ。

クーンさんが夜中まで仕事してゐる理由が分かつた。

部屋見廻つてみたら、書類の山、山、山…

さつとまで平穏だつたのに、びっくりするくらい人が出入りして  
る。

部屋が広い理由はここにアリつてか。

「驚くのはまだ早いです。こんなのはまだマシな方なんですよ。」

「うそつ。いろんなの、仕事つて量じゃない。もはや、うーん、そう  
！簡単に言つちゃえれば戦争に近い。

クーンさん、必死に書類の山と戦つてゐるから。

『クーンさんつてド…?』

「なんです、それ？」

『マゾつてこと。苦痛を喜びに感じる人のこと。』

一人で部屋の隅に立ちながら立ち話。

クーンさんが働いてる時に何やつてんだつてお叱りの言葉を得る  
かもしれないけど、生憎人がせわしなく動いてるせいで、ミリアは

もつじぱりへ仕事に行けそうになかった。

「もしそうなら、気持ち悪いですね。でも、仕事に関してはさう言えるかもしません。」

日常はどうやらかと書いつと違つよつですけど……鬪い方で言えば、守るよつも攻めるよつが得意だとお聞きしました。」

『うつてことか…』

今度は不思議うつてことの意味を聞かれて、私は丁寧に説明した。

「ネイ様のお国は不思議な事や物、文化がありますね。ここまで知らない事だらけだと、むしろ面白じです。」

そう、なのかな。まあ、確かにこの文化は驚くことが多い。それに不便なことだらけだし。

今のところ、電気がないのが一番痛いことだよね。エジソンは偉い人だよ、ホント。

「では、私は仕事に戻ります。お毎時になりましたらお迎えに上がりますね。」

丁寧に礼をして、出て行つてしまつた。一段落した部屋は静かで、書類を捲く音と、ペンの音だけが響く。

「いや、話しかけられない。」

「ネイ。」

「つおー。クーンさんの方から話しかけてきた。

何でしちゃう、と言いつて、手は休まず、顔を上げないまま言葉を続ける。

「同じ職場の人間にはもう会つたか?」

こんな時まで私のことなんか気にしない。ものすごい仕事の量なのに…

『はい、マーサ女官長とヒルさんは会話を交わしました。お一人ともとてもいい人です。』

『そりか。あの一人に気に入られたのなら大丈夫だな。』

そうなのか?いや、クーンさんが言つならそうなんだろう。あの二人はどう見てもリーダー気質だったし。

『あの、クーンさん。余計なことかもしぬせんが、これ、手伝えませんか?』

國家の機密書類だとだとまづいと思つたが、そうでなければ何か手があるかもしれない。

『さつき行き来している人たちの話が聞こえていたんですが、ここには省がたくさんあるみたいなのに、書類は皆さんバラバラに置いて行かれました。』

それを分類するくらいなら手伝えると思うんです。』

せつ、せつとき実はちょっとイレッとした。だって、どこの省の誰かは名乗るのに、どうしてそのまま書類を重ねてくんだけ。誰がどう考へても、効率的じやない。

「…ネイがやる」とじゃない。」

その突き放された冷たい口調。 いんな重苦しい空気を纏っている

怖い。

けど、私の心配ばっかりしてる人には言われたくない。

『私はクーンさんが私を心配してくれるよう、クーンさんのこと、心配してます。どうか、ほんのちょっとしか手伝えませんが、やせて下さい。』

お願いします、と付け加えて頭を下げる。必死の懇願だった。

「ネイ、その“お願い”はするい。」

苦虫をかみつぶしたような顔。どこかするかつたらしい。よく分かんないけど。

『じゃあ、手伝わせてくれるんですね?』

そういつて、小さく渋々と言つた感じだけど、了解の返事が戻つてきた。

やつたー、と喜んで置いてから疑問が一つ。

私、こつちの字読めるのかな?って、かなり根本的な事を今さら  
!アホ過ぎる…

恐る恐るゆづくり書類を手にしてみると。

『あれ?』

私の眩さにどうした、と心配そうな声がした。

『読める…』

書いてある字は明らかに日本語じゃないのに、普通に読めた。疑  
問だらけ。言葉も分かるし、字も読める。違う世界に居るはずなの  
に、いんのつてアリ?

「大丈夫か?」

そう聞かれて現在に帰つてきた。

呆けてる場合じゃない!少しでもクーンさんの仕事の負担がなく  
なるように手伝わなくちゃ。

うしー両類を叩いて気合を入れる。

それから女中部屋に戻つた。

ちなみに、廊下は一切走つません。このスカートの丈でさえ怪

しげな顔されるのに、走つて置いてお転婆だと思われたらなお悪い印象しか与えかねないもん。

でも、最後の方は早足になつて、女中部屋に飛び込んだ。

お田端の人がいて安心。すぐに声をかけた。

『マーサ女官長様。』

「マーサでいいよ、ネイ。どうしたんだい?』

飛び込んできた私に驚きながらも、普通に対応してくれた。流石、大人!

『少し大きめの机をお借りしたいのですが、どこかに宛はありますか?』

クーンさんの机に積み重ねてある書類を整理するためだと話すと、着いて来るよつに言われ、また城の中を歩く羽目になつた。

やつぱり覚えられそうもない…

「久しいね、リュクス。」

着いたのはお城のすぐ近いところにあるスポーツの練習場みたいなどこ。でも、そこで繰り広げられていたのはもちろん陸上競技なんかじゃなくて、見るも見事な剣技だった。

「あれ、マーサさんじゃないですか。どうしたんです？」

どうやら一人は知り合いらしい。赤毛の青年はそばかすのある頬を上げ、無邪気に笑っていた。

随分と爽やかそうな人。私はじつと見つめてしまった。

「あれ、後ろの人は…初めて見る顔だね。」

私の視線が熱過ぎたのか、話題に上がってしまった。早いところりたいのにい。

「この娘は今日からクーン魔道師の専属の女中になつたんだ。ネイだよ。ネイ、こつちは騎士団第一軍長官のリュクス。クーン魔道師の部下さ。」

ほー。若いのに立場的には高い所にいる人なんだ。さすが、こう

いう仕事だと実力主義なんだね。

『初めまして。』

そう言つとこやかな挨拶の返答。それからお約束になつた私の格好の説明を終えて、机の件に話は移つた。

「と言う訳で、クーン魔道師の部屋に運んで欲しいんだよ。

お願ひできるかい?」

マーサさんの話を聞いたリュクスさんは、嫌がるどころか目をものすごい勢いで輝かせた。

…犬?

耳と盛大に振られてる尻尾が見えた気がして目を擦つてみると、そこにそれは存在してなかつた。

でも、なんかリュクスさんつて犬っぽいなあ。

「お任せ下さい! そんなお願ひならいつでも聞きますよ。」

誰かの名前を呼ぶと、リュクスさんはその人に事を説明する。その人もやっぱり嬉しそうにしていた。

クーンさん、みんなに人気なのかな。イケメンは男女問わず人気が高い、って心のノートにメモつておいた。

場面は変わりまして、現在は私はお城の廊下を、机を運んでくれている騎士団の方と歩いております。一人は人懐っこいらしく、奇抜な私も簡単に打ち解けていた。

クーンさんは騎士団の長官だって聞いてたのに、言われるまで記憶の奥底に仕舞つてあつたみたい。完全に忘れてた。

「クーン魔道師は俺たちの中じゃ人気が高いんだよ。年寄りのお偉い方には嫌われているが、貴族の娘たちの間でも人気が高いな。」

ああ、それは言われなくとも分かる。

『あの容姿ですから、若い娘たちは放つておかないでしょうね。』

きつとアイドル状態。顔、スタイル、完璧。てゆーか、何頭身ですか？足、長いよねえ。

私は…うん、見なかつたことにじょーかな。

残念過ぎる私の容姿の説明はバスと行きますよ。

「おや、ネイは興味ないのかい？」

からかいを含んでるその瞳には、わざと空氣を読まずに一刀両断。

私はやつぱりこれは関係しないで、傍聴で話を聞いてる役が性に会つてゐる。

『私は、クーン魔道師さまに命を助けていただいたんです。ですか  
ら、その恩を返すために誠心誠意お世話をせて頂くまでですよ。』

笑顔でやつぱり、やつぱり意味じやないんだけどなあ、なんて  
咳きが聞こえた。

わざとですよ、わざと。からかいに対することを言わなかつただ  
けで、わざきの私は私の本心だしね。

それ以外は何も口を開きません！

「それにしても、クーン魔道師には何かれるのはいつ振りかな  
」

名前を聞き逃した騎士さんは熱っぽくやつぱり言つた。本当にクーン  
さんことを慕つてゐるんだって感じる。

それにしても、会うの久しぶりなんだ。あんだけテスクワーグし  
てれば当たり前つちや、当たり前か。

「今の地位に就いてからは練習場にいらしてないんだ。ネイは見た  
ことないかもしけないけど、魔術だけではなく、あの方の剣は迫力  
があるんだよ。」

ほー。それは一度お手にかかりたい。

現代の地球じゃ本物の剣なんて闘う道具じやないだらうし、日本

で持つてたら銃刀法違反で即逮捕だもんね。

『一度でいいから見てみたいですね。』

さつとあの格好良さが引き立つちゃうんだろーなあ。田の保養を通り越して、毒になるはず。その時には卒倒しないように『気をつけなきや。』

「俺は一度もあの人に勝つことがないから、久しぶりに是非手合わせ願いたいなあ。」

リュクスさんの田は、さつきとは違つ輝きを持っていた。何て言うか、ギラギラしてる。

勝ちたって思つてるのか、闘いに飢えているのか。どっちにしろ、今の私にはまだ非現実的な話だ。

…およよ？また人が出入りしてるみたい。

朝ほどではないけど、何人もの人が書類を抱えてクーンさんのお部屋に入つて行く。出でくる人はみんな何も持つていなかつた。

つてことは、全部あの部屋に収まつてゐるのか。

…量、多過ぎませんか？いくらなんでも仕事量がありすぎ。あんなことずっとやつてたら、クーンさんそろそろ倒れるよ。

「中に運び入れるのか？」

縦にゅつくり頷く。すると、ちょっとどじてゐる、と言われ、机を

そこに置いた。

「サイモン、中の調度いい所に」の魔法陣を置いてきてくれ。」

サイモンをもつて置いた。

「ここで名前をよつやく知ることができた人、サイモンさんは、リュクスさんが持っていた紙を持って中へ入つて行つた。

詳しいことは後でクーンさんに聞こう。魔法なんて空想上の物が実在してゐるだけで興味津々。だけど、ここでは当たり前らしいから、変な反応を見せたら疑問に思われる可能性大。

置いて来ました、と帰つて来たサイモンさんが言つと、お礼を述べてからリュクスさんは右手を構えた。

どんな方法を使うのかと思つと。

「 転送 」

そう言つたと同時に指を鳴らした。

案外シンプル。なんやらかんやら、呪文みたいなものは掛けないみたい。少しだけ夢が削がれた気がした。

ほら、杖を使う、とか。長い呪文を唱える、とか。

某ファンタジー映画、みたいなのをイメージしてたから、ちょっと残念だった。

でも、やつぱり驚く。田の前に立つたはずの机とその上に乗せられた魔法陣の紙は、あつたはずの私の目の前から「く自然に風景に馴染んで消えていくかのようにスッと見えなくなつたから。

『リュクス様も魔道師だったのですね。』

本当、ありえない世界だよ。とんだファンタジーだらけの所に来ちゃつてたみたい。

「様付けなんてするなよ。柄に合わない。」

あらら、照れてる?

リュクスさんの顔はその髪ほどではないけど、赤くなつていた。照れてるかどうかを尋ねると、照れてない、何て頑固な返事。そんなの肯定してるもんだよ。

面白い人はつけーん!

私から逃げるかのようにクーンさんに挨拶に行くと告げると足早に部屋に入り込んで行つた。慌ててその後を追つ。

私とリュクスさんが廊下で立ち話をしている間に一段落ついたのか、人通りはまた途絶えていた。

中に入るとサイモンさんがもうクーンさんと話している。本当に久々だつたみたいで、少し分かりにくいけど、クーンさんは喜んでるみたいだつた。

「クーンさん!」

あ、犬が飛びついて行った。やっぱり全力で振られる尻尾が見える。

ホント、懷いて…いや、慕ってるんだねえ。

「ネイ、机を運んできたのか？」

はい、と返事をして、お茶のワゴンに近づく。手を動かす前に謝罪を入れた。

『勝手な事だとは思いましたが、このままではうちらが書類で溢れてしまうと思いましたので。

しかし、これからはクーン魔道師さまにお伺いを立ててからいたします。』

丁寧に礼。それからお茶を淹れはじめた。

さつきの手順を思い出す。ミリアに言われた通りに、ミリアに言われた通りに… 心の中で何度もそう呴いて、お湯を注ぎ、蒸らし時間を計るために砂時計をひっくり返した。

本当に女中だつたんだ、なんて呴いてリュクスさんの言葉は聞こえなかつたフリをしどきましたよ。

温めたカップを三つ用意して、砂時計の中の砂が完全に落ち切ったタイミングを見計らつてお茶を注ぐ。それが終わるとトレーにそれを乗せて、丁寧に三人の所まで持つていった。

うん、置くところがない。

当たり前だけど、クーンさんの机の上は書類だらけ。

「とにかくすぐに役立つとは、ね。

私は運んで来たばかりの机の上にカツプを二つ並べた。有難う、と言わると嬉しくて笑顔が零れる。

『初めて淹れたので、味の保証はできませんが、どうぞお飲み下さいませ。』

「ネイも一緒に飲もう。」

味の感想を待っていると、クーンさんは唐突にそう言った。

いや、それはいかんでしょうが！

『私はクーン魔道師さまの女中なのですから、それは困ります。』

初仕事のウキウキほっぺやう。

リュクスさんたちの机の前でなんつーことを抜かしてんのー

うひたえる私、主張を搖るがさないクーンさん。一人のやり取りを一人は目を丸くして見ていた。のにも拘らず。

「“魔道師さま”なんて呼び方は外だけでいい。少なくとも俺に直接そう言つのはやめてくれ。」

もー！！！無理難題ばっか、押し付けないでよ。ってか、そこ  
二人、助けてー。

なんて手を伸ばそうとしたら、クーンさんの妨げによつてそれは  
達成されなかつた。

## 専属女中（メイド）、出勤 ものの4

「クーンさんとネイはそういう関係なのか？」

「コクスをさうり、訳の分からん事言つなー」でゆーか、クーンさんは否定くらこして！

「ネイは賊に襲われていたところを俺が助けたからと、身の回りの世話をすると云つて聞かないんだ。」

何それ〜。半分以上嘘じやないですか！

とは言えず。私はぐつと押し黙つた。

「確かに身のこなしは貴族令嬢のそれですね。もしかして、そういうのですか？」

サイモンさん、話を膨らませないで。そして、そりが私に弁解の余地を！

「それは…」

クーンさんはここで黙つて私を見る。その所為で視線は私に集まつた。ひじょーに居心地が悪い。

「ネイ、そりなのか？」

リュクスさん、そんなの知ったこっちゃないですよ。大体から言つて全部初耳だし。

言葉に困つて黙つたままの私。こんな微妙な空氣の中、口を開く勇気なんて無い、つて思ったのは四人中三人。

空氣なんでお構いなしに口を開いたのは、さつきまで見えてた尻尾（比喩）を下しているリュクスさんだつた。

「まさか、賊に襲われたのが原因で記憶を失つたのか……？」

急な展開に耳を疑う。眉を顰めて。

『…はい？』

なんていつた所為で勘違いはさらに続いてしまつた。

私のおバカー！

「悪かつたな。思い出せないのに無理に聞き出そうとして。」

泣いた！なんてこつた。大の男が泣いてますよ。

『あの…「いいんだ！」

はひ？今ので伝わったはず…

「何も言わなくていいんだよ。」

…ないよね」。

『リュクスさん、何か勘違いしてるんじや…』

ガシッと肩を掴まれて言葉を遮られる。思わず飛び上がったのは無理もなかつた。

「辛いことが分からぬ状況下にいるんだな。クーンさん、俺、ネイみたいな娘を増やさないためにも鍛錬を行い、見回りをしてきますっ！」

…

行つちやつたよ。

私の手と口はリュクスさんを止めようとしたところで固まつていた。

「ネイ、何があればいつでも相談に乗る。では、私もこれで失礼します。」

サイモンさんは礼儀正しく挨拶すると、やっぱり勘違いしたまま行つてしまつた。

伸ばしていた手を空中から力無く下ろす。

それから、さつきから聞こえてくる、聞き慣れたクーンさんの喉

の奥で笑う小さな声がする方を睨みつけた。

『…クーンさん、遊びましたね?』

笑つたところでそれは確定してた。大体、意味深に黙りこくれた時点で可笑しいとは思つてたんだよね。

「…すまない。あいつらと会うのは久しぶりだから、つい懐かしくなつてな。」

貴方はいつもそんなことして部下をからかつてたんですか! 私なんていい餌にされちゃいましたよ。

「リュクスの勘違い癖は治らないみたいだな。」

そう言つてまた笑つた。

『リュクスさん、いつもあんな感じなんですね…』

こんなこと言つたらダメだろ? けど、会つ度に疲れそう。それにしても、この世界に来てから、必ずつて言つていいほど最初は話を聞いてくれない人が多い。

「驚いただろ? 少し前までは毎日会つていたから何とも思わなかつたが、久しぶりに見ると面白かったよ。」

明るい微笑みを浮かべたかと思ひきや、いきなり陰つた。それが何だか自嘲気味な笑顔に見える。

『クーンさん?』

顔を覗き込むと、また笑顔を作りつつしてゐる。私は咄嗟にそんなの嫌だつて思つて、やめてください、と口にした。

『無理に笑わないで。そつちの方が見てて不安だよ。

私、クーンさんの手伝い頑張るからー協力し合えればきっとリュクスさんたちと会う時間がができるよ。』

ぐつとスカートの裾を握つていた。皺ができるだらうから、きっと後でミリアに怒られるだらうなあ。

なんて、今はそんなこと気にしてゐる場合じやなかつた。

「普段の口調はそつちなのか？」

はつー勢い余つてタメ口にー

『じめんなさい。』

田上の人には敬わなくちゃ。日本人として、これ、常識なり。

「いや、気にしていない。むしろ、いつもその口調であつて欲しいくらいだ。」

それはできませぬ故。一重に辞退を申し出た。

『リュクスさん、言つてました。クーンさんと手合わせしたいつて。クーンさんもその顔だとひとつとやつと思つてますよね?』

ぐつと押し黙つた。つてことは凶星なんだね。勝手にそつ解釈して話を進めた。

『クーンさんは騎士団の方々から人気があるみたいですし、貴族の娘さんたちからも人気があるつて聞きました。そんな人が部屋に籠つてるなんて、勿体ないですよ。』

「リュクスのやつ、余計な事を。」

ありや、情報源がばれてる。聞いたやいけなかつたみたいだから、リュクスさんは後で怒られてください。

『私もクーンさんがリュクスさんと手合わせしてると、見てみた  
いです。』

そう言ひつと一瞬動きが止まる。不思議に思つていると、手が伸びて来て…

「失礼します！」

「な、なんだ！」

さやーーし、心臓ひっくり返る！

その手が私に触れる寸前にドアが開かれた。

「書類のお届に上がつただけなのですが…」

私は急いでカップを下げる。クーンさんも何もなかつたかのよう  
に、受け答えをしていた。

顔、あつつい。

クーンさんの目があんまりにも真剣だったから。目、逸らせなかつた。

あーっ、もう一考えるとまた顔が赤くなるでしょーが。

自分を叱責して、ワゴンを端に寄せたから、クーンさんのところへ向かった。

『クーンさんって、この書類をチェックするだけが仕事じゃないですかね?』

「ああ。法律改定の嘆願書や、城下の制度についての様々な書類がありますよ。」

各省、と内容は異なるが、認可して議会へ行くものは宰相のところ、不可の場合はその省へと逆戻り。

その場合、添削をして戻している。必要があればそこまで行って、説明を行っている。」

「へ、全部?うひやー、クーンさんすい。私なら一冊も持たないと思う。しかも全部一人でやつてるみたいだし、天才、いや秀才さんなんだねえ。

これ、私なんかが手伝えるのかな?

つて、ダメダメーやるつて決めたんだから、やる前から呑込みし

てちやいかんでしょう。

『机の上にある書類はどう』の省のものかはバラバラなんですね?』

聞くところによると、説明をしてくる人がいてそれを聞いてる間に置いてくる人が多いんだって。分類する暇もないらしい。

そもそもつて夜遅くまで仕事してたら、きっと対策を用意する暇も労力もないはず。

女中さんとか従者さんを付ければいいのに、ミリア曰く、クーンさんは周りに人を置くのは監視されてるみたいで嫌らしい。

『まだ手を付けていない書類を分類します。ほとんどは手を付けてないですよね?』

そう尋ねてから、着々と分けていく。省の名前は日本のものと何ら変わりなくて、ちょっと面白かった。

「…ネイは働いていたことがあるのか?」

なかなかの手捌きだったのが意外だったのか、その声はちょっと驚いている。

心外だなあ。

『仕事じゃなくて生徒会の役員をやっていたんですよ。』

分からぬだらうと、生徒会の説明をした。

『…と、まあ、社会に出た時のための訓練ですね。社会の人間関係を教え込むには、学校を一つの組織のよつて見立てて運営するのが、口頭で教えるよりも簡単ですから。』

…よし、終了!』

サクサクと仕分け完了。

「早いな。」

お褒めいただき光榮です。はい、次行きましょ、次。他にやることは…

ゴーン、ゴーン、ゴーン…

低い鐘の音。私のやる気になつていた脳は、完全に思考を遮られたり。せつからくる気になつてたのに。

『これ、なんの鐘なんですか?』

「昼時になつたら鳴るんだ。』

なるほど、お昼休みか。そう言えば小腹が空いた気がする。

いつもはあの部屋から出られなかつたから、ミリアが運んできてくれてレークさんと一緒に撮つてた。

でも、今日は勝手にしてもいいよね。よく分からないうから、ミリ

アがいると想われる女中部屋にいったん戻り、

『クーンセトはお匂い』『飯ばかりで振るんですか?』

「…いつも食べない。」

はい?今、何とおっしゃった?

私は耳を疑つた。

信じられない言葉が聞こえてきた気がしたけど、気が所為だよね、うん。

なんて思つてもつ一度聞いてみたら、その“まさか”の答えが返つてきた。

『食べない?…いつも?…』

念を押すように聞くと、やつぱり肯定された。

し、信じられない!私なんて美味しい飯のために頑張つての!。

「そんな時間はないんだ。終わらせるのが遅くなると、胃にも迷惑になる。少しの間も勿体ない。」

なんちゅー男じゃー食べ盛りの20代、それでいいんだろーか。

『…食べる時間がないだけで、食べる気がないわけじゃないんです?』

「ああ。」

なるほど。これは専属女中の出番ですねー。『主人様のためにも肌も、一肌も脱ぐ覚悟で』ぞこます。

「ネイ、だから俺の」とほ気にしないで食べに行け。」

でも、つい食い下がったのと、クーンさんの意志は固かつた。

将来は頑固親父になること間違いないし。『その事、ここに面座つてやうつかと思つたけど、腹が減つては戦はできぬ、とも言つますし。』

『闘うことなんてないんだナビ、一時退散と行きましょう。』

『すぐに戻つてきますからー。』

そう宣言して駆けだした。

自分の格好に奇異の目を向けられてるとか、廊下は走っちゃいけないとか関係ない！（いや、関係あるだらつ。）

私は我が主のために頑張ります！

『たのもーつ！』

バンツ、と思い切り扉を開けた。そこにはたくさんの女中さんたちが、当たり前だけじこらつしゃいまして。すごい数の視線を集めてしまつた。

やつちまつたぜ！

知つた顔の方に目を向けると、一人とも頭を押さえていた。

「…ほら、あんたたち…さつあとどじ飯食べないと午後の仕事に間に合わないよ。」

その度胸に感服。マーサさんの粋な計らいで何とかそこにいた女中さんたちは私を気にして酷く後ろ髪を引かれてるような感じだつたけど、女中部屋から出て行つた。

「もつー…急に飛び込んで来てはダメでしょーっ。

「 そうでなくともネイ様は目立つのに。」

はい、怒られます。

反省？御覧の通り、もちろんしますよ。ほら、ちやんと正座。

てゆーか、ミリアって怒ると怖いんだね。今度からは怒られないよつに氣をつけなくちゃ。

『めんなさい。』

「まあ、いいじゃないか。それにしても数うまい勢いで入つて来たね。

何か用事があるんじやないのかい？」

はつ！ そつだつた！

『クーンさんがいつもお顔を隠つてないつて言つじやないですか！

さつき思つたんだけど、お昼はあの部屋に運べばいい。それくら  
いの余力はこの城にいる使用人の多さから言えばあるはずだもん。

「うーん。それを私の口から言うのはお門違いってヤツだ。

まあ、見たつてことになれば誰の責任にもならないかもね。」

少し考えるよつに間をとつてから、マーサさんは視線をリリアに向けた。

「ミニア、一緒に行きな。紅茶のワゴンを持ちにクーン魔道師の部屋に、ね。」

マーサさん、好き！

ぱつちりとウインク付きで言われた言葉に感動した。

「う、ドーンと胸を張つて言われるから、何となく安心できる。でも！クーン魔道師さんはネイ様に一番知られたくないと思っているのではないか？」

「でも、も何もないよ。あの子は人に頼らな過ぎるんだ。味方はこんなにもいるのにね。」

大きなため息。この時のマーサさんは、まるで母親みたいに見えた。

どうしようもない息子を心配してゐる母親。

…きっと、クーンさんのこと、大切に思つてゐるんだね。

「私はネイに感謝してゐるんだ。あの子が自分の傍に人を置くようになつたことだけでも大きな進歩じゃないか。」

なんだか複雑、みたい。ややこしいなあ。知りたいことは教えてもらえないし。変な改定願いなんて山ほどあつたし。

こここの政治は大丈夫なのかねえ。

実はさつき、仕分けしながら、いけないとは思つたんだけど、内

容をひりつとい、ね。

ほり、ダメだって思ひことほど反抗的こやつてみたくなるつて言うか。立ち入り禁止つて書いてある所ほど立ち入つてみたくなつちやうつて言つた。

国の重要書類とは分かりつつも、つにつに見てしまつたわけで。

私、天邪鬼なのがも知れない。

「…わかりました。ネイ様、行きましょう。」

お、ミリアが折れた。流石お母さん的存在のマーサさん。

それにしても。

『同じ仕事してゐるんだし、“様”付けするの止めよ。』

ずっと気になつてたんだよね。

言つタイミング逃してたから今まで言わなかつたけど、私は單なる女中だし、ミリアは女官だよ?立場が上の人に様呼びされちゃう。周りにいる人だつて変に思つよ、きっと。

「それだけはなりません!」

ちえー。

結局言つ合ひになつて、マーサさんから私たちに雷と言つて鐵槌が下されました。

つて」と、話は一時保留。

私とミコトはそそくセントクーンさんの部屋に向かった。

それはドアを開ける寸前に、聞こえてきた話。冷静なんて言葉を頭からふつ飛ばすべりのものだった。

「ほひ、尊の専属とやらはおらんのか。見物に来たと云ひのて、時間の無駄になってしまったではないか。」

ゆつたり、いや、ねつとつとした纏わり付くような話し方。虫唾が走る。

「申し訳ありません。昼食を摑りに行かせました。」

クーンさんが謝ることないのに一てゆーか、そんな見物する時間があるんだつたら仕事しろよ。

「ほひ。主人を差し置いて昼食に行くとは生意気。とんだ忠誠心だな。」

余計なお世話だ、コノヤロウー

口が悪いかも知んないけど、腹が立つもんは腹が立つ。いや、段々腸が煮え繰り返ってきた気がしてきた。

私は何とか握り拳を作つて耐える。しきりミコトが心配そうな

視線を送つて來た。

「…クーン魔道師さまにひとつては日常茶飯事のことなのです。ですから、頭にくるとは思いますが、辛抱なさつてください。」

その小声が耳に入つて來た時、思わず手を握り締めるのを忘れていた。

日常茶飯事つて、こんなねちねぢ言われるのが日課になつてゐること? ありえない。

「戯れ事、戯言だと思つて気にしないのが得策です。

あんな肩書きだけで生きている、無能な税金ドロボウ貴族の狸ジジイの言つことなど、気にしなければいいのですよ。

さてと、お耳汚しはいいら辺で終わりにしていただきましょ。」

ただ呆然として部屋の扉の前で立ち尽くしていた。

…ミリアつて毒舌なんだ。

ちょっとのショックとかなりのダメージを受けながら、私はミリアの後に続く。何事も聞いてなかつたみたいに入つてく姿に、もう完敗だ。

「失礼いたします。」

堂々と歩く姿は格好よくて。どうまでも姉さんについて行きます、つて心の中で誓つた。

「宰相様からの伝言でござります。『騎士団員育成法の改正案はまだか』、との催促です。」

はつみみー。二つの間に宰相様と会つたのかなあ。

てゆーか、私、ちょっとあの人苦手なんだよね。昨日会つた時、若干怖かっただし。しかも急に笑い出すから、心臓が何度もびっくりしちゃつたんだよね。

「了解した。午後一番に届けるとを伝えてくれ。

お前は今後、午後の仕事に支障が出ないよう、ひるやすみをしごとに当たなくともよい。宰相殿にもせう伝え、すぐて休憩をとつてくれ。」

畏まりました、と言つて、ニアは出て行つてしまつた。

「他人の心配をしている暇などお前にはないはずだが。

それにしても、この女中が噂のお前の専属か？足を曝しそうて、品位が疑われる上に、お前の母親を連想させる。

少し幼い気はするが、顔と身体は中々よいな。もしや愛玩用か？

愛玩用？それは一体何ですか？

訳の分からぬことを言つオッサンを睨みつけながら、睨まれてることは確かだと雰囲気から察した。

「…聞き捨てならない事をおっしゃる。それはあなたには関係のない事だ。

それに、その娘は愛玩用などではない。：人を計りかねると、その「ひづ」の身を滅ぼしますよ。」

最後の一言は、私の背筋にも何か寒いものがぞつと来た。つてことは、このオッサンはクーンさんのその迫力を一身に受け取るはずだから、なおさらだ。

案の定、狸ジジイは顔を真つ青にして、部屋からぞくぞくと出て行つた。

「…すまない。」

オッサンが出て行つてからほしゃばらへ、どちらとも口を開けようとしなかつた。

私は詳しい事を聞いていいものか悩んでいたし、クーンさんはきっと私に話そつかどうか迷つてたんだと思つ。

『どうして謝るんですか？』

クーンさんは悪い」と、一つもしてないのに。むしり、謝つて欲しいのは訳の分からない御託を並べて、明らかに私の事を見降ろしてきただあのオッサンだよ。

喋り方がねちつこかつたその人は、イメージ通りの体型だった。

良く言つて恰幅がいい、悪く言つてメタボつて。撫でつけられ

た茶色の髪は、見事なまでの七二三分けで油ギッシュだった。

なんか、失礼だとは思つんだけど。…巨大な豚さんが質のいい服着て歩いてます、つて感じ。

『クーンさんは何も悪くない。』

大体から言つて、あのおじさんが訳わからんことばつかり言つのが悪い。そんな中途半端だと却つて氣になるつてくらいのややかな情報。

あー、ホント気になるつてのー！

…まあ、聞かないけどねー。あんな顔してちや、聞けない。

せーと。私は『』飯でも食べに行こうかね。

『クーンさん、私は『』飯食べに行つてきます。』

一礼して、お茶のワゴンを押しながら部屋を後退した。ミリアがきつと待つてくれるのはまだから、急がなくちや。

私は走らないうまに急いで、女中部屋に滑り込んだ。

「お帰りなさいませ。」

涼しい顔をして礼をしてくれるミリア。しかし、その裏側はいかに、つて感じ。

せつあぢよつぴり怖かったしねえ。

「どうしてそんな目で見なのですか？」

私の顔に何か付いてますか、なんてベタなこと、聞かないでください。心苦しいですから。

『んーん、何でもない。お腹空いたー！食いつぱぐれる前に』

『飯行こー。』

腕を引っ掴んで何とか回避。私はそのまま使用人たちの食堂へ連れて行つもらつた。

ほー、広いねえ。

流石はお城、高校の学食とは一味も一味も違つ氣がした。

ずらつと並べてある長机とベンチには人が集まつて座つてゐる。それでも、もう昼休みが終りに近い所為か、人は疎らになりつつあった。

要するに、ちょっと雰囲氣がヨーロッパ的な食堂つてとこかな。

トレーに自分の分を乗せるみたいだし、多分システムは学食とかと同じだと思う。

あ、見知った人たちはつけーん！

『マーサさん、リュクスさん、サイモンさん、エルさん…』

声をかけるとすぐに振り向いてくれたみんなは、明るい笑顔を向けてくれる。さつきまでの黒い気持ちはどこかへ行つて、安心感が胸一杯に膨らんだ。

「おう、ネイ。今しがたりリュクスに聞いた。お前、記憶がないんだってな。」

なにー？！

いきなりテンションが低くなるエルさん。それぞれの顔色を覗つてみると、みんな暗い顔をしてる。ってことはそう信じてる訳で。りゅ、リュクスさんのおバカーー何でさつまの今でもう話してんのよ。

まあ、忠犬だらうから、悪気はないんだらうけどさあ。

『いや、あの…それは、ですね…「いいんだ！」

またこのパターンか！いい加減飽きてきたぞ。

「俺、何でもするからな。ネイがやりたいことはなるべく叶えてやる！だから、記憶が戻るまで、何も心配する」とはねえ。安心しそきな。」

はい、また弁解できないままでよ。

エルさんは涙を拭いながら厨房の方へと駆けて戻つて行つてしまつた。

「何がどうなつてゐるのかは分かりませんが、とりあえずお皿を擱つてしまいましょう。」

ミコアの言葉は有り難かつた。何とも勘違いが激しい人たちだ。私にはこのまま止めることはできないんだろうなあ。これからじゅリアに任せよつ。

私は無視を決め込むことを決意した。

「ネイには複雑な事情があるらしいことは聞いてたけど、そういう風つことだつたんだね。」

『つ、つ、マーサさん、首、絞まつてます！』

何やらマーサさんまで勘違いしちゃつたらしく、私は首元を縛め上げるかのように抱き締められていた。

「マーサさん、ネイ様を放してあげて下さい。そのままでは花畠を見ることになつてしまふますよ。」

冷静に、しかも食べるのを止めないままミリアは言つた。

助かつたけど、やつぱりミリアは裏が存在するのね。誰にだつて裏側はあるのかもしれないけど、ミリアの場合は普段が明るくてい子だからか、ちょっと、いや大分怖い。

ミリアだけは敵に回さなこつてみじめ。これもまた心のノートにメモつておいた。

解放された私は、食事に手を付ける。

『つ、素材そのものだ。』

頷きながら食べる。ミリアはもう慣れていたようだけ、マーサさんはそれが不思議だつたみたいで尋ねてきた。

『私の食べ慣れていたものとは味付けが違うのです。』

「そうか、記憶をなくしても身体は覚えてるってやつだね。」

勘違いは続行中で、私はもうそれでいいと思つて、記憶喪失なんかじゃないと言つのは止めておいた。

ミリアに続いて食べ終わると、お茶を飲みながらため息をひとつ。午前中の間にいろいろありすぎて、ちょっと疲れちゃつた。

人と接するのが苦手って訳じゃなかつたはずなのに、この短時間で会つた人たちみんな個性的過ぎて。その強烈なキャラにクタクタだつた。

もしかしたら、しばらく決つた人以外と会話を交わしてなかつたから、急に人がたくさんいるとこに出て来て、人酔いしちやつたのかなあ。

「大丈夫ですか？」

マーサさんは仕事に向かつたらしく、目の前には心配をかけてくれる人が一人だけいた。

大丈夫、と小さく零すと、お茶を一気飲み。それをトレーに置くと、ミリアが片づけに行つてくれた。

さてと。これからどうしようかな。

とりあえず、私の中でクーンさんの仕事時間短縮計画を進めるために必要な事を考えなくちゃ。

「どうしました？そんな怖い顔して。」

急に声がかかる。聞いたことがある声。

『レークさん！』

声がした方を向くと、ここ数日一番一緒に居た人がいた。

「服を大胆にいじられましたね。“二ホン”では手足を出すのが批判的には捉えられていなかっため、当たり前なんですよね？」

ひたすら話してたから、クーンさんは地球についての知識を、今じゃかなり持ってる。一口一口しながら話す姿に、はい、と答えると、その瞳はキラキラしていた。

「よくお似合いですよ。人形のよつに愛らしいですね。」

うーん、嬉しくない。人形つて…子供じゃないんだから、違う褒め言葉にして欲しかった。

ん？てゆーか、褒め言葉だつたのかな？

レークさん、異世界の研究が進まないからお昼に話をして、つて昨日言つてたけど、それを本当に実行するとは。確かお祭りの準備で忙しいはずなのに、大丈夫なのかなあ。

「あー！神官様発見！！」

“げ、見つかった”、そう呟きましたね、今？逃げ出してきたんかい！

あれよあれよと言つ聞いて、レークさんは白い服を着ている人たちに引きずられて行つてしまつた。

何だつたんだろうか？

呆然と立ち死んでみると、ミコアが帰つてきて言つた。

「私は仕事に戻りますが、ネイ様はどういたしますか？」

おやぢへ一部始終を見てたはずなのに。全く動じてないし…

『うーん、とりあえずクーンさんの仕事時間を短縮させる方法を考える。つと、その前にご飯持つてこうかな。』

私も気にするのを止めて、意識を別のことを持つていいく。

「厨房の方に行けば、エルさんがいますから、相談すれば何とかなると思いますよ。

それと、クーン魔道師さまの仕事時間を短縮する方法は、私も考えてみます。』

ミコア万歳！

私は嬉しくなつて飛びついた。

『ありがとつ、ミコアー。』

〃コアは固まつたままだつた。

さよつとくらつて反応して欲しいんだけぢ…無反応だと対応できない。

「…ネイさまは感情の表現が豊かですね。」

遠慮がちに言われたけど、そつは思わない。感情表現が一番なのは、多分リュクスさんあたりだ。

『「じめん、五月蠅かつた?』

「いえ、やつこりつとではあつません。」

少し言葉を濁す。そんな事されりやあ、余計に気になるつてのが、人間の性。

でも、ま、時間も無いし、そんなことしてゐ場合でもないんだけどね。

「とにかく、何でも協力しますから。ネイさまはそのままドクーン魔道師さまに接してあげて下さこな。」

了解、と残すとエルさんに会つたために厨房まで行つてみた。

すゞいお皿の量。まず最初にそつ思つた。

洗い甲斐があると言つたか、何と言つたか。それはそれは半端ない数の、使用済みの皿が山積みになつていた。

「お、ネイじやねーか。どうした？」

困つたことでもあるのかい、と聞かれ、その表現にやつせの「こと」を思い出す。

結局私は記憶喪失つてことになつたままなんだよね。つて言つても、もう弁解する氣は更々ない。

人間つてのは学習するモノですからね。いい加減、何を言つても私が氣を使つてるつてこつ風にしか捉えてくれないつて分かつてるもん。

それに、やつき思つた。このくんテコな設定は使える。だつて、さつきの「ご飯もよく分からぬ野菜がいっぱいあつた。

つて、ことは、だ。

記憶喪失全ての記憶が無ければ、きっと知らないことだらけでも変には思われないはず。

そう納得して、本題に入った。

『クーン魔道師さまが時間が無いつておつしやるから、何か軽いも

のでも作って行ひつかと思つて。協力、してくれませんか?』

ゆうべつ、見上げて懇願するよつて言つた。

策士とも何ともお言ひ。私、腹黒いですからね!

「あ、ああ、もちろんさ。」

イエス! 作戦成功つてことで、目的の実行はサクサク行きましょ。

「何を作る気なんだ?」

そう、問題はそれなんだよねえ。一応記憶が無くなつてことになつてゐるから、チキンパキ作るのはきっとまづい。てゆーか、バレる。

そこまで記憶の所為にできるかが問題。エルさんが気にしない人だつたらいいんだけど。

純粹に、私が記憶喪失だけど、体が覚えているから作れる、とか、純粹に信じてくれたら尚いい。

… みし、じーは気にしないで進める」とじよつ。

エルさんにお願いして、パンと卵と野菜と油と酢を用意してもらつことにした。

「野菜は何がいるんだ?あと、たまごは何のたまごを使つる気だ?」

ずらりと並べられたものに驚いた。すごい数。で、気が付いたことが一つ。

じーは城内の厨房、つまりたくさんの食材が詰まつてゐてじー。

そりやあ、種類を尋ねられるほど有り余つてますみや。

自分で選べって言われたらまずい。つてことで、先手を打ちましょ。

『レタスとトマトとキャベツ。あ、あとニンニクもあつたら。それとハムとベーコンとチーズもあれば嬉しいですね。』

エルさんつて本当にいい人だよ。言つたものを全て聞きもりすかに、すぐさま用意してくれましたから。

それに、拳動不審な私を疑いもせずに……心が少し痛みます。

でも、それにしたつて……用意した量が多すぎると思います。

トマトは一籠、ベーコンとハムとチーズは塊。油に至つては、瓶が一ダース。何人前よ？

それにしても、見かけないものだらけ。恐る恐る手にとつて、黄色い葉っぱをかじるとレタスの味！白いのはキャベツ。

この液体、まさか……ほんのりピンクがかつた液体は酢だった。

全部味は同じでも、色や形が違つ。これから、食べる度に違う色のものを口にするのね。複雑。

「ネイ、だから卵はどれにする？

そう言つて見せられたのは、さつきの量の多い卵。よく見ると、30種類以上あるみたいで、色や形が違つた。手前にあつたのを手にとつて、とりあえず器に割り入れた。

『これ、黄身が緑！』

驚愕の事実！てゆーか、食べる氣すらしない色だった。

「それは黄身じゃなくて緑身だ。」

「つ、そー、ま、ジー？ジョーダンやめてよー！…いや、至極真面目だ。」

エルさんは不思議な眼の色を隠しもしないで、私を見つめている。それからハツとして、愁いを帯びた目に変わった。

「ネイ、やっぱり記憶が薄れてるんだな。これからは何でも言え！おじさんが何でも相談に乗つてやるからな…！」

ハイ、ついで言いつつ、後ろめたくなつて心の中で謝つた。いくら腹黒い私にも、流石に良心は存在する。本気で心配してくれているエルさんに、全てにおいて嘘をついてるのが心苦しかつた。

そんなこんなで一段落ついて。

「ネイは黄身の卵が欲しいんだな？」

論点は元に戻つた。

説明されたことによると、鳥の種類によつて卵の中身の色が違うらしい。

黄身のものは原種に近くてあまり好まれないらしい。黄身が緑とかピンクとか黒とか、ましてや青とかより個人的には断然黄色がい

「 いと思ひナビね！」

ま、それは個人の自由だから一端置いといて。

『 まずはこれを茹でます。』

それから、それから。やつぱりやることがあるのは嬉しくて。向こうに居た時よりも手早く料理を始めた。

卵の黄身と酢と油を使ってマヨを作る。

これにはやつぱりサンディッシュには必需品だよね。

やう思つて搔き混ぜてみると、初めてこれを見た時のクーンさんたちと同じよう、エルさんは不思議そうな顔をしていた。

『 ちよつと舐めてみます？』

それに頷いて小指にちよつとだけ付けて舐めた。すると、みるみる表情が変わる。

「 へ、つまこー。こんなに美味しいもの、今まで味わったことがない！

ネイ、じつやつて作ったのか、もう一度説明しながらやつてくれないか？』

その興奮とキラキラした皿に倒されつつ、ちよつと面白かったから、企業秘密にしてことじとした。

今は時間がないし、また次回にわいわい期待ー早くクーンさんに食

べてほしいから。

それからの作業はもっと早く進んだ。エルさんが手伝ってくれたしね。

ベーコンをカリカリに焼いて、ハムとチーズをスライスしてくれてる間に、私はパンにバターとニンニクを混ぜたものを塗つて、フライパンで焼いた。

卵は潰してマヨネーズを加える。キャベツの千切りにもマヨネーズ。

本当はマスタードも入れて和えたかったんだけど、その、色が、ね。まさかの青だったからやめた。

青つて！食べるものに青つて！－－食べる気失せないの？！

…とにかく、見事過ぎるお色でした。

ここまで用意したらサンデするのみ。私は三種類を考えてる。B レトサンド、たまごサンド、もう一つはハムチーズサンドのキャベツ入りだ。

あんまりにも熱い視線を送つてくるエルさんに、一種類ずつおそ分けした。

さすが料理人。初めて見る食べ物に興味津々だ。手伝ってくれたお礼くらいにはなるよね。

そして、毒味係もある。

酷いとか言つ言葉は受け付けません。興味がありそうだし、私が作つたんだから毒の心配もない。

ま、食材が初なもの（見た目）だつたつてことで。

じーつとHルさんが咀嚼する音に耳を傾けて、感想を待つた。

「う、うまい！今まで味わつたことのない味だ！ネイ、料理の才能があるんじゃないか？」

ありがとうと言ひ、後片付けを簡単に済ますと、新しくお茶の用意をしてクーンさんの仕事部屋へと向かつ。

その間もクーンさんの仕事時間の短縮方法を考えた。

でも、そんなに調理場から遠くなくて、そこにはすぐに着いてしまつた。

朝とは違つて人通りはない。ゆっくりと息を吸いこんでから、ノックして部屋に入つた。

「ネイさん！元気にしていますか？」

開けた瞬間に満面の笑みが迎えてくれた。

『レークさん！』

なんでここにいるの？てゆーか、さつきの「」とを思ひ出すと、逃げてきましたね？憲りない人だなあ。

なんてちょっと呆れちゃう。どうせまた引っ張り戻されるか、怒られるかのどっちかだと思うんだけど。

「実は頼みたいことがあるんです。」

さつきの笑みは未だ絶やしていない。ずっと思つてたんだけど、レークさんとクーンさんってホント対照的だよね。

って、今はそんなこと考へてる場合じゃなくて、お願ひ、だつて？あんまり好ましくなさそうだけど、レークさんのお願いとあつちやあねえ。聞くしかないでしょ。

同時進行でお茶を淹れることに許可をもらつて、手を動かしながら耳を傾けた。

「私が神の声を聞くには、一度ネイさんに鏡盆に触れていただく必要があります。そうしないと、私は存在を感じられないのです。

式典の準備が進むにつれ、誤魔化すことが難しくなつてきました。このままでは事実が発覚し、く最後の乙女への存在が疑われてしまうでしょ。」

そんな事態になつていたのね。無意識に難しい顔になつてしまつ。

その人物を一人の男性が眺めていることは、当の本人も気づいていない。

『…それは、私の存在を隠すために必要なんですね？』

嫌だ、そう思う。

私はこの国の人的心を助ける存在かもしれないのに。でも、やっぱり私には何の力もないと思うから。

だから、その人たちの象徴として崇められるなんて、絶対に嫌だ。  
無責任な事、したくないし言いたくない。それを回避するためなら、協力は惜しまない。

心の中でそう決心し、レークさんたちに向き合つた。

『…わかりました。ご協力をさせて頂きます。』

身体を綺麗に曲げて頭を下げる。これは女中としての礼じやない。  
私自身の決心。

『それより、今時間ありますか？クーンさんにサンドイッチを作つて来たんですけど、たくさんあるのでレークさんもいかがですか？』

二人は初めて調味料を見た時のような顔をした。それのお陰で、説明が必要なんだと分かる。

『私の世界の食べ物です。いや、挟んだだけだし、料理つて言つほどのものではありませんけど。

クーンさんが食べる時間もないとおっしゃるので、手で掴んで食べられるものを用意しました。』

そこまで説明すると、『うわ、と二人に促した。

本当はお米食べたいよね。でも、ここではパンしか見かけないし。私みたいな東洋系の人がいるみたいだし、エルさんに聞いてあるか確かめてみよう。

今となつては本当に恋しいよ、焼き魚と米とみそ汁。日本人には必要不可欠な味だよね。

『お口に合つか分かりませんが、そんなに食べれないものではないと…

「つまー！」

「おこしこー」

一人の声はほぼ同時に、見たことないものを食べるのを訝しがつてゐるのかと思こやや、もう口に運んでいたようだつた。

一人と勢によく食べてる。そんなにお腹空いてたのかな?

一人の食べっぷりに満足しながら、お代りの紅茶をカップに注いだ。

お皿はあつとこゝ間に空っぽ。清々しこぼどの食べっぷりにまた満足した。

「うれしかったです。」

例に習つて、こつもの挨拶。日本の挨拶、定着してゐる?

じつやう食に関する深い考え方、一言の言葉で言い表してゐることに一人は感心したらしく。

私にとつてはもう当たり前のことだったけど、文化も宗教も違うし、珍しい考え方なのかもね。

手を合わせて挨拶している一人を、不躾にもじつと見てしまつた。

…いかん、いかん。こゝ数日でいい男を見慣れてしまつた。

これじや田が肥えぢやつとして。

「さて、私はそろそろ戻るところです。今頃部下たちが血眼になつて私を探してゐる事でしようが、」

分かつてゐなら、もつと早く帰つてあげて下さい。

さつきから聞こえないふりしてたけど…レークさんを呼んでる声がずっとしてゐる。

半分泣きそうな声色からしても、ずっと探してたんだね、つてちよつと可哀相に思えた。

「では、田時は改めて、また明日の時間に参りますので。」

さう優雅に挨拶を残すと、さつとクーンさんの仕事場を後にしてた。

『レークさんの部下さんたち、可哀相ですね…』

思わず独りしゃべる。それに一言、氣にするな、と言つ葉が返つてきて、何事もなかつたかのよひに、レークさんを呼ぶ部下さんの声は途絶えた。

心の中で部下さんたちにホールを送ると、田の前の紙の束に意識を向ける。

「ひつひつちで大変なのだ。…主にクーンさんが。

手伝へる」ことがないか考えなくちゃね。

一度食器を下げる、その途中で氣付いたことがあり、ニアに紙と書くものを受け取つて、足早にクーンさんの元へと戻つた。

「…何を始めるんだ？」

忙しいはずなのに、私を気にしてくれるクーンちゃん。それじゃ意味無いって。

だって、仕事を効率よく回す為に私がいるんだよ?なのに、私のことをいちいち気にしてたら、タイムロスでしょ。

ま、それは言つても、いきなり何か始めたら気になるつてもんだよね。つてことで、説明しながら手を動かすことにしてた。

『I』の部屋を訪れる方々は、書類を自由に置いて行かれるようなので、あとで分けるのが面倒にならないように、あらかじめ置いて行く場所を指定するようにしておけば一目で分かるでしょ!』

私は書類とこらめっこしながら、お手本どおりに名前を書いてみます。けど、どうも上手くいかない。

…つわつ、曲がった!

「…そりゃ。」

あ、今私の書いた字、ちりつと見ましたねー…そしてあたかも見なかつたフリするの、止めてください。余計に傷つく。

下手なら下手って言つてくれた方がまだマシだつて。てゆーか、問題はペンと紙にある、と思つ。

羊皮紙は凹凸激しいし、羽ペンはペン先がさけたるから自由に動いちやう。

それに加えて、なんで読めるのか分からないこの国の文字はくにやくにやしてゐるし。きっとこの国の識字率は悪いと思ひやうほど、へんて「な字だ。

格闘することおそらく30分。私はよつやく全ての省の名前を書いて、札のよつにすることができた。

午前中に仕分けした分をそこに並べていく。

次は厚手の大きめの封筒に、これまた30分ほどかけて名前を入れていく。次はさつきよりもつまくかけた気がする。

「それは？」

伸びをしている私に、見計らつたように声をかけてくる。

『これはチェックが終わつたものを入れる封筒です。』

チェック?と聞き返され、英語は云わらない事を思い出した私は、確認の事だと伝えた。不便だと思う。

だつて、日本語英語つて結構普及してたから、日本語に直すのつて結構難しいんだよね。

『もし私が省への道のりを覚えたら、私が届けに行く事も可能になりますし、その方が回転率が上がると思つたんですけど……』

最後の言葉を濁したのは、途中で自信がなくなつたから。逆に迷惑かけるようなら止めた方がいいかも、って思えてきやつて。

それに、クーンさんの無機質な田線の意味が気になつた。

なんか、嫌だつた？一度うろたえ、それからクーンさんを見る。視線があつて、一瞬で逸らした。

…田力強いですね。切れ長の田は、私を捉えて離さないようだつた。

『あの…』

無言の空間がきつくて、自分から声をかける。でも、やつぱり視線を真っ直ぐ交わすことは難しかつた。

「ああ、悪い。ネイが他のヤツに知られると思つて、少しイライラしてな。そうでなくともこの城内でネイはもつ有名人になつていて」と言つた。

驚いて視線を上にあげると、その瞳に捉えられる。わざと同じように逸らすことはできなかつた。

『お、おお、お茶の用意をしてきます…』

何とかやつてみると、そこから飛び出した。

「何これ！心臓が、痛い。活発に働き過ぎー！」

胸の辺りを押さえるように、眞休みの比にならないほどのスピードで廊下を駆け抜けて、侍女部屋に飛び込んだ。

「ネイさまーあれほど飛び込んではいけないと…ネイさま？」

その場にへたり込んで心臓を押さえる。

冷静に慣れ、自分！

「お顔が真っ赤です。熱でもあるのでしょうか？」

心配してくれるミリアを余所に、私は自分のことで精一杯。おでこに手を当てて熱を計ろうとしてくれてるけど、原因は分かってる。

何だか知らないけど、クーンさんの言葉にジギギしてるのであるからだ。

『ねえっ、ミリアー！クーンさんって天然タラシ？』

「は？」

例によつて、私はミリアに詳しく話す破目になつた。

現在、午後のお茶の準備をしております。

侍女部屋に飛び込んだ時、やう言つ駄ぢちよひば「リリアは私を呼びに行こうとしていたらしい。

「で、何があつたんですか？」

テキパキと手を動かして聞いてくれる「リリアとは違つて、私は動揺を隠せない。

いきなり核心を突いてくるのがミリアらしいと言いますか、うん。遠回りする時間はないって分かってるんだけど。

『あの、ですね…』

そう切り出した。何で敬語なのか聞かれたけど、それはなんか雰囲気だよ。

『クーンさんのお仕事を手伝おうとして、書類を私が配達してはどうかと提案してみたんだけど… そう言つたらクーンさん、私を他の人に知られるとイライラするって。』

あの時の目があんまりにも真剣だったから、他意はないんだつて分かってるけど、ドキドキしてしょうがない。

自分一人の動搖はそのせいだ。

「ま、仲がよろしいんですね。の方にしては、分かりやすい行動に出るには随分と早い展開です。」

納得したように頷いてますけど、ミコア、私良く分かんない。置いてかないでよ。

どう言つてとか話してくれるよつに懇願すると、言葉を選ぶようにして話し始めた。

「そのままの意味です。ネイさまはそのまま受け取ればよいと思いますわ。」

『それって、私の存在が迷惑で知られたくないってこと?』

ま、まさか、そんな風に思われてるとは! ああ、でも確かに、私はここに来てから迷惑しかかけてないし! :

てゆーか、突然ボツと湧いて出た私に親切にしてくれ過ぎてるし、いい加減そう言つ扱いしてくる事に気づけよ、つて話? :

「何でそうなるのですか!」

さつきまで平静だったミリアは、いきなり声を大にして言つた。

でも、どう言つ結論こ、なるでしょ?

『だつて、私はこの城内じや有名だつて言われたよ? この奇抜な格

好の所為でしょ？それに、——来てから迷惑かけてばっかりだし……』

私の今の気分はどん底だ。迷惑かけなによつてするにはどうするべきか、悩みどり。

「その意味、私分かりますわ。」

ため息をついて、手を休めて私に向かつて言つた。

「ネイさま、」自分の容姿についてどう思われていますか？

自分の容姿？今そんな話だつたつけ？

不思議に思いながらも、ミコアの質問に答えた。

『指して特徴もなく、平凡な感じ？あと、残念な足の短さしているよね。』

この国の人たち、みんな背が高くて足が長い。しかも、女人たちなんかボン、キュツ、ボン、な体形してるから、私が最初早乙女つて言われたのにも、今さらだけど頷ける気がする。

私の答えにやつぱり、と独りじりむと、ミコアは口を開き始めた。

「ネイさまが1日で有名になられたのかは、たくさん理由がありますが、原因はその容姿ですわ。」

なに？！そんなに見るに堪えぬほど酷い？一ホンに居た時はそん

な事もなかつたはずなんだけど…

「的外れな事をお考えになつているところ失礼しますが、ネイさま  
は『自分の姿に自信を持った方がよろしいですわ。』

大きく神秘的な黒い瞳はぱっちりしておられますし、艶やかな黒  
髪は印象的なほど美しいです。それに加えて透き通る白いお肌。  
身長は平均よりも低いかもしませんが、華奢な身体に細い手足。  
それなのにお胸はしつかりおありになつて、総合的に見ても人の目  
をとても惹く、愛らしい存在です。

最初にクーン魔道師さまがおしゃられたように、物語の森の妖  
精のように愛らしいんですもの。

クーン魔道師さまはきっと誰かにネイを取られるような気分  
になつて、嫌なんだと思います。」

は、早口一一体で息継ぎしてたの、つてくらに早口だつた。

「お分かりになつまして？」

「そう言われれば、頷くしかなかつた。

「それで、『天然タラシ』とはどういふことですか？」

どうもこうも、そのままの意味。日本人にはかゆい台詞を真顔で  
言つてくるんだもん。

『妖怪だと、私の髪を梳くのが楽しみの時間だからそれを奪つた、だとか。

なんか、じわ、じわり辺がかゆくなる言葉をたくさん言われてるよつな気がしております、ですね…』

そう言って、私は自分の胸の辺りに手を置いた。

「まあ、クーン魔道師さまはそんなことをおっしゃられてるのですね。意外ですわ。」

え？ そうなの？ 私の記憶によりますと、ショットナウソナ事言つてる気がするんだけど。

もしかしたら、ここの人たちにとつては普通のことなかもしない。ほら、外国人ぽい感じだし、お世辞を言うのが当たり前とか。

私がいちいち気にし過ぎてるだけなのかも… そう納得。

『そか、うだよねーお世辞なんだからこちこちにう気にしてちゃダメだつてー!』

わはははは、と大声で笑つてゐる隣。

ミリアが頭に手をやつて、惱ましげにため息をついたのはいつまでもない。そして。

「お氣の毒に。」

そう呟いたのを、大声で笑っているネイが聞きとれるはずもなか  
つた。

靈話？（前書き）

クーンちゃん、弔ひです。

はあ、と一つため息。

先程飛び出して行つた少女に声をかける事も出来ないまま、開け放された扉を閉めた。

せつゝ自分の口から出た言葉は、らしくないもの。

何を言つてるんだ、俺は。まるでおもちゃを取られて駄々をこねる子供みたいだな。

自分を省みるとほんのことが、と妙に腑に落ちて、椅子に座り直す。目の前の膨大な仕事を横目に、どうしても思考が別の方へ行ってしまう事実がそこにはあった。

ネイと出会いつてから、大分日が経つ。夜の時間はお互のことを知るのには最適な環境だった。

それに、ネイのあの艶やかな髪にも触れられる。見た目だけではなく、細くてサラサラと手からこぼれる髪は、本当に触り心地がよく、いつまでもな出でいたい気分にさせるものだ。

ネイに楽しみを奪うなと言つてしまつほど、気に入つた時間。今日からそれがどうなる事やら、いつもよりも進まない仕事に対しでため息をついた。

とりあえず進めないと。今日からネイが屋敷に住むことになるんだ。夜遅くまでなど待たせてはおけんな。

気合を入れると、目の前のものに向き合つた。

ハンコだけのものをする勢いで終わらせ、椅子の背もたれに寄りかかる。今日一日で大分疲れた様な気がしていた。

ノック音。それからドアが開いた。

「失礼いたします。お茶の用意をしてまいりました。一休みしてはいかがでしょうか？」

期待していた人物とは違い、もう一度背もたれに寄りかかる。普段ならば誰かに見せる姿ではないはずなのに、どうも力が入らない。どうかしたんだろうか？普段の俺ならばこんな醜態見せたりしないのにな。

半ば自嘲気味に笑いを溢すと、調度いいタイミングでおかれたお茶に手を伸ばした。

「うまいな。

「恐れ入ります。」

「…ネイはどうした？」

そう聞くと、さつそくですか、などと言われた。何か間違つた事

を聞いたのだろうか？

「私が入室した際も、あからさまに残念な顔をしておりましたわ。」

そう…だったのか？意識していたわけではないのだが。

それよりも、元々は顔に出でること言っていたはずなのに、ネイが関わるとそういうのがなくなるのだな。

そう思い、自分に呆れる羽田になつた。

「ネイさまは現在精神統一をすると書いて、固まつていらっしゃいます。」

何かあつたのか？

そう思つただけのつもつだが、口に言つたらしき。

ミコアの呆れた顔。いつもなら俺に向かつてそのような表情はないはずの完璧な女官だ。

そんなに変だつたのだろうか？

「ネイさまはクーン魔道師さまのお言葉で心を乱しておこです。

それにしてもクーン様、ネイさまをあまつお苛めにならないで下  
れこまし。」

頼まれたよつてつた言われても、身に覚えはない。

俺の言葉で心を乱す？何か変な事でも言つたか？思い返してみて  
も、見に覚えがない。

分かることは、普段よりも格段に自分に正直になつて、真っ直ぐ  
思つた事を伝えていた、ところひとつだけだ。

何がいけなかつたのだろう？

「でも、私は応援いたしますわ。よつやく心をお碎きになれる方に  
出会えたのですね。

しかし、私からの忠告をお許しくださいませ。」

…なぜ、いふこらばれている？

疑問に思つ「」とばかりだ。俺は顔に出でてことみんながら言われ  
ていたはずだ。

と、言つひとは。…ネイか？

「お察しの通りですわ。」

何故表情を読まれてゐる？！半ば混乱に近い。

「ネイさまの」となると、本当に分かつやすこほどお顔に出てお  
ります。

といふで、ネイさまの「」ですが、色恋に大分疎い方のようですね。

クーンちゃんのお言葉で、この辺りがかゆいとおっしゃられておりました。その時にすべてお話をなって行きましたわ。

クーンちゃんの事も、『自分の事も。』

やはり、ネイだったか。あれほど分かちやすく、素直な娘はいな  
いからな。

「…それで？」

先を促す。それはネイが自分の事も話したと言つかひ。

「私が言へる」とはいませう。

その思ひはミコトにせ知られていたようだ。すぐ口元を隠んでしまった。

「それでも、私は応援している事をお伝えしておいた。何かあれば全て伺います。

ネイさまの内面を話すこと以外でしたら、何でも承りますわ。」

ミコトは一寧に礼をすると、一度微笑んでから出で行こうとしてドアに手をかける。その途中でその動作を止め、俺に再び向き合つた。

「ネイさまのはじめ自分の容姿に自信が無こよつです。頼着がないとも言えますね。ですから、男性に言つて寄りあつてもきっとお詫びされなれないこと思います。」

クーン魔道師さまのお仕事を手伝いたいといつ熱意は、是非ともお受け下せご。

あと、コクスさまが言つておられましたが、ネイさまは一度クーン魔道師さまの剣わざを見てみたいそうですわ。」

「……？」

早口なミコアに驚く。

それよりも、ネイは自分の姿に自信がない？

ありえない。あれほどまでに可憐であるのに。

気に入っている黒髪はもとより、あの黒い瞳は神秘的で惹かれる。吸い込まれそうになるほど透き通りた純粋な色実を見せるそれは、とても大きくて愛らしい。

唇は果実のように艶やかで、赤い。

白い肌は触れると消えてしまつと弾いつほど嬌く纖細で、華奢な身体は守りたいとつこ思つてしまつ。

身長が低く細いために最初は未成年かと思ったが、もう成人年齢は当に超してゐる。

初めて砂漠でネイを抱き上げた時、これほどまでに嬌い少女がいるのかと思つてしまつほどだった。

男なら放つておかないであろうに、本人は自信が無いらしい。しかし、それは逆に役に立つ。

邪な思いは、そのまま顔に表れていた。当の本人は気付いていないが。

明るい性格、突っ走る癖。これは男から迫られても、天然攻防が期待できる。それに加えて色恋に疎いのであれば尚更だ。

そう嬉しく思いながらも、自分もその中に含まれて居ることに少し気を落としてしまった。

さて、どうしたものかと気にしつつも、田の前の仕事が終わらなければネイの髪に触れられる時間もやつて来ない事を意味している。

…早いところ片付けよう。

そう思い、またネイのことで走らせるペンを止めた。彼女は成人している。あれだけ愛らしければ、元の世界に恋人がいたのではないか?

…これは盲点だ。

そう気付き、もう一つ気になることができた。レークに二ホンのことを話してはいるが、一向に寂しがるところを見ていない。

普通ならば、帰りたいと思つのでは、自分の故郷を思つこと当たり前だ。

その行動を一度も見せないと、一体どうこういふことなのだろう?

何か事情があるのかもしれない。

今夜はこれを聞く」と云ひして、そのためにも田の前の前の仕事を終わらせようと躍起になつた。

おかげで渉つたのは無理もない。

閑話？（後書き）

彼が一番純粋でいい奴なのかもしません。

温かい家（前書き）

お気に入り登録が100件をこえました！  
ありがとうございます！！

「よし、終わった。」

クーンさんの一言にホッとする。

今日は私が初めて働く日だから、大分迷惑かけちゃってたから。終わらなかつたらどうしようかと思つたよ。

『いつもより早く終わりになつたみたいですね。』

ぬまぐるしきほどのスピードだつた。

私はと言えば、ミリアにお願いして各省までの道のりを教わつて、書類を届けたり、お茶を入れたり、そんなことで一日が終わつてしまつた。

もつと、役に立つことない。やつ意気込んで、やる気を明日へ持ち越すこととした。

「ネイがいたからな。よし、帰るとするか。」

わつと立ち上がると、Hスコートをするかのように手を差し出してきた。

と、Hスコート。いや、日本人としては迷惑で当たり前だと思つ。

それに、私はクーンさん専属の女中だし… そのままフリーズしていると、ノック音、それからドアが開いた。

「ネイさまのお荷物をお持ちいたしました… 何をなさつてこるのであります？」

明らかに呆れたようなミリアは、半眼で見てきた。そんな事言わなくても、と心の中では呴つてみたものの、それはむちゅんと聞いていい。

一時停止したかのよつて立ち止まつていた私とクーンさんは、こじだわりの動作を止め、再生された。

「外に馬車の「」用意はできておつます。ネイさま、また明日お会いしましょ。」

やつぱり、やつやと踵を返す。

「コアラしげいけど、こくらなんでも煙草しか述べなやうじやないですか？！って、混乱してるのは、やつやの微妙な空気の所為なんだけどね。

氣を取り直して、何事もなかつたかのよつて振る舞う。それはクーンさんも一緒。私は促されるまま馬車に乗り込み、お世話になるクーンさんの家へと向かった。

馬車は10分足らずで止まつ、到着した事を伝える。

クーンさんに続いて降りよつとするが、慣れないものの所為か、バランスを崩してしまつた。やつやと同じよつて手を差し伸べられ

たけど、今度は素直にその手を取ることができた。

ほわー、いかにも、なお屋敷ですな。

古く、しかしどこか風情があつて、造りがしつかりしているお屋敷を、私は馬鹿みたいに感心して眺める。

ほら、都会に初めて来た人が、街並みとか電車に驚く、あれと一緒。今までの生活からしてみれば、あり得ない家の造り。

本気で、中世ヨーロッパに送り込まれたんじゃないかつて思つちやうほど。

「ネイ？」

馬車から下りてからこつまでも突つ立つていた私に、びうしたんだ、と声がかかる。

どうしたも「うしたも、圧倒されてるん」テスヨ。とか、言える暇もなく、私は促されて中に足を踏み入れた。

広い玄関、吹き抜け、正面の螺旋階段。：映画のセットみたい。

どうも現実味がない。緋現実的過ぎるのかもしれない。

本当に、ここで生活してるの？

見慣れた無機質な部屋の造りが面影もないそこは、壮大過ぎる作り物のように感じた。

クーンさんのお屋敷の中は、城よりも生活館が漂っている。豪華だけど豪勢とは言えないそこにある調度品の数々は高そうだ。使いこんであつて、逆に好感を持つ。

それに触れてみたい好奇心に駆られつつ、目の前の人物たちによつてそれは阻まれた。

「お帰りなさいませ。」

うわ、リアルメイド！城にもいたけど、こっちの方が本当に『主人さまに仕えます、的な感じ。私もこれからのために見習わないと…』

「クーンさま、こちらのお譲さまは？」

不羨にもじーっと見つめていると、視線を交わすことなくクーンさんに疑問をぶつけている。

私、そんなに不審者っぽいのかな？

何だかいたたまれなくなつて、視線を下へ向ける。こいつは大人しくして、クーンさんに任せておくのが一番だ。

「今日からここに泊ることになつたネイだ。俺の部屋の隣が空いていたな？そこをネイに充てて、取り急ぎ湯あみの用意をさせてくれ。」

「疲れているだらうから、と付け足された言葉に突つ込みたくないな。

それはクーンさんの方でしょ、って。あれだけ働いといて、私の心配つて。自分の休息も考えて欲しい。

「まあ、それならば先に申しつけておいてくださいれば、お部屋をネイさまに合わせた可愛らしい飾り付けにできましたの!」

シコリキスさまはそんなことをおしゃられませんでしたが、この事はお知りで?」

「…私は知つている。」

…宰相さま?…ビリシテ!ここに居るんだろ?!

一人訳が分からぬ私に、クーンさんは後で話すと耳打ちした。

「ネイ、よく来たな。自分の家だと思つて寛ぐとい。また後日ゆっくり話すとしよう。

私もネイの料理を食してみたい。その時はぜひ私も預かりはかりたいものだな。」

そう残すと、さつやとビニカへ行ってしまった。

…!この世界の人たちはいつも急に現れて、いつもすぐに消える。心臓、びっくりしちゃうから。

でも、帰り方が見つからない今、ここでの生活を考えるべきだから、慣れなきやいけないと思う。

…なんか、ビットと疲れた。

それを顔に出さないよつこじこると、わらわのメイドさんは私を部屋に案内してくれた。

『うわー……』

お屋敷についた時にも呆けちゃったけど、今いじどもまた呆ける。

だつて、広過ぎ…今までの価値観が崩壊しちゃう。

ぐるぐる部屋を見回す。ここがでぐると現実なんだつて思つしない。

「お気になつましたか？」

私を面白そうに眺めて、そう尋ねてきた。一瞬ハツとして、一人じやなかつた事に気づいて急に恥ずかしくなる。私は動きを止めて、メイドさんに向き直つた。

『あの…こんなに広い部屋を使わせてもらつてもいいんでしようか？』

「お嬢さまはとても謙虚な方なのですね。」

わらわの笑顔と違つて、優しい微笑み。私はおばあちゃんを思い出しちしました。今、思い出したくなかったのに。

私は俯く。そつするしか対処法がなかつたから。

いつも見たくないものから田を背ける癖は健在らしい。少しづつ私はいつも逃げている。何かを察してくれたのか、声色に少しだけ変化があった。

「もう少ししたら湯あみの用意が終わります。これからしばらく滞在するようなので、このお部屋も少し飾らせて頂きますね。」

『あっ、いえ、私なんかのためにそのような事をしていただくなにはいきません。』

語尾が小さくなる。メイドさんの田力に負けたから、田をさらしてしまった。

『いいに聞かせてもらえるだけで、十分なんです。』

私は多くを望んじゃいけない。他人の迷惑になるべくならないよう、他人の役に立つようにしなくちゃいけない。

「まあ、本当に謙虚な方なのですね。しかし、クーンさまの命ですもの。おもてなしをさせてくださいな。」

でも、とこづ私を止め、さらに話しあ出す。

「謙虚な事はお嬢さまの美德だと思います。しかし、他人の家に世話になる事を考えてみてください。」

おもてなしとはされるもの。それを受けなくては失礼にあたると言つ事を覚えて下さいました。」

『…はい。』

私にとつてその言葉は重くのしかかった。言われた事は的を射ている。私は、失礼なことをしてゐるんだつて」と、考えてもいなかつた。

それにしてはあの場所とは違つ。きっと、考え方だつて違つはず。

「そんな顔はなさらないでください。女中どもはお嬢さまがいらっしゃつたこと、實に喜んでおります。

」の家のお讓さまは早くに嫁がれてしまつたので、物寂しく感じたのです。」

「こり笑顔はやつぱりおばあちゃんを彷彿とさせた。

「男だらけではむやくないかい?」

ひー急に声が?!

と、思つたら、クーンさんが入口に立つていた。

こつ之間に来たんだろう?

着替えたらしく、公務の時よりもラフな格好。それでも現代的なものとはだいぶ違つっていた。

「いいえ、そのような事は申しておつません。ただ、楽しみが増えた、と。」

一触即発？

主従関係が成り立っているはずなのに、どうも火花が散つてゐるよう見えた。

腕を組んでいるクーンさんは、若干威圧的。一方、女中さんは相変わらず微笑みを浮かべたままだ。お互いに纏つてゐる空氣に温度差がある。

どうしたものか、仲裁に入るべきか、と考えていると、一言声をかけて女中さんは出て行つてしまつた。

もちろん残されたのは一人。クーンさんはお風呂に入るよつて言つて、一時間ほどしたらくると残して出て行つた。

部屋に、今度は一人ぼっちで残る。

とりあえず荷物を抱えてソファーに座つてみると、奥の扉から女中さんが数人出てくる。どの人も30代ほどで、やわらかい笑顔を浮かべているから好印象だつた。

「湯あみの」用意ができました。」

私ははい、と立ち上がる。そこへ向かうとその人たち笑顔を浮かべたまま、その場を動かない。

どうでもうわないと入れないんだけど……？

え？ と思つてみると、一瞬で服を剥ぎ取られた。

『えつ、ちゅつ、まつ……！』

止めようとした声を遮られ、お手伝いしますの一言。ひ、一人で入れますー！

温かい家（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

## ネイの心、クーンの想い

…疲れた。お風呂に入ったはずなのに、疲れた。

一人では入れるのに、花の浮かんだお風呂に入れられ、隅々まで洗われた。良い匂いがするから、その点に関しては嬉しいけど、死ぬほど恥ずかしかった記憶しかない。

髪にもなんか塗り込もうとしてたけど、クーンさんがいつも乾かしてくれる事を述べたら、違和感の残る笑顔をして早々に切り上げて行つた。

全て済んだことの安心感から、白いキャミソルのよつなものを着せられてるけど、そんな事を気にすむこと無くソファーにだれる。身体がぽかぽかする所為か、つとつとじつときた。でも、クーンさんが後で来るつて言つてたから、まだ寝むりやいけない。

そう思つてはみたものの、つじつじつとする。夢半ばになつたとき、ノック音が聞こえ、いけないと思つて姿勢を正して返事をした。

「悪い。起こしたか？」

「え、と一応。顔から半分寝てたことなんてばれてるんだりつたり、それでもやつぱり一応。」

当たり前のよつて私の所へやつてきて、こつものよつて髪を拭つ

てくれる。これにはホッとした。

さつきまで、3、4人に囲まれてお風呂に入つてた。恥ずかしいつたら無い。

でも、クーンさんに髪を乾かしてもらうのは、最初は恥ずかしかつたけど、今は心地いい。眠りを誘う心地よさを押さえながら、今田も話をした。

「ネイ、聞きたいことがあるんだ。」

神妙な面持ちであることが、雰囲気からして分かる。私は何を聞かれるのかと身構えた。

「ネイは……どうして元の世界に帰りたいと言わないんだ？」

その言葉はずつしりと胸の奥に圧し掛かった。

それは今まで黙つてきたこと。…触れられたくなかつたこと。

俯いて、何も言えない。それは私の黒い部分だから。

『聞いたらきっと、私のこと嫌いになります。』

だから、聞かないで欲しいと願う。ここに来てからの私を、今の私を知つてくれる人だから。私を嫌つて欲しくない。

嫌われたら、今度こそ立ち直れない。

「何を聞いても、俺がネイを嫌いになることなど有り得ない。ネイ

「いや、俺の話を聞くと、せつと俺を嫌いになるや。」

話したくなれば話さなくていい、と言われ、迷つ。

私を嫌わない？

…でも、それは“絶対”じゃない。

だけど、私もクーンさんの事情、気になつてた。昼間のおデブさんが言つてた事もあるし。

『私が私のこと話したら、クーンさんもクーンさんのこと教えてくれますか？』

それにOKを貰えたから、私は正直に話すこととした。

『私…いらない子なんです。』

ついに最近までのことだったんだけど、何とかその輪から脱した。それでも、関係性は切れないから、この世界に来れたこと、実は心から嬉しく思つてゐる。

『私の両親、離婚してゐるんです。その時、どっちが私を引き取るのか言い争つたの。

…一人とも、私のこといらないから。お互に押し付け合つて、別れてからもずっと喧嘩し続けてました。

結局、父方の祖父母に引き取られました。』

そこまでは辛かつたけど、捻てた訳じゃない。おじいちゃんもおばあちゃんも優しくて、私は両親のどちらかに引き取られなくて良かったって思つたし、今まで生きてた中で幸せだった。

でも、問題はその後のこと。

『祖父母が事故で亡くなつて…私はまた行き場を失いました。結局父に引き取られたんですけど、それは世間体があつたからで。

本当は新しい家族がいたから、私は邪魔者だったの。』

『今までくると、自嘲気味に笑うしかない。泣かなつこうとするためには、やつあることや紛らすのが一番だから。』

『高校生になつて、家に居辛くなつてバイトばかりして。早く家を出たくて、遠くにある大学に合格を貰つて、家を出たんです。』

いつの間にか髪を拭つていた手は止まり、頭をなでる動作に変わつている。

クーンさんは何も言わずに、ただそつしてるだけだつた。それに身を任せるように、私はクーンさんの胸に背を預ける。体温が、少しだけ私の心をほぐしてくれる気がした。

『非常に走らなかつたのは、多分心のどこかで期待してたから。でも、やっぱり私はいらない子に変わりなかつた。』

昔から、何をするのも苦にならない性質だつたんです。勉強も、運動も、努力とかしなくても簡単にできちゃうから、不器用な妹と

比べる対象に必然的になる私は邪魔者。

妹は慕つてくれたけど、の人たちは自分の娘より何でもできる私が嫌いだつたみたい。』

あの時の目。私が何をしても褒めてくれなかつた。だから、途中で諦めたの。半分血はつながつてゐけど、赤の他人。

腹違ひの妹だけど、年の離れた知り合いの女の子。

ただそれだけの関係で、私は单なる居候。そう考えるようになつてた。

『そんな人たちと縁を切りたくて、遠くの学校に入ることを決めました。離れたいと思つて遠くへ逃げたけど、知らない世界に来たんだつたら、もう会う事もないから。だから、帰りたい、つて言わないし、思いもしてないんです。』

ここまで言つて、やつぱり根っ子の部分はいつまで経つても変わらないな、と思つた。

クーンさんは何も言わない。逆に言われなくて良かつたつて思う。それに、何を言つにしても困る内容だつて分かつてゐる。

次は俺の番だ、というクーンさん。だから、俯いてた顔を上げて、クーンさんを見た。

「宰相殿がここに居たことに驚いていただろ?」

その問いかに、正直に頷く。クーンさんは、私の頭をなでる手を休

ませる」と無く、口を開けだした。

「俺は……宰相殿の養子だ。」

随分気心が知れた仲だと思つてたけど、そつてことだったのか、と思つた。思つただけで、口は挟まない。

「俺の元々の名はクーン・リッキンデル・デューク。現国王陛下は俺の腹違いの兄にあたる。」

？！

つてことは、だ。

…クーンさんって、ひょっとしなくても王族の血が流れているってこと？

うん、なんか分かる気がする。纏つてゐる空氣とか、品の良さが滲みだしてゐるから。

「母上は身分が低かつた。先王は単なる遊びだつたみたいだが、母上に手を出した。そんな関係だつたために、先王は俺の認知を拒んだ。」

私と、少しだけ似てる。親に拒まれた時、クーンさんは何を思つたんだろ？

「母が亡くなつてから、俺を引き取つたのが王家の親せきにあたる宰相殿だ。幸い兄上との仲は悪くなく、俺は兄上の役に立ちたいと

思つて今の役職にこゝに付けた。

実際は余計な仕事や貴族たちの小言で精一杯だが、これから努力して、兄上の片腕くらいにはなつてやるつもりだ。」

「すうじい。私は捻てゐつていつのに、クーンさんは田標すら持つてゐる。

さつきクーンさんが私の話に触れなかつたのと同じようじに、私もクーンさんの話には何も触れなかつた。

それから他愛もないことを話してたら、いつの間にか寝ちゃつてたみたい。朝日が覚めたら、ベッドに横たわつて布団がしつかりかかっていた。

きつとクーンさんが運んでくれたんだよね。お礼、後で言わなくちゃ。

さて、どうしたものか…

今日も一日頑張るぞ、と意気込んだはずなのに、その途端から力が抜けた。私は昨日初めてここに来たわけで。何がどこにあるか、とか、昨日来てたカスタムメイド服がどこにあるのか、とか。諸々知らない。

つまり、どうしていいのか分からなってことにつながる訳だ。  
と、タイニング良く昨日のメイドさんがやって来た。

「よくお眠りになられたようですね。本当ならばもつ少しお休みしていただきたいところですが、クーンさまと共に城へ行くようですから、失礼ながら起こしに参りました。」

私なんかに敬語使わなくとも、つて思つたゞ、おもてなしは受けるもの、だから。私はありがとうございます、と礼を取つた。

顔を洗つて着替える。やつぱりカスタムメイド服は田立つりじへ、  
気にしていた女中さんごどう作つてあるのか教えて欲しいと頼まれ、  
それには承した。

そのまま誘導されて大広間へ。

朝ごはん、らしいです。

でも…やつぱり広すぎー…

みんなでご飯を食べるには、少々（大分）広い部屋。パーティー  
を催す際に、この位の広さがなきやダメなんだつてさ。貴族つて大  
変なんだね。

お誕生日席に宰相さま、その向かいにクーンさん、右手に奥さま  
がいる。私は失礼ながら、空いてる席に腰を下ろした。

「ネイ、よく眠れたか？」

おはよつゞやこめす、と暫つてから質問に答へる。挨拶、大事だからね。最優先。

『はい、とても。』

宰相さまは満足げに領き、奥さまを紹介してくれた。

奥さまは、まさに貴婦人、そのもの。微笑みも言葉遣いも、所作も。全てが柔らかくて優雅。

「クーンが女性を連れてきたと聞いて、とても驚きましたけど、とても愛らしい方で嬉しく思いますわ。」

クーンさん、モテそうなのに、女人連れて来たこと無いんだ。

あ、でも、生活してて中世ヨーロッパ的な雰囲気（映画情報）だつたから、私のいた現代とは違つて、簡単に交際するつてわけにはいかないのかもね。

「これからも、クーンをよろしくお願ひしますね。」

頭を下げられて私もつられる。

『私、クーンさんにお世話になりっぱなしなので、少しでも力になれるように頑張ります。』

頭を上げるようになに声をかけられる。だから、ゆっくりと上げると、微笑み続いている奥さまがそこにはいた。

「母上、公務の時間が迫っています。ネイを苛めるのはそのくらい

「してあげて下せ。」

いつの間にか宰相さまとクーンさんは「」飯を食べている。いつもクーンさんが私の所へ来てくれていた時間を考へると、確かに時間ないかも。

私は慌てて手を合わせてから食べ始めた。

「まあ、私は苛めてないわ。心外ね。情けない息子のことをお願いして何が悪いのです？」

あら？ 意外とおつとりしてないかも。

ズバズバ言つ奥さまに、クーンさんはたじたじだ。面白いもの見れた気がする。

奥さまに口撃されてくるクーンさんを見て、私と宰相さまは田を含わせて笑つた。

「やりこつもの事らし。」

一方的な口論になつていて、私はのんびり宰相さまとお喋りしながら朝食を取ることができた。

『奥さま、意外と毒舌なんですね。』

馬車に揺られながら、ぐつたりしてるグーンちゃんに話しかける。朝から随分とお疲れなようだ。

『疲れてるやうなので、後で甘い物でも用意しますね。あ、それと、今日のお匂いさんも用意しますか?』

「甘いものはあまり好きではないのだが……」

甘いものが好きじゃない?!.ダメダメ!疲れてるんだから、少しでも糖分とりなぐちや。

「匂は任せる。ネイの作るものは面白いし、美味しいからな。」

そう言られて嬉しくなつて、いっぱいの笑顔でハイと答えた。

昨日、あんなこと話したのに、変わらない態度。嫌われてない気がして嬉しかった。

城に到着してまず出迎えてくれたのはミコア。ミコアに連れられて昨日の女中部屋へ。そこに居たマーサさんは笑顔で迎えてくれた。

「昨日はよく眠れたかい?』

『はい。』

それはよかつた、と言い、クーンさんに早速お茶を持つていくよう言われた。

力チャ力チャを立てながら用意していると、今日も陽気なエルさんが鼻歌交じりで登場。朝の挨拶を交わしたのに、まだそこに留まつて私を気にしている。不思議に思つていると、今日もクーンさんの昼食を作るのか尋ねられた。

「ネイの料理は興味深いし勉強になる。是非作るところを見せてくれ。」

なるほど。マヨの「こと」まかしちゃつてたから、そりや得体のしれないもの作る人が気になるのも仕方ないよねえ。

『了解しました。また後ほど「こと」に参ります。』

カラカラとワゴンを押して向かう途中、やつぱりカスタムメイドは目立つみたいで、じろじろ見られたけど、たじろぐことなく丁寧に礼をとつてから進む。

世の中気になくていいものは気にしない。人の視線なんて一番気になるけど、文化が違うことに居るんだもん。気にしたら負け。

視線なんて素知らぬふり、を通してクーンさんの執務室に着くと、お茶を丁寧に淹れる。

仕事前だもんね。

美味しいお茶で心を落ち着けてからの方がいいはず。

湯気の上がる紅茶を持っていき、優雅に呑むクーンさんを眺める。

ほんと、いい男。恋人の一人や一人、いてもおかしくないだろーに。

クーンさんがお茶を飲み干そうとしたその時、ノック音が広い部屋に響き渡る。どうやら仕事の時間みたい。

私は急いでカップを下げる。扉は返事を待たずに関いた。せっかく慌てて昨日用意した机に着く。説明を任せてもうつことになつてたから、ぐつと身構えた。

『おはよひびきやります。』

丁寧にまずお辞儀。次に頭を上げて、笑顔を浮かべる。

『各省の名が書いてあるカードの所に書類を置いていただきたく思います。クーン魔道師さんに説明が必要な方は、そちらへお並びください。』

何ら訝しげな顔をされる。

うん、そんな気はしてたから、覚悟はできてる。だから、私は笑顔を絶やすことなくそうするように促す。それでも反発する人は必ずと言つていいほどいるわけで。

早速その声が上がった。

「なぜ我々がそのような事をしなければならない。」

おおつと。

一際高そうな生地で作られた服を見に纏つてゐるおじさんと、お小言ちやうだいしましたー。

あの人はきっと、身分が高い人。

近づいてきて私の前に立ち、じろじろと頭のてっぺんからつま先まで見る。

…省の名前、見えた。だからこそ、この人がなんでこんな態度を取るのか、ここで納得した。

曲がりなりにも、クーンさんは省をまとめる筆頭ぐらいの地位に居るはず。若いからと書いて、失礼な態度を取つていいはずがない。

昨日、ミコアにいろいろ聞いといて正解だった。

「この人は元々議会に居た人が多く、王族に反発氣味。今の王に代替わりした時に、失脚させられたのを根に持つてゐるんだって。

…自分が悪いことしたくせに。

いかん、いかん。

自分の黒い感情を心の引き出しに收めつつ、笑顔を引きつらせないように氣を引き締めた。

『失礼ながら申し上げさせていただいてもよろしいでしょうか?』

そう言つてから、さらに続ける。言つたのは建前。返事を待たないまま自分の思つた事を述べていく。

反論させない勢いで。

『クーン魔道師さまが毎日膨大なお仕事をなさつておる事はご存知ですよね。』

あのお方は大変勤勉な方で、自分の持てる力、全てを使ってこなそうとするお方でいらっしゃいます。

それ故に昼食を取る時間も惜しんで働いておられます。』

「だが…」

喋らせませんけど、何か?腹黒万歳ですよ。

こんなことで自分の性格の悪さが役に立つんなら、露見するのだつて恥ずかしくない。だいたい、私が言つてるのは正論だもん。それを盾にするくらいの事はできるはず。

『立場的にそう言つ方なのは存じ上げております。』

しかし、どんなに努力を惜しまず、働き者である方も、人間は人間なのです。

体力的にも精神的にも、必ず限界があるのです。それに、クーン

さまは書類調整のお仕事に留まるだけでなく、騎士団長としても働かなければなりません。それにも関わらず、現在はそのお時間がございません。

夜中までかかって机に…り付き、翌朝には誰よりも早く登城して執務室に届らつしゃられる。食事もままならず、睡眠もままならない。

それでもこのお方が倒れないとでもお思いでしょつか?』

ぐつと押し黙る顔を満足して見つめる。その間も笑顔を絶やさない。

後ろの人、引かないでー。私は事実を述べてるだけだからー。

「…それでも、それが仕事といつものだりつ。」

まだ言つか。まだ言いくるめられなくひや氣が済まないのか?そーか、それなら受けて勝つのみ。

またにっこり笑つて続けた。

『先程も述べましたように、クーンさまの仕事は机上のみではないのです。

机に縛り付けられている時間を短縮できれば、クーンさまの身体を労わる時間が出来ますし、そりなる騎士団の強化にも希望が望めます。

それに、夜中に届く書類はそちらひとつでも好ましくないので

ないでしょ「つか？」

訳が分からん、つて顔すんな。いや、あんたは帰るんだろうけどさ。他の人たちは納得してくれるみたいだから、夜遅くならない方がいいと思つてるんだって。

『ちょっとしたことで時間を取られない方がいいのです。何事も効率が大切ですから、今私とこうして言い争つている時間も勿体ないとは思いませんか？』

『そう言つた瞬間に、人々は並んで書類を置いて行ってくれる。一方、私の口撃を受けたおじさんは顔を真つ赤にしている。けど、私は素知らぬふり。』

『そして腹黒いですから、追い討ち掛けますよ、純粋つぼく、天然つぼく。』

『書類を受け取つて頭を下げる。おじさんはさらに顔を真つ赤にさせて、出て行つてしまつた。』

『あら、もつと怒らせちゃつた？…ま、いいか。』

『そのことで周りの人はより一層機敏に動き始め、書類を重ねていつた。』

書類が積まれていく机を見ながら、クーンさんが説明を受けたも

のを封筒に入れる。後で分かりやすくするため。』

「いつもよりも一時間も早く列が片付いたとクーンさんが言った時、ちょっとだけ嬉しくなった。』

「その封筒は?』

ああ、これが。

『届ける書類用に作ってみました。一定量が済んだら、説明が必要なもの以外は私が配達しますね。』

「ここまで用意して、やる気満々一なのは、よかったですけど、もう書類の分類が済んでるから、やることなんて無くて。』

『…ヒマ。』

思わず独り言を。横田でペンを走らせているクーンさんを見て、嘆息した。

『クーンさん、何かお仕事ください。』

邪魔して悪いけど、暇すぎた。

昔から生徒会、バイト、勉強と忙しい事に慣れてたから、やることがないとどうも落ち着かない。

「昨日まではレーキさんと話してたから、一応はやるけどがある

た。でも、今はこの部屋にはクーンさんと私しかいない。

それに、集中して仕事しているのに、雑談なんかしていつかわくわけにはいかない。

『やることがないと落ち着かないんです。』

良く言えば動き者、悪く言えば落ち着きがない。

足をじたばたしてみる。わざと、クーンさんに椅子に腰掛けてろつて言われた。本当は女中だからつて断つたんだけど、許されなくて座らさせられたんだよね。

…思つたけど、クーンさんつて過保護？つてな訳で、手足がフリーな私は、とりあえず軽く暴れてみることにしたんだけど…

そんな事は敢え無くスルーされた。

「俺としては、届けに行かせるのも好ましくないんだが…」

え！これ以上やること奪うんだとか？…やつてられないよね、私。てゆーか、迷惑だったのかな。

そう思つて質問してみても、そつぱつひとじやないと言われて終わりだつた。なのに、渋い表情が目に焼きつぐ。

『ハ言つ意味なんでしょう…？

結局やることがなくてクーンさんの執務室を後にした。

とりあえず、女中部屋に向かつ。もしかしたら何かやることあるかもしね。と思つたのに。

「ネイさまにやらせるなんて、いくらなんでもそれだけは聞き入れられません!」

頼みの綱だつたミリアに、一蹴された。どれだけ懇願してみようとも、頑ななミリアは折れてくれない。

最終的に、は私は客人だからと断られる羽目になった。

「今日もクーンさまの昼食を作るおつもりなら、早々に厨房へ向かわれたらいかがでしょうか?」

ミリアのアドバイスは私を閃かせたけど、どうもこじで疑問。

『私が行つたら邪魔にならないかな?』

そうでなくとも城内中の人の食事をあそこで用意してゐるらしいんだもん。流石に私的欲求を満たす為に使つちゃダメでしょ。

とか何とか言いつつ、昨日は使つちゃつてゐただけどね。

「いつも紅茶を用意している場所なら、使用は可能ですよ。器具と

材料をえエルさんに用意してもらえば、何とかなるはずです。」

…エルさん、何者？てゆーか、厨房で仕事しなくてもいいの？

不思議に思つて訊ねると、続けざまに意外過ぎる答えが返つてきた。

「エルさんは料理長です。」

なに？！そんな偉い人だつたの？！

『『どうしよう！私、すごい気軽に接しちやつてた。失礼過ぎだよね？』』

「大丈夫です。」

焦る私とは裏腹に、ミコアは至つて冷静。

「エルさんは決して私たちを見下したりいたしません。“様呼びはやめてくれ”とおっしゃられて、今ではみんな気兼ねなく話すことができる、とてもよいお方です。」

そう、なんだ。うん、そつか。なんかそんな感じだよね。見ず知らずの私にまで気さくに話しかけてくれたような人だつたし。

でも。

『…料理長パシらせちゃつた…』

一番のじじつけなれ。

昨日全てを用意してくれた事を思い出す。あれは流石にひどかったよね。

“パシラセ…？”と呟くミコアに、一き使つ事だと教え、うなだれる。確かに知ら言こものだつたり、場所だつたりしたし、無理もないんだろうけど…

「エルさんはネイセーの料理の興味がおありですし、むじる手伝わせてほしこと申します。」

やう言われて、厨房まで押しやられ。エルさんを呼んでおいて、ミコアは楽しそうに去つて行つた。

「今日は早かつたな。で、何を作るんだ？用意するものな？」

キラキラした瞳にやつきの話を重ね合わせてみても、じつも料理長には見えない。

そんな失礼極まりない事を考えながらも、やるいとはやうつと黙つて、腕まくりをした。

『うーん、何作る…』

全く持つて何も考えてなかつた。でも、今日は昨日よつも時間でやせうだし。がつづり食べる時間くらこあるでしょ。

なんて、無責任なこと考えたりして。それだけじゃなく、ひやん

とお腹いっぱい食べて欲しいって意味もあるんだけれどねえ。

それに、セツセツアリアからの言葉で、お皿はレークさんも一緒に言ってたし。

うん、軽食じゃなくて、普通のご飯にしよう。

『エルさん、マヨネーズの作り方、知りたいですか？』

次の瞬間のエルさんは、まるで小さい子供みたいに大きく頷いていた。

そんなに首振つたら、もげるよ？と思いつながら、昨日とほぼ同じものを用意してもらって、順を追つて説明をしていると、やつぱり素人の私と違うエルさんは、料理人の手つきを披露してくれた。

『これ、生野菜にも温野菜にも合つんですよ。あとは炒め物、肉でも魚介類でもどんと来い、です。』

ほひ、と皿を細めて考え込んでいる。私は構わずに先に進むことにした。

鍋で骨付きチキンを炒め、水と野菜とハーブを加えて煮込む。だけど、大雑把な料理に見えたのか、意識をこちらに戻してきたエルさんは心配そうにしていた。

「ネイ、本当にそれは大丈夫なのか？」

それ＝骨。こんな料理方法は未だかつて見たことがないらしい。

『「ここから良い“ダシ”が出るんですー。』

「だし?」

もう! なんでこんなに料理基準が高くないの?!

『ダシは料理の基礎を支えるものです。これが美味しいなくっちゃ、味に深みが出ませんから。』

とか何とか言いつつ、最近見た某テレビ番組の何とかタロウさん の作り方を思い出していた。

ホント、テレビって便利だよねえ。

野菜やミニチ状の肉を練つていく。つまりはハンバーグなんだけ ど。

「うちでは、肉は単にステーキとしてしか出されないらしい。勿 体ないよね。いろいろと食べ方があるのに。」

今度、鶏団子が入ったお鍋でも作つたら、エルさんは驚いてくれ そうだな、なんて、不敵にほくそ笑みながら企んだ。

今日は残念ながらソースもケチャップも置いて来ちゃつたから、 塩コショウのみ、って思つてたんだけど。

エルさんが、サルーテとかいう、うちの調味料をかけたらい と教えてくれた。

味見してみたら、美味しい。

「こんなのがあるんなら最初から使えばいいのに、って思ったけど、どこの民族のものだから、お貴族さまたちは好まないんだってさ。

食べ物にまで上流とかそんなモノ押し付けなくてもいいのにね。美味しいものは美味しいって言えばいいじゃん。

じつにはチーズもあるつて分かつたんだけど、これもまた民族のもの：後は省略。ハンバーグにはチーズが合つ。高カロリー一万歳な感じだけど、美味しいものに目がない私には、関係ないよね。

お皿にはまだ早いから、それはひとまず置いといて、今度は甘味に移る。食材は何となく揃つてそうだけど、食感が珍しいだろうと思つてプリンを作ることに決めた。

とか思つてたまご割つたら失敗。赤いの開けちゃつたから。赤い卵は、何ともグロかつたけど、温めたミルクを入れた時点で、ピックになつて安心した。

普通のには、カラメルを下に入れた。これなら、甘いのが苦手だつて言つてたクーンさんにも食べられると思って。もう一つは、昨日迷惑をかけた人たちに渡す分。これは、上に砂糖をかけて、ブリュレまがいのものにしよう。

言葉が悪いのは、私の表現力のせい。まずいものは作つてない、はずだから、安心して欲しいところだ。

蒸し焼きにするようにオーブンに入れ、今度はスープへと意識を向ける。

灰汁を取つて、ハーブやら野菜やらを取り除く。新しく切つた野菜を入れ、塩コショウで味を調えた。

うん、コンソメスープの素を使わないで初めて作ったけど、なかなかのできだ。野菜が柔らかくなることは、いい匂いが辺りに立ち込めていた。

「…良い香りだ。」

覗き込んで、興味津々な様子を隠しもしていない。

『味見、しますよね?』

いいのか、って聞いてきたけど、どう見てもそうしてみたいって顔に書いてあるし。それに、私も味見くらいしなくちゃ、今回は保証できないしね。

小皿に少し掬うと、私とエルさんは同時に味を見る。…少し薄いかな、と思って塩を足し、もう一度味見をしてみると、今度はちょうど良かつた。

「…ネイ、こんな上手いもの、初めて食べた。」

呆然としているエルさんに、この国の料理の発展がどれほどなかつたのか、確信を得た。

思つたけど、（この世界の人つて言つてもまだ数人にしか会つたことないけど）ここの人人は新しい事に挑戦することをしない。それは、私にとつては一つの怠惰に思えた。

『何事も挑戦することが大切ですよ。未知の発見ほど面白い事はありません。』

『私のいた世界では、宇宙や過去に対してもたくさんの事が解説されて、子供たちはそれを学んでいました。それじゃ、つまんない。分からないことが分かるようになるのが、楽しい事なのです。』

「ネイ?…思い出したのか?」

「はー! そうだった。私は『記憶喪失(設定)』だった!」

今さら難しいだらうと思つたけど、何とか濁す。

『…私、今なんて言いました?』

『…言ひ訳、きつかったよね。どうしよう、なんて考えていると、タイヤマーが鳴つた。』

…助かった。私は急いでオープンを開けると、天板を取り出していく。固まり具合を確認。そして、満足。後は冷やすだけだ。

けど。

『エルさん、これって冷やせますか?』

「ああ、厨房の方に、少しだけだが、魔道を使えるものがいる。冷却の魔道をかけても、うん、すぐにでも冷えるわ。で、それは食べられるのか?」

プルプルしてくるその動きを訝しげに見ている。それでもその動

きが不思議なのか、面白いつこも見える。

てゆーか、食べ物で遊ばないでよ。

『 そうですよ。デザート、いや、おやつですね。クーンさんが随分とお疲れになつているようだつたので、糖分を取つていただこうと思つて。』

あれだけ働いてるのに、私の面倒まで見て。尙且つやんとした食事を取らなくちゃ、いつか、いや、近いうちに絶対に倒れる。それを回避することが唯一私にできるひと。

やつ使命感を勝手に持つた。

「 … ネイ？」

一人の世界から呼び戻されると、そこには知らないおじさんがもう一人。いつの間に来たんだろう。

「 で、どのくらい冷やすんだ？」

訊ねられて、困つてしまつ。基準って言つても、この温度の単位なんて分かんないし。 なんて伝わんないよね。

しばりへ考へて、それから。

『 抽象的な言い方になつちやうんですけど、山に流れる川の水、くらいですかね。

室温よりも全然冷たくて、食べる時にひんやりするくらいがいい

んですけど…伝わりましたか?』

おじさんにおずおずと言った。自分の表現力の無さに嫌気がさしたのは。言つまでもない。あんまりにも言葉があいまい過ぎたから、心配だった。

「大丈夫ですよ。」

そう言つて、にこやかな表情を浮かべたまま、冷却の魔法をかけてくれた。

魔法つて便利!見た目は変わつてないけど、器に触れると冷やつとしていた。

『あのー……』

調子に乗った私は、ピンクのプリンの表面に乗せた砂糖を焦がして貰った。本当に便利だ。

つて、貴重な力をこんなことに使うなんて、やっちゃんいけないんだろうけどね。

反省してゐるのかしていなかはさて置いて、私は感謝を行動で表した。

『おー一方とも、これ、たくさん作り過ぎちゃったんで、ようしければお一つどうぞ。』

手伝ってくれたお礼。これがお礼って言うのも、料理人の二人には失礼な話かもしれないけど、今の私にできる事はこれだけだから。

「いいのか? 実はさつきから、どんな味がするのか気になつっていたんだ。」

昨日のサンディイッチ、今日のスープの如く、エルさんは目を輝かせている。それを見て横に居るおじさんは、もっと優しく微笑んでいた。

「色が違うが、味はどう違うんだ?」

そつか。赤い卵なんて、使うの初めてだつたから、味のこと考へるの忘れてた。赤いからつて、辛い訳ないよね？

恐る恐る聞いてみたら、たまごの味 자체はあまり変わらないけど、赤いほうが濃厚なんだとか…色は私的には受け付けられないけど、どうやら味の保証はされてるみたいだ。

『黄色い方は、下にほろ苦いカラメル、といつものを入れています。クーンちゃんがあまり甘いものを好まないと言つ事で、食べやすいように甘さを控えてあります。

もう一つは、表面の飴を割つて食べていただく形になります。こちらは下にカラメルが入つていないので、少しばかり甘くなっています。』

私の説明を、エルさんはふんふんと腕組みをして聞いている。おじさんも興味を持ったのか、二つを見比べて、私の見慣れた方を手に取つた。

「…ネイ、両方食してみたいのだが。」

迷いに迷つたのか、言ひ辛そうにそう言つてきました。

「相変わらず、料理長は食い意地が張つておられる。」

おじさんはやつぱり笑顔。しかし、言葉には確實にからかいが含まれていた。年の功つてやつかな。

「ち、ちがう！両方の食感を確認してみたいだけだ！」

焦つてゐるのか、噛んでるし。顔も赤い。おじさんがエルさんをからかうの、なんか分かるなあ。反応が面白い。

ほほえましく思いながら、私は両方勧めた。

『どうぞ。食べてみてください。私も感想が聞きたいですから。今お茶を入れるので……あ、時間大丈夫ですか？』

勝手に話を進めようとしてたけど、一人とも厨房に戻らなきやいけないはず。でも、5分や10分は大丈夫だから、と近くの椅子を引っ張ってきて腰掛けていた。

それを見て安心。今まで一番手際よくお茶を淹れ、二人の前に出す。スプーンを渡すと、二人は早速食べ始めた。

「ほひ……これは。」

さつきまでは目が笑つていて細かつたのに、今は真ん丸く見開かれていた。

「ネイ、流石だ。美味しいよ。このプルプルとした食感。ほろ苦いカラメル。冷たさもちよつといい。」

さつきまでの焦つたような姿はどこにもなく、しっかりと味を確かめるようにしていいる。料理をしている人のそれだった。

プロに批評されるのって、ちょっと不安。

次の言葉を待つていると、もう一方のプリンに手を付ける。上を

割っている姿は、何とも楽しそうだ。それから、一口含み、味わう様子を見せた。

「食べる前も楽しく、食べてからも、一つの食感が楽しめるとは面白いい。」

お気に召してくれたようですね。

その表情に私は安堵した。

「ネイ、悪いんだが、これを三つほど分けてくれないか？是非とも食していただきたい方がいるんだが。」

それは全然構わないんだけど、気になることが一つ。

さっきまでの碎けていた口調が、“食していただきたい”と丁寧になつた事だ。身分の高い人に食べてもらうのかなつて、不安になる。不安に思つたことは、見事に顔に表れていたらしい。

「量が減つてしまつたのを心配してはいるのか？」

返事に困つている私は、そう思われていつたのか、と弁解するために口を開いた。

『量は構わないんですけど、もしも高貴な方が口にするのなら、お口に合わないんじゃないかなと思って。

クーンさんとレークさんと私、あとリコアとマーサさんと宰相さまにも上げたいから…最低六個残つていれば構いません。けど、新鮮なものを提供したいのであれば、もう一度作りますけど。』

「そうか！ それならば、クエーカーの方で、下にあの苦いカラ… 何んとかってのを入れてくれ！」

“カラメル”が言えなかつたね。てゆーか、私は私で聞き取れない単語に戸惑うばかりだ。

“くえつ…？”と、何かのない声みたいになつちゃつたけど、私からしたら発音しにくいつたらありやしない単語だつたから仕方ない。

「クエーカー。赤い方の卵だよ。」

ああ、またあの血みたいな卵を見ることになるのね。少し凹みつつも、食後のデザートだつて事なので、すぐに取り掛かつた。

付け合わせと、ハンバーグも同時進行でし上げつつ、赤い卵は目を逸らしながらかき混ぜる。

うん、いつか…要は“いつか”慣れる」と目標に頑張ればいいよね。

クーンさんたちのお昼ごはんを仕上げ終わると、ちょうど良く昼時のチャイムが鳴り響いた。その時、いつの間にかエルさんもおじさんもいなくなつてゐる事に気付き、驚く。集中して、いつになくなつたのかも分からなかつた。

そう思いつつも、クーンさんもエルさんも待つてゐると思い、食事をワゴンへと乗せる。

温かいうちに持つてこきたいから、懶がなくひや。

けど、そこでエルさんに声をかけなくひやと氣付く、厨房に顔を出すと、とんでもない状況が広がっていた。

「おー、早くこれ片付けるー！」

「パンが出ていないぞー！」

「うへへ…まさに戦場。

私はここじゃ働けないな、と思つた。

「ネイー…どうしたんだ？」

あまりの圧巻に、呆然としていた私に声をかけ、エルさんはさつきの女中専用の台所へと来てくれた。

『プリン、できました。後は冷やすだけになつていますから。』

「わかつた。わざわざすまんな。後でまた話そつ。今は落ち着かな  
いからな。』

それは見たから知つてます。みんな忙しそうだつたし、今はエル  
さんがいないからもつと大変だろ。

私は了解し、エルさんを厨房へと追い返した。それからワゴンを

カラカラ押して執務室に入ると、レークさんが出に入る。

「来てたんだ…今って忙しいって言ってなかつたつ…あ、そ  
う言えば、さつきレークさんを探してる声が聞こえたかも。

『レークさん、また逃げて来たんですか？』

書類をどけ、皿を並べる。ついでにお茶も淹れて、とやる事を行  
キパキとする。まだ一皿だけ、私って案外順応性高いのかも。

『やつしていると、本当に女中さんよりですねえ。それよりも  
また』とは聞き捨てならないです。

あの人たちは昼食の時間でさえ、私を神殿に閉じ込めようとする  
んですよ？』

必死な訴えに、それほどいたいへんなのかと感心しつつ、用意が終  
わつたので顔をかけた。

『お仕事お疲れ様です。そのお話はひとまず置いておいて、食事に  
いたしましょう。せつかくですから、温かごつちに食べていただき  
たいのです。』

そういふと、椅子にもたれかかっていたレークさんは姿勢を正す。  
一方のクーンさんは書類からまだ手を話していなった。

『放つておきましょ。一段落するまではきっと動きませんよ。そ  
れより、今日は何を作つてくださいたんですか？』

『今日はハンバーグとカラダとスープです。昨日よりも時間があり

そうだったので、普通の食事の様式にしてみました。』

レークさんにハンバーグの説明をしていると、クーンさんがようやくこちらにやって来た。今日は昨日ほど疲れていないみたい。顔色がだいぶ良く見えた。

『私も』一緒にいいですか?』

とか何とか言いつつも、実はちゃんと自分の分も用意してきていた。ってなわけで、早速了承を貰って席に着く。と

『『『』』』

三人で手を合わせてそう言った。合わせた訳じゃないのに、タイミングがぴったりで吃驚。けど、私に合わせてくれるみたいだつたから、ちょっと嬉しかった。

『そう言えばミコアから言伝を聞きました。レークさん、私に何の話があるんですか?』

食事をしながらいつものように談話する。私はこの時間が大好きだ。

私の事、事情を分かってくれている人たちだから、なおさら安心するんだよね。

『ああ、ちゃんと伝わってこるようついで安心しました。』

一人、クーンさんだけが蚊帳の外で、眉間のしわを一層深くしている。そのうち、跡が付いちやいそう。

「祭が近づいてきているので、そろそろ鏡盆に触れていただこうと思いまして。クーン殿、時期的にも良い頃合いだとは思いませんか？」

「…そうだな。人に紛れ、人知れず行つのが無難だろうな。夕方から夜に掛けてがいい。」

夜、人がいない時間。そんな時間のお城つて怖そつだなあ。なんて、自分の事なのに、他の事を考える。

てゆーか、鏡盆とやらに触れた時に何か起こらなきやいいけど。宗教上のものつて、なんかいわく付きで怖そつだよねえ。

箸を進めながらも、心は「」あらず。脳内に留まって、自分だけ物思いに耽つていた。

触ると、元の世界に戻つちゃう、とかだつたらどうじよつ？…それだけは、マジ勘弁。

「ネイ？…どうした？」

せつときよりも柔らかい表情のクーンさんを田の前にして、私はにへらと笑つしかなかつた。

『何ともないです。や、食べちゃいましょう。』

そう促す。だって、レークさんがいる前では話せない。何だか知らないけど、勢いでクーンさん喋つちゃつた、私の黒い内面の事

だから。

それに、これ以上私の暗いとこ見せたら、今度は嫌われやうかもしれない。そうしたら、私はこの世界でも生きていけない。

「…本物…」

『あ、いこじやないですか!』

明るく振る舞う。暗いと、本当に心配やれりやうからねー。それ、いつののを隠すのよ、昔から得意だ。

## 悪魔の笑み

『今日は甘味も用意しましたよ。クーンさんも食べてくれますよね？』

やうやうと念押し。“ね”は強調して言つた。甘いものだけど、有無を言わざずに食べもらいますよ、つてね。

まるで何も聞いていなかつたかのように箸を進めるクーンさんを、レークさんと一人で見合つて笑つた。

お皿が綺麗に片付いたころ、私はプリンを出した。でも、生憎室温くらいになつちゃつて。がつかりした。

せつからく冷やして貰つたの。

『すみません。これ、さつきまでは冷たかつたんですけど。』

「冷やして食べるものなのですね。」

レークさんは面白がりに観察している。まだ、異世界の研究は諦めていないんだつて。

『プリン、とこつね前のお菓子です。黄色い方は少し甘さを控えてありますから、クーンさんにも食べられると思います。』

笑顔で田の前に置く。やつぱり一人には珍しく映つたようで、不思議な眼差しを向けていた。

「冷やそつか？」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。だけど、クーンさんが魔道師だつた事を思い出す。だから、お願ひして冷やして貰つた。

やつぱり魔法つて便利！

一人に食べるよう促して、私はお茶のお代わりを注ぎ入れる。でも、言われた訳でもなく、一人はすでに手を付けていた。

「これは…おいしいですね。」

ここにこ食べてくれるレークさんは、ちょっと子供みたいだ。お代わりを要求され、もう一つ追加。それも美味しそうに食べてくれている。

『クーンさん、どうですか？』

さつきから無言だし、やつぱり甘過ぎてダメだつたのかも。そう心配になる。でも、そういうなかつたみたい。

「トに入つてするのがほろ苦くて、食べやすい。ですが、異世界の菓子は作り方も違つんだな。」

感心しているみたいな悪いんだけど、反応が今一理解できな。あれほどお菓子を嫌がつていたのに、パクパク食べ進めている姿はどうも不自然だ。

「お菓子って、一体どんな感じのかな。」

「甘さ控えめのがいいですね。これならクーンさんにも食べられて調度良いでしょ。」

やつぱり、全然違うんだ。だからエルさんが興奮してたのか！

てゆーか、エルさん、やつぱりいつなりちゃんと教えとこでよー。

『まあできたら、気にならないはずがない。

』『お菓子って、どんな感じのものなんですか？』

「何と言つますか、甘い、ですね。」

話をクーンさんに振つた。でも、反応は一人とも同じものだつた。

「甘い、な。」

なんすか、その一言で終わらせちやう感じ。悪いけど、私には全然伝わつて来なかつた。

『もう少し詳しく教えてくれませんか？よければ料理の参考にしたいんですよ。』

『お菓子、ですか…』

一人は顔を合わせて嫌そうな顔をしている。それから、遠くを眺めるように、視線が散つた。

「俺はとにかく見たくない。よく貴族の娘たちはあんなものを食

べられると困りますな。」

脛間のしわせ、今まで一番深かった。それほど嫌いなのがよく分かる。でも、そんないつて思えるくらいの反応だった。

「私はクーン殿ほどではありませんが、1、2年に一度食べたいと思つか、思わないかとこつほどですね。たいてい食べてから後悔しますけど。」

それって、どういう意味？ 美味しいの？ まずいの？

訳が分からなくて、尋ねると、一人は声を合せて言った。

「「甘いんだ（です）」。」「

『甘い…？ お菓子なんだから、当たり前ですね？』

甘いお菓子なんていつぱいあるはず。文化が違うんだから、ポテチみたいなちょっとぱいお菓子があるとも思えないし。

「いや、甘過ぎるんだよ。」

「やうなんです。何事もほどほどが大切だと、あれを食べると甘いのも思っています。」

その反省は、どうなの？ 甘いって、甘いだけでしょ。そこまでつっぱねる理由でもあるのかなあ。

「いの言われても、分からないのが当たり前ですね。では、食べてぜひ一度苦痛を味わってください。」

…それは、笑顔で言ひやリフじやないと思ひ。てゆーか、敬語で言わると余計怖いって。

そう考へていたけど、笑顔だけみてると、レークさんはひとつも優しそうに見えるから、正直本心が読めない。

結構長い間一緒に居たけど、掴めない人だけはよくなつて、かつていた。

自分の興味があることは、とにかく追求する人だ。でも、そういうことには面白だとも言える。

同族のにおいがしないでもないけど、レークさんが大人だから、長い歳月をかけての底知れない深さがあの笑顔に垣間見えてるような気がした。

きっと、笑顔の分だけ、あっちの方が厄介なんだろうな、なんて思つ。

「そんなに見つめてくれると、嬉しい事ですね。」

心から思つてもいよいよ、歯痒い台詞をありがとう。私も笑顔で応戦して見たけど、やっぱり叶わないほど完璧な笑顔が板についていた。

「苦痛を味わつてみるには、そのお菓子が必要ですね。」

笑顔で言つて席を立つと、廊下に出て女中の一人に声をかけてきたようだつた。ここにそのお菓子を持ってくるように、つて。

そこまでして、一人が言つ苦痛を味合わなくともいいんだけどなあ、とは思ったけど、好奇心には勝てない。

それに、レークさんのお遊びにつきあつてみても面白いんだけないかなって思った。でも、私はMじゃない。日頃のお礼つてだけ。置かれた。のは良いんだけど。

『なに、これ?』

そう思わず呟きが零れていた。

「ティレ・ターラ、といつ一般的なお菓子です。」

皿を背けるクーンちゃん、笑顔のレークちゃん。そして私は皿が点になつてゐるに違いない。

三者三様の反応がある部屋の中、一番注目を注がれているそのお菓子は、見事なまでのお色だつた。

今までだつた、食材とかで変な色は見慣れてた。だけど、これは流石に驚愕の域だ。

ピンク、黄色、水色、黄緑。見事なまでの螢光色の塊が、お皿に並べられていた。

一口サイズの丸いそれは、食べるにはどうも抵抗がある色をしてゐる。アメリカとかのお菓子みたいな色だ。

『これが…お菓子?』

無意識に出た咳きは、クーンさんが拾つて、そうだと教えてくれた。でも、心は放心状態だ。

「や、どうい。」

…悪魔の笑みだ。

神殿につかえている、力のある神官だと云つその人の笑みは、見すれば天使の笑みかもしれない。

…だけど、今の私には悪魔の笑みにしか見えない。

これなら、常に無表情か、怖そうに眉を顰めているクーンさんの表情の方が、優しげに見えるよ、私。

「遠慮なさいづ。」

してませんよ、遠慮なんて、いつも簡単に分かること。声にならない叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入

『？？…・・・つ…』

それが失敗だったなんて、いとも簡単に分かること。声にならない叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入

つていなかつた。

さつき飲んじやつたんだつた！

仕方がない方、必死に目で訴えてクーンさんのお茶を横取りする。私がそれを飲み下した時のクーンさんの表情は、憐れんでいよいよに見えた。

「大丈夫か？」

そんな訳もなく。私はワゴンまで行くと、新しいお茶を渋くなるくらいにして、カップに注いだ。

「人のお茶を盗つて飲むなんて、ネイさんはお茶目さんなんですね。」

お茶目とか、そんな事言つてられるレベルじゃない。果たして、これをお菓子と呼べるんだろうか。

私は未確認物体をじとーと半眼で睨みつけた。

「どうでした？」

相も変わらず「口」一「口」しているレークさんは、腹黒さが全開だ。憐い感じの男の美人さんなのに、残念過ぎる。一本の凶太い神経が見える気がした。

お茶用意した方がいいつて、教えてくれてもよかつたんじゃないの？

さつおのお菓子と同じよつて、今度はレークさんを睨みつけた。でも表情は変わらない。私は諦念の感を抱いて、深く嘆息した。

『砂糖の塊よりも甘くて、衝撃的でした。てゆーか、まだ歯が痒い気がします…』

わう言つて自己確認をしあやつた所為か、歯を磨きたくなつた。「歯が痒いとは、あまりにも適切な表現ですね。で、これで分かりましたか? ネイさんのお菓子といひけりのお菓子はかなり違つのですよ。

ネイさんのものなら、毎日でも食べられますよな、クーン殿?』

クーンさんは小さく頷いた。でも。

…嘘だね、絶対。

いつか、クーンさんが気に入ってくれるよつなお菓子を作れたらいいなつて、今は純粋にそう思える。

それに、そんな行動一つにもクーンさんの優しさが見えた。そして、それが倍増して見えるのは、隣に座るレークさんの所為だと言つことは、絶対否定できないだろつ。

てゆーか、まだしてゐんだけど。レークさんを遠くからの中。

昼休みはもう終わつてゐるんだがつて、声が悲痛そつて聞こえるのは、私の彼らに対する憐れみだけじゃないと思つ。

でも、今日は昨日と違つたことが起つた。

「わへ、私はお暇いたしましょ。」

優雅に立つて、綺麗な笑顔を浮かべて礼をとる。そして、片膝で立つと、私の手の甲にキスをした。

「また後ほど会こましょ。是非夕餉もネイさんの手で作っていただけると嬉しいですね。では、失礼。」

また、貴公子のほうへ去つて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0585x/>

---

異なる世界で

2011年10月10日15時26分発行